平成19年度

大阪市内埋蔵文化財包蔵地
発 掘 調 査 報 告 書

2008.8

大阪市教育委員会
(財)大阪市文化財協会

例　　言

1．本報告書は平成19年度の国庫補助事業による大阪市内埋蔵文化財発掘調査の概要を集めたもので、平成20年度事業により作成した。

2．これらの調査は大阪市教育委員会が(財)大阪市文化財協会に委託して実施したものである。

3．本報告書の執筆は(財)大阪市文化財協会　南秀雄の指揮のもとに各々の発掘担当者が担当した。その氏名は各報告に記してある。

4．本報告書の編集は大阪市教育委員会文化財保護担当において行った。

目次

I　北区
同心町遺跡D地点発掘調査（DC07-1）報告書・・・・　3

II　福島区
野田城跡伝承地発掘調査（NO07-2）報告書・・・・　15

III　中央区
大坂城下町跡発掘調査（OJ07-4）報告書・・・・　27
大坂城下町跡発掘調査（OJ07-9）報告書・・・・　33
南船場二丁目所在遺跡発掘調査（OJ07-6）報告書・・・・　37
大坂城跡発掘調査（OS07-16）報告書・・・・　41

IV　天王寺区
北河堀町所在遺跡発掘調査（KC07-2）報告書・・・・　51
難波京朱雀大路跡発掘調査（NS07-2）報告書・・・・　57
大坂城跡発掘調査（OS07-2）報告書・・・・　63
四天王寺旧境内遺跡発掘調査（ST07-2）報告書・・・・　69
上本町遺跡発掘調査（UH07-1）報告書・・・・　75
上本町遺跡発掘調査（UH07-4）報告書・・・・　79
上本町遺跡発掘調査（UH07-6）報告書・・・・　91

V　東淀川区
摂津国分尼寺跡発掘調査（KN07-2）報告書・・・・　97

VI　旭区
森小路遺跡発掘調査（MS07-2）報告書・・・・　103
森小路遺跡発掘調査（MS07-3）報告書・・・・　109

VII　住吉区
苅田4丁目所在遺跡（KL07-2）報告書・・・・　115
遠里小野遺跡発掘調査（OR07-1）報告書・・・・　123

VIII　東住吉区
桑津遺跡発掘調査（KW07-3）報告書・・・・　131
住道廃寺跡発掘調査（SJ07-1）報告書・・・・　139

IX　平野区
平野環濠都市遺跡発掘調査（HN07-3）報告書・・・・　151
瓜破遺跡発掘調査（UR07-6）報告書・・・・　155

Ⅰ　北　　区

同心町遺跡D地点発掘調査(DC07－1)報告書

・調査個所　大阪市北区同心1丁目7－2・8－3
・調査面積　45㎡
・調査期間　平成19年4月9日～4月16日
・調査主体　財団法人　大阪市文化財協会
・調査担当者　文化財研究部次長　南秀雄、黒田慶一、寺井誠

〈調査に至る経緯と経過〉

同心町遺跡は1996年に発見された弥生時代の遺跡で[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1998]、北区同心2丁目を中心に半径100mの範囲が大阪市の埋蔵文化財包蔵地に指定された。また、2002年には同心町遺跡の指定範囲外の北側で発掘調査が行われ、弥生時代から近世にわたる地層や遺構が確認されて、弥生時代中・後期および奈良時代の遺物が多量に出土したことから、遺跡が北側にも拡がることがわかってきた。

土地条件図によると同心町遺跡は上町台地の北端より砂嘴状に突き出した天満砂堆上に立地している[建設省国土地理院1983]。この砂堆上には北側の豊崎遺跡や本庄東遺跡といった古墳時代前期の集落遺跡や、南側の天神橋遺跡や天満本願寺跡といった古墳時代中・後期の遺構・遺物が確認されている遺跡があり、広域に遺跡が分布している。

図1　同心町D地点周辺の遺跡

今回の調査地点は同心町遺跡の中心から400m南に位置する(図1・2)。2007年1月23日に大阪市教育委員会によって試掘調査が行われ、現地表下約2mで弥生時代の包含層および遺構が確認されたことから、敷地の中央東寄りに南北方向の調査区を設定し、本調査を実施することとなった(図3)。

まず、4月9・10日に重機掘削を実施し、現地表面から約1.5mまでを除去した後、人力によって掘削し、遺構の精査に努め、適宜実測と写真撮影を行った。その結果、弥生時代および中世の遺構を検出し、4月16日に現地におけるすべての調査を完了した。

なお、図1・2は座標北、それ以外の平面図は磁北を方位の基準とした。また、水準はT.P.値(東

図２　調査地位置図

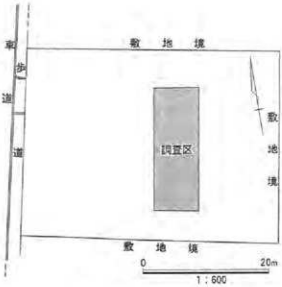


図３　調査区位置図

京湾平均海面値）を用い、本文・挿図中ではTP＋○mと記す。

〈調査の結果〉

１．層序

ｉ）層序（図４・５）

第０層：現代盛土と第２次大戦時の空襲による焼土からなり、層厚40cmを測る。調査区北半には被災した地下室が存在することから、第4b層直上まで本層がおよんでいる。

第１層：黄褐色（2.5Y5／4）粗粒砂混りシルト層で、層厚20cmである。

第２層：暗オリーブ褐色（2.5Y3／3）小礫含む粗粒砂層で、層厚10～30cmである。

第３層：オリーブ褐色（2.5Y4／4）粗粒砂混りシルト層で、層厚25～60cmを測る。調査区南東部の本層下部は、暗オリーブ褐色（2.5Y3／3）粗粒砂含む細粒砂である。

第4a層：褐色（10YR4／4）粗粒砂含むシルト層で、層厚20cmである。

第4b層：黒褐色（2.5Y3／2）シルト含む細粒砂層で、層厚20～40cmである。

第4c層：褐色（10YR4／4）～暗オリーブ褐色（2.5Y3／3）中粒砂～粗粒砂混りシルト層で、層厚10～20cmである。一部に細粒砂の水成の薄層が観察された。土師器・瓦器の細片を含むことから、中世に形成された地層と思われる。

第５層：黒褐色（10YR3／2）粗粒砂混りシルト層で、層厚20cmである。弥生土器を多く含み、上面で溝群SD102～104・107・109～113や土壙がある。

第６層：上部は黄褐色（2.5Y5／3）シルト含む粗粒砂で、下部は細礫混り粗粒砂の水成層である。上面に弥生時代中期の遺構がある。

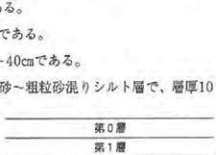


図４　地層と遺構の関係図

2．遺構と遺物

1）弥生時代の遺構と遺物

第6層上面で土壙や溝が検出された。

SK201　東西2.3m、南北1.3m、深さ0.2mの土壙で、黒褐色(2.5Y3／2)シルト混り粗粒砂で埋没する。また、埋土を洗浄したところ、魚骨と思われる骨片(種類は未同定)やサヌカイトチップ、炭化材の破片が回収された。

出土遺物には弥生土器壺1および壺2がある。1は口縁端部にキザミメが施され、口縁部は緩やかに外反する。外面はタテハケ、口縁部内面はヨコハケで仕上げられる。2は広口壺の口縁部で、内外面ともナデで仕上げる。これらのはいずれも畿内第Ⅱ様式に属するものである。

SK202　SK201の底面で検出された土壙で、東西0.7m、南北1.0m、深さ0.2mある。黒褐色(2.5Y3／2)シルト混り粗粒砂で埋る。

出土遺物には弥生土器壺3～5がある。いずれも口縁が緩やかに外反するもので、畿内第Ⅱ様式に属するものである。

SK203　東西1.4m、南北0.8m、深さ0.2mの土壙で、底面に小さな凹みが集まって凹凸をみせる。遺物を含まず、倒木の跡と思われる。

SK204　SD201に切られる一辺0.9m、深さ0.1mの土壙である。

SK205　SK206に切られる東西1.5m、南北1.4m、深さ0.1mの土壙である。埋土を洗浄したところ、サヌカイトチップや炭化材の破片が回収された。

ここからは弥生土器壺7、鉢8が出土した。7は口縁端部の下端にキザミメが施される。8は口縁部が明瞭に屈曲し、口縁端部は外側に面をもつ。前者は畿内第Ⅱ様式、後者は畿内第Ⅲ様式に属するものである。

SK206　長径1.7m、短径1.1m、深さ0.2m

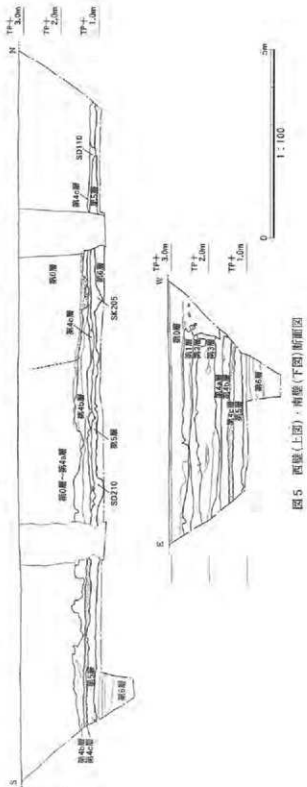


図5　西壁(上面)・南壁(下図)断面図

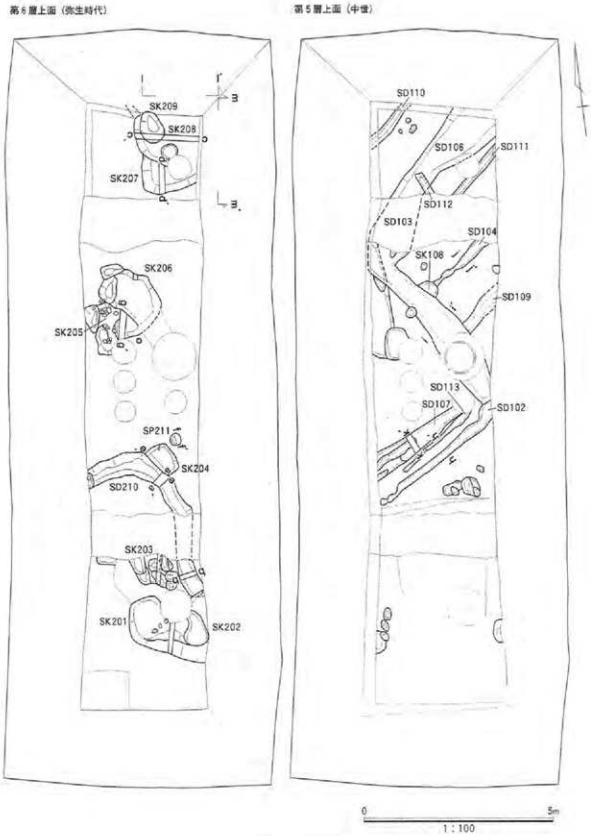

第6層上面（弥生時代）
第5層上面（中世）
SK209
SK208
SK207
SK206
SK205
SP211
SK204
SD210
SK203
SK201
SK202
SD110
SD106
SD111
SD112
SD103
SD104
SK108
SD109
SD113
SD107
SD102
0
5m
1：100

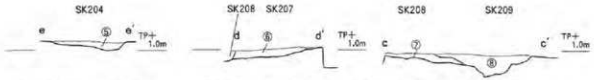
図6　遺構平面図

①：暗褐色(10YR3／3)シルト混り粗砂粒

②：黒褐色(2.5Y3／2)粗砂混りシルト

③：暗褐色(10YR3／3)シルト混り粗砂粒

④：黒褐色(10YR3／2)シルト混り粗砂粒

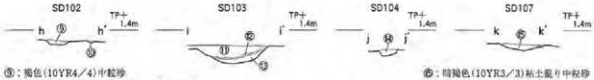


⑤：黒褐色(10YR3／2)粗砂

⑥：黒褐色(10YR3／2)粗砂砂混りシルト

⑦：黒色(10YR2／1)粗砂砂混りシルト

⑧：黒褐色(2.5Y3／2)粗砂砂混りシルト



⑨：褐色(10YR4／4)中粒砂

⑩：にぶい黄褐色(10YR5／4)粘土混り中粒砂

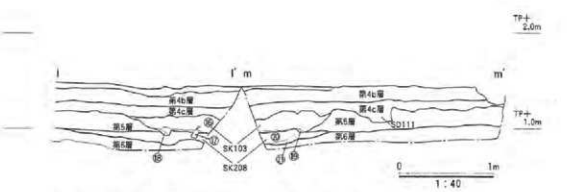
⑪：褐色(10YR4／4)シルト混り粗粒砂

⑫：にぶい黄褐色(10YR4／3)粘土質シルト

⑬：暗褐色(10YR3／3)粘土混りシルト

⑭：褐色(10YR4／4)シルト混り粗粒砂

⑮：暗褐色(10YR3／3)粘土混り中粒砂



⑯：黒褐色(2.5Y3／2)粗砂砂混りシルト

⑰：オリーブ褐色(2.5Y4／4)粘土質シルト

⑱：暗オリーブ色(5Y4／4)粘土質シルト

⑲：暗オリーブ色(5Y4／4)粘土質シルト

⑳：黒褐色(2.5Y3／1)シルト混り粗粒砂

㉑：黒褐色(2.5Y3／2)粗粒砂

図7　遺構断面図

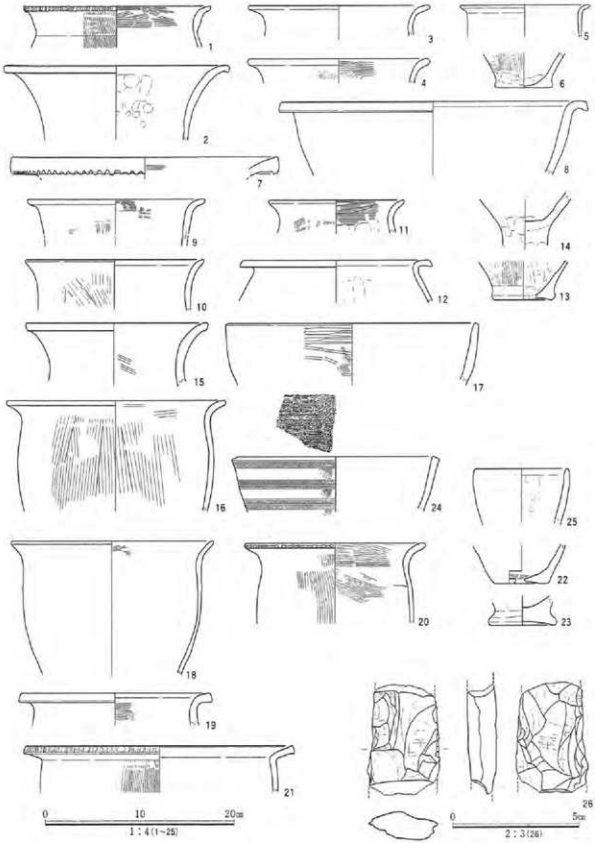


図8　出土遺物実測図

SK201(1・2)、SK202(3～5)、SK205(7・8)、SK205(21)、SK208(9～14・26)、SD210(15～17)、第5層(18～25)

の土壙で、西肩に小土壙がある。黒褐色(10YR2／2)粗粒砂混りシルトで埋る。

SK207　SK208に切られる一辺1.4m以上、深さ0.1mの土壙である。埋土を洗浄したところ、サヌカイトチップや炭化材の破片が回収された。

出土遺物には弥生土器甕の底部6がある。底部は薄く仕上げられ、内面にユビオサエが残る。外面にはタテハケが施される。

SK208　直径1.8m以上、深さ0.1mの土壙で、SK209に切られる。埋土を洗浄したところ、魚骨と思われる骨片(種類は未同定)やサヌカイトチップ、炭化材の破片が回収された。

出土遺物には弥生土器甕9～13、高杯14、サヌカイト製打製石槍26がある。9～11は頸部の屈曲が緩やかで、畿内第Ⅱ様式に位置づけられるものであるが、12は頸部の屈曲が明瞭で、畿内第Ⅲ様式である。14は外面にユビオサエが残る。26は幅2.5cm、厚さ1.0cmの打製石槍で、刃部の調整は粗い。

SK209　SK204を切る直径1.0m以上、深さ0.2mの土壙である。埋土を洗浄したところ、魚の鱗(種類は未同定)や淡水性種の巻貝であるクロダガワニナ(学名：*Semisulcospira kurodai* Kajiyama et Habe)、サヌカイトチップ、炭化材の破片が回収された(註1)。

SD210　上幅0.5～0.7m、下幅0.1～0.3m、深さ0.2mの溝で、蛇行しながら半円形に周り、SK201に切られる。

出土遺物には弥生土器壺15、甕16、鉢17がある。15は広口壺の口縁部で、内外面とも器表面が荒れているが、内面にハケメが確認できる。16は口縁部がゆるく外反し、内外面にタテハケが施される。17は無頸の鉢で、横方向のヘラミガキが施される。15・16は畿内第Ⅱ様式におさまるが、17については畿内第Ⅲ様式まで下るかもしれない。

SP211　直径0.3m、深さ0.1mの小穴である。

第5層出土遺物

甕18～23、鉢24、壺25が出土した。18・20は如意形口縁の甕である。18は器表面の剥離が著しいが、頸部内面にハケメが残っている。20は口縁端部にキザミメが施され、外面に粗いタテハケ、口縁部内面から頸部にかけて粗いヨコハケが施される。19は口縁端部に面をもち、頸部の屈曲は緩やかである。21は「く」字状に折れる頸部を有し、口縁端部は面をもち、木口を利用してのキザミメが施される。22は底部で焼成後に孔が穿たれる。23は底部の裾が張り出す形態で、胎土に結晶片岩を含む。外面の残存部分が少ないが、体部にヘラケズリが施されていて、こういった特徴から紀伊産の甕と思われる。24は外面に櫛描直線文ののちに櫛描扇形文を施している。口縁部は直線的に伸びる。25は口径が10cm弱と小さいことから壺と判断した。内面にはハケメがわずかに残り、内外面ともナデで仕上げられる。最終調整が粗いことから他の器種の可能性も残る。以上の遺物について、25については時期不明であるが、21は畿内第Ⅲ様式に、それ以外は畿内第Ⅱ様式に位置づけられる。

2)中世の遺構

第4層下面で「く」字形に曲るSD103と、数条の犂溝、数個の土壙を検出した。

SD103　「く」字形に直角に曲る溝で南東－北西に延びる部分は、上幅0.5～1.0m、下幅0.3～0.5m、深さ0.2mで、下部に粘土混りシルトが堆積し滞水状態であったことを示し、上部はシルト混り粗粒

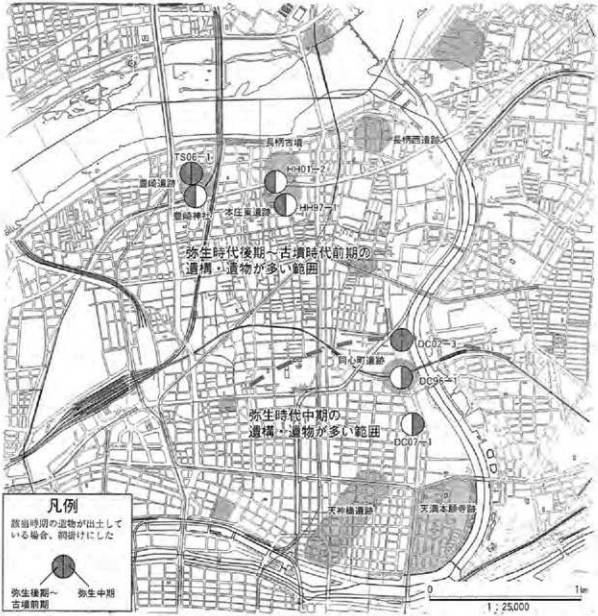


図9　各地点の出土遺物の時期(弥生～古墳時代前期)

砂で埋る。南西－北東に延びる部分は、上幅0.7～1.3m下幅0.3～0.8m、深さ0.3mで、粗粒砂混りシルトで埋る。南端で立上がるようにも見えるが、調査区外へ延びるため不明である。中世の屋敷地を囲う敷地境の溝の可能性も残る。

SD107　上幅0.3～0.6m、深さ0.2mの溝である。方向はSD103と同じで、西側で底が深くなっている。

SD102・104・109～113　いずれも上幅0.1～0.3m、深さ0.1～0.2mの溝で、方向はSD103と同じである。SD112はSD103を切る。これらは第4c層で埋ることから犁溝と考えられる。

SK108　SD103に切られる直径0.5m、深さ0.1mの土壙である。

3)弥生時代における遺跡の変遷

ここで周辺調査を含めた遺跡の変遷について検討してみよう。出土遺物の時期を基に整理すると、次のようになる(図9)。まず、本調査地の約400m北に位置するDC96－1次調査では、本調査地と

同様に畿内第Ⅱ様式の土器が主体であるが、そこからさらに約200m北のDC02－３次調査地では第Ⅱ様式の土器もあるものの、畿内第Ⅴ様式でも新しい段階のものが主体となる[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2004]。さらに約１km北東に位置する本庄東遺跡では弥生時代後期から古墳時代前期初頭にかけての遺構・遺物が検出されている[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1999・2003]。HH06－１次調査地で弥生時代中期に位置づけられる櫛描文の壺が１点出土していることは課題として残るが[大阪市文化財協会2007]、時期が下るごとに居住域が北に移動するようすは、陸化の進展とともに居住域の拡張を示すのであろう。

〈まとめ〉

本調査地では弥生時代中期前～中葉にかけての遺構が小面積でありながら多く検出され、その上位では中世の遺構も検出された。弥生時代の遺物には畿内第Ⅱ様式の土器や石器があり、この中には紀伊産の甕23も含まれる。紀伊産の甕は旭区森小路遺跡などでも出土しており、当時の地域間交流を知る手掛りとなる。一方、石器は過去の調査を含めてもサヌカイト製の打製石鎗しか出土しておらず、石庖丁などの農耕に関連する石器がないことは、当地が農耕に適さず、狩猟や漁労などの別の生業に適していたことを反映しているのであろう。なお、SK209から出土したクロダガワニナは淡水性種であり、当遺跡が天満砂堆でも河内湖側に位置していることから、近隣で採取されたものと思われる。

また、これまでの成果を基に近隣遺跡を含めた時期的変遷を検討した結果、時期が下るに従って居住地が北側に移ることが明らかになった。これは陸化の進展と関連するものと思われる。

同心町遺跡はこれまでは調査数が少ない上に、小規模な調査ばかりであったが、今回の調査成果を通じていくらかの展望が見えてきた。今後の調査の進展に期待したい。

註)

(1)貝類の同定は大阪市文化財協会学芸員の池田研が行った。

〈参考文献〉

伊藤純1990、「豊崎神社境内出土の土器」:『葦火』26号　大阪市文化財協会、pp.4－5

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1998、「信開ホテルによる建設工事に伴う発掘調査(DC96－1)」:『平成8年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.13－22

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1999、「小倉商事(株)による建設工事に伴う確認調査(HH97－1)」:『平成9年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.19－27

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2003、「本庄東遺跡発掘調査(HH01－2)報告書」:『平成13年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.3－7

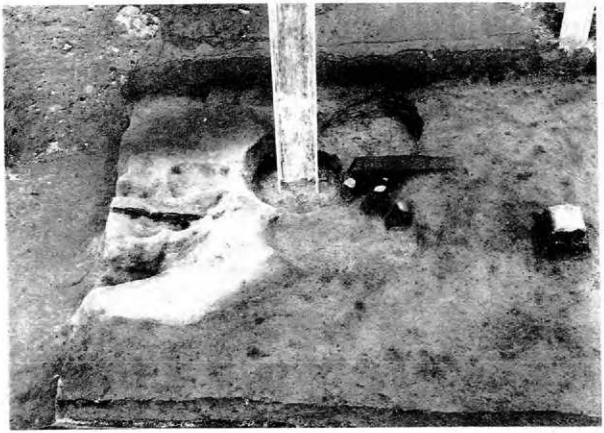
大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2004、「同心町遺跡B地点発掘調査(DC02－3)報告書」:『平成14年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.3－11

大阪市文化財協会2007、『豊崎遺跡発掘調査(TS06－1)報告書』(内部資料)

建設省国土地理院1983、「天満砂堆」:『土地条件調査報告書(大阪地区)』、p.37

第6層上面全景(北から)

第4層下面全景(北から)



SK201土器出土状況(西から、左はSK203)

Ⅱ 福　島　区

野田城跡伝承地発掘調査(NO07－2)報告書

・調査個所　大阪市福島区玉川1丁目30－14
・調査面積　25㎡
・調査期間　平成19年12月12日～12月17日
・調査主体　財団法人　大阪市文化財協会
・調査担当者　文化財研究部次長　南秀雄、櫻井久之、池田研

〈調査に至る経緯と経過〉

周知の埋蔵文化財包蔵地として指定される野田城跡伝承地は、「弓場」・「城之内」・「堤」といった字名の残る旧野田村の範囲にある。これまでも建物建設に伴って試掘が行われてきたが、本調査には至らず、今回が当遺跡において最初の本調査となった。調査地は遺跡範囲の東辺部に当るが(図1)、中世末～近世初頭とみられる堀状遺構を検出するなどの成果があった。

図1　調査地位置図

調査個所を1806年製の『増修改正摂州大阪地図』および1886年作製の『大阪実測図』で確かめると(図3)、敷地北側にある道路は村内を南西－北東方向に貫き、大仁村(現在の大淀)方面に通じる主要道で、それを挟んだ北側に「野田の藤」で知られた春日神社が存在する。現在、同社のかつての賑わいを伝えるものはないが、『摂津名所図会』には挿図付で紹介されており、本殿・拝殿・神楽所などが立ち並び、周辺には茶店・飲食店が設けられていたようである。

図2　調査区位置図

一方、野田城は淀川デルタの中洲を利用した砦で、『信長公記』[奥野高広ほか(校註)1969]などによれば、1570(元亀元)年に三好三人衆によって築かれたとされる。これを討つべく出陣した織田信長が本願寺方に挟撃さ

1806年作製『増補改正摂州大阪地図』より

内務省地理局測量課 1886年作製『大阪実測図』より

図3 古地図に見る調査地

れ窮地に陥ることになった。またその後には、本願寺攻めの際に、信長方の武将荒木村重がこの砦を利用している。さらに大坂ノ陣では、大坂方の大野治胤(道犬斎)がこの地を守ったといわれる[井上正雄1922、pp.1198－1199]。

当該地で建物の建設計画が立ち上がり、それに伴って大阪市教育委員会が試掘調査を行ったところ、地表下約1.2mで中世から近世初頭の遺物包含層を検出し、地下約2.0mで自然堆積層が確認された。この結果を受け、2007年12月12日より本調査に着手し、重機による現代盛土・撹乱の除去を行った。調査区は市教委の指示に従って敷地東南部に設け(図2)、上端で7m四方、地表下1.2mの深度で25㎡の調査面積を確保した。

調査では、試掘結果を裏付けるように近世の井戸・土壙などが検出され、それらの遺構のベースとなる厚さ2m以上に達する盛土があった。そして盛土下には自然堆積層を掘込んだ堀状遺構の存在が確認された。こうした遺構の記録作成を進め、17日に調査区の埋戻し、機材の撤収を行い、現地での作業を終えた。

なお、調査で使用した水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)で、本文・挿図中では「TP+○m」と記した。また、本報告の指北記号は図1に座標北を用いた以外、磁北を用いている。

〈調査の結果〉

1、層序

調査区の全域は既設建物の基礎撤去に伴って、現地表下約1.2mまで撹乱されていた。その直下に近世の遺物包含層である第1層や近世初頭の整地層の第2層がある。第3層は自然堆積層で、この地層までを確認した(図4・5)。

第0層：現代の盛土や撹乱による地層である。現地表はTP−0.7m前後にある。

第1層：調査区西半部に見られる。灰オリーブ色含粗粒砂粘土質シルト層の第1a層（層厚約10cm）と水成層で淡黄色中粒～粗粒砂を主体とする第1b層（遺構内では層厚約40cm）に分かれる。前者の上面にSE102、SK109、SP101などがあり、後者を埋土とするSD105、SK103・104・110・111がある。

第2層：本層上面にあるSK113などの遺物から近世初頭とみられる整地層で、含粗粒～極粗粒砂シルト～粘土質シルトである。上部80～100cmは浅黄色、それ以深は暗青灰色となる。両者に中～大礫サイズの偽礫が多く含まれるが、下部にだけハマグリ・ヤマトシジミが多量に含有されていた。これらの二枚貝はそれぞれ大型品で、殻合の外れたものばかりであった。

図4　地層と遺構の関係図
（遺構を結ぶ線はその前後関係を示し、下に位置するものが先行する）

第3層：本層は自然堆積層で、南北方向に畔状に掘り残された部分があり、その西側が堀状に深く掘下げられていた。畔状に高く残った最高所がTP−3.0mで、そこから40cm下まではオリーブ黒色粘土質シルト層で、層内にサンドパイプが多数見られた。100cm下までの範囲には緑灰色極細粒砂と細粒砂の互層が見られ、平行ラミナをなしている。この地層中には植物遺存体が見られるが、遺物や貝殻は確認できなかった。

2．遺構と遺物

今回検出された遺構はその所属時期から4群に分けることができる。a．第3層上面の堀状遺構、b．第2層上面遺構のうち第1b層を埋土とする遺構に切られているもの、c．第2層上面遺構のうち第1b層を埋土とするもの、d．第1a層上面遺構である（図6～8）。

a．第3層上面遺構

第2層の整地層が1.0m以上の層厚をもつため、調査区の北半部のみを深掘りして第3層上面遺構の調査を行った。第2層を1.2mほど掘下げたところで、調査区東寄りの場所に南北方向を採る畔状の高まりを確認した。これは第3層の自然堆積層から削り出されたものである。高まりは上端に約0.6m幅の平坦部をもち、東側下端からの比高が0.4m、西側下端からの比高が1.0m以上ある。高まり西側の掘り窪められた部分は幅3.0m以上になり、その規模から溝と捉えるよりも堀というべき遺構である。ただし、今回の調査では長さ数mの範囲で検出したに過ぎないため、堀状遺構と呼称する。高

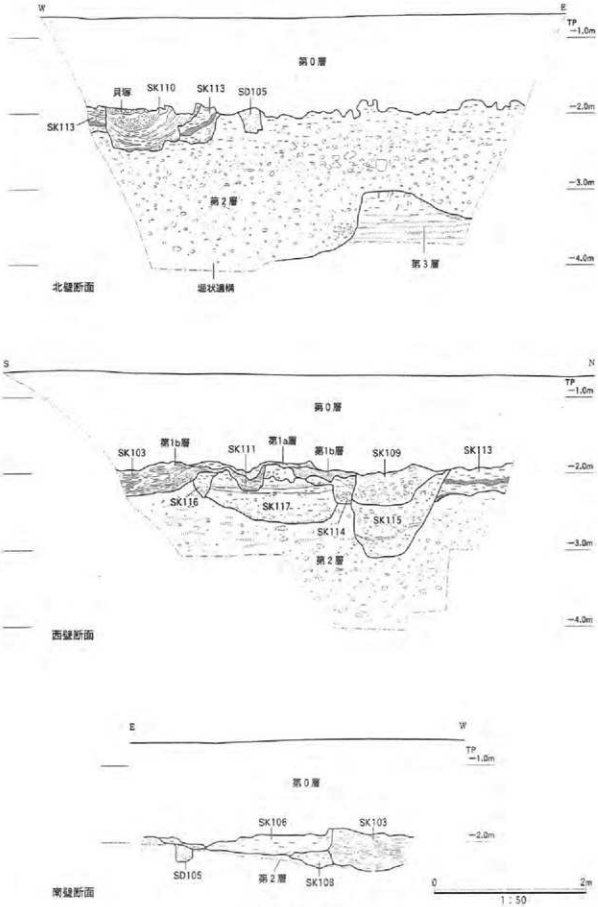

W
E
TP
-1.0m
第0層
貝層
SK110
SK113
SD105
SK113
-2.0m
-3.0m
第2層
第3層
-4.0m
北壁断面
堀状遺構
S
N
TP
-1.0m
第0層
SK103
第1b層
SK111
第1a層
第1b層
SK109
SK113
-2.0m
SK116
SK117
SK115
SK114
-3.0m
第2層
-4.0m
西壁断面
E
W
TP
-1.0m
第0層
SK106
SK103
-2.0m
SD105
第2層
SK108
0
2m
1:50
南壁断面

図5　調査区断面図

まり東側の斜面部には第３層の偽礫を含んだ緑灰色中粒～粗粒砂の加工時形成層が見られるが、堀状遺構内に加工時形成層はなく、調査できた深度までに機能時堆積層も確認できなかった。高まりは堀状遺構の外側から流入する土砂を防ぐためのものと思われる。一方、第２層の整地層はこの堀状遺構を埋め、さらに畔状高まりまでも完全に覆い尽くしている。第２層中の遺物には鐔連弁のある中国製青磁碗1、瓦質羽釜3・4、巴文軒丸瓦2、焼き締め陶器などが含まれるが、出土量は多くない。これらは17世紀初頭までにおさまる資料で、第２層上面遺構に17世紀前葉のものが見られることから、第２層の時期は17世紀初頭頃と考えることができる。文献から推定されているとおり、野田城が大坂ノ陣の際に砦とされていたのであるなら、この堀状遺構はほぼその時期に存在したものといえる。

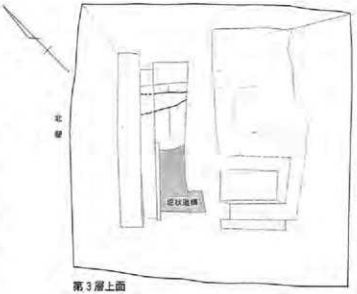
b．第２層上面遺構下部群

SK107・108・112・113・114・116・117の７基の土壙があるが、のちの遺構に掘込まれて本来の形状・規模のわかるものは少ない。

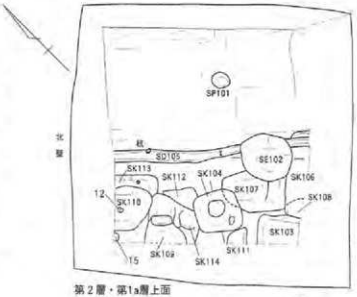
SK107は平面が台形を呈し、東西1.2m、南北1.7m、深さ0.8mある。遺物にはいくつかの木製品がある。20・21は木槌の槌部と柄部、22は２箇所に木釘が打ち込まれた板状品で、一方の木釘は抜け落ちていた。23は棒状品で側面に直径0.4cmの穴が開けられている。

SK108は南壁沿いにごく一部が残る。SK116・117は西壁断面でのみ存在を確認した。SK112・113はともに調査区北西隅にあって、SK114に先行する遺構である。SK113の埋土の主体は灰黄褐色粘土質シルトであるが、底と中位に炭を多量に含んだ黒～黒褐色シルトがレンズ状に堆積していた。底に接して瓦質羽釜15が完形で出土した。SK114の底には、中心に木釘の刺さった直径6.0cmの円盤形の木製品19があった。

瓦質羽釜15は口径17.8cm、高さ12.6cmある。体部がやや下膨れになっ



第３層上面



第２層・第1a層上面

図６　遺構平面図

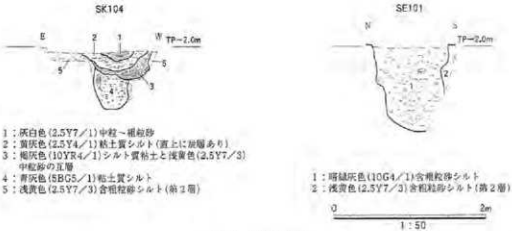


図7　遺構断面図

ており、こうした特徴は17世紀前葉に見られる「大和型土釜」[川口宏海1990]の形態に近い。しかし、鍔部も含めて全体に瞽壁が厚く、口縁部を水平方向に折り曲げて、その端部を丸くおさめるものは見られない。また、底部中央に焼成後の穿孔(直径0.8cm)がある。

c．第2層上面遺構上部群

水成層の第1b層を埋土とする一群で、溝SD105、土壙SK103・104・110・111がある。

SD105は幅0.3m、深さ0.3mの南北溝で、灰白色中粒～極粗粒砂で埋るがラミナは不明瞭である。溝中に1箇所、第2層を仕切り状に掘り残したところがあった。また、この遺構を境としてその東西で遺構の密度が大きく異なっている。

SK103・104・110・111は平面が方形ないし台形となるとみられる土壙である。

SK103・111は西壁沿いにあって、底に一連の灰オリーブ色粘土質シルト層が堆積する。SK103より肥前磁器染付碗5、関西系陶器碗6、瓦質土器羽釜7、土師器焙烙8、土人形18が出土した。5の底部外面には崩れた「大明」を示すとみられる記号がある。6にはオリーブ灰色の釉が掛かる。7は鍔の形態等が第2層出土のものと類似しており、本来はこの地層に伴うものであろう。

SK104の下半部は図7の断面図に見て取れるように上半部から不連続的に狭まっており、偽礫を多く含んだ青灰色粘土質シルトで埋められている。この状況から下半部については先行する別遺構の可能性がある。遺構上半部より京焼風の肥前陶器碗9、土師器火鉢10、荷札木簡24が出土した。9の底部外面には「柴」のスタンプがある。10は低い脚部をもち、口縁部に直径0.9cmの凹みがある。24は短冊型をしており、上端中央に小孔をもつ。下部を欠損するが、「百□□四」と何かの数量を記す。寸法は(54)mm×29mm×5mmである。

SK110は埋土の下方がトラフ型ラミナの観察される灰～オリーブ黒色粘土質シルトまたは淡黄色中粒～粗粒砂、上方が偽礫を主体とした浅黄色粘土質シルトで埋る。埋土下方から肥前磁器碗11・12・陶器碗13、備前焼灯明皿14が出土し、埋土の上方には貝塚が存在した。11は底部鋳釉で、『有田町史』古窯編[有田町1988]によればⅡ－2期(1630～50年代)に属すが、12の染付丸碗・13の打刷毛目碗は18世紀前半まで降る。

d．第1a層上面遺構

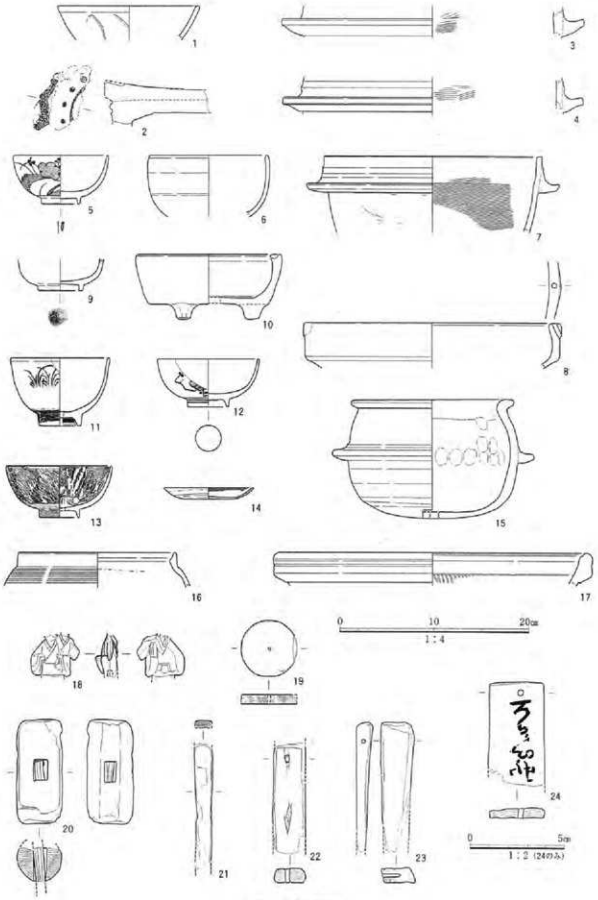


図8　遺物実測図

第2層(1～4)、SK103(5～8・18)、SK104(9・10・24)、SK107(20～23)、
SK110(11～14)、SK113(15)、SK114(19)、SP101(16・17)

小穴SP101、井戸SE102、土壙SK106・109・115といった19世紀前半の遺構がある。

SP101は調査区東半に検出された唯一の遺構である。直径0.5m、深さ0.3mあり、丹波焼壺16、堺擂鉢17が出土した。

SE102は直径1.0m、深さ1.1mの素掘り井戸である。巴文軒丸瓦などが出土している。南壁に沿って検出されたSK106は、SE102に肩の一部を掘込まれているが、東西幅2.3mの方形プランをもつと推測される。SK109は西壁際にあって深さ0.5mある。埋土中に漆喰塊を多数含んでいる。SK115はSK109の下にあり、西壁断面において存在を確認した。深さが1.1mあり、埋土中に偽礫を多く含むが、周囲から流れ込んだ灰色シルト～極細粒砂が堆積する部分がある。

3．出土した貝類について

貝類の同定作業には現生標本と図鑑[吉良哲明1954、波部忠重・奥谷喬司1983]を利用しており、大阪市立自然史博物館の石井久夫氏より貴重なご助言を賜った。なお、個体数に関しては左右殻数をカウントしたのち、その多数の方を原則として採用している。

表1　出土貝類種名一覧

サルボウ　*Anadara (Scapharca) subcrenata* (Lischke)

ハマグリ　*Meretrix lusoria* (Roeding)

イヨスダレ　*Paphia (paratapes) undulata* (Born)

ヤマトシジミ　*Corbicula japonica* Prime

トリガイ　*Fulvia mutica* (Reeve)

本調査ではSE102・110と第2層から計4種、87個体にのぼる貝類が出土した(表1・2)。

このうち、SK110は18世紀前半代の遺物を伴う土壙で、同定した資料は埋土の一部を採取して水洗選別したものである。イヨスダレは水深10m程度、トリガイは水深5～30mの主に内湾の泥底に棲息している。

注目されるのはトリガイの出土量の多さで、これまでに大坂城・城下町跡の関連調査で同定された豊臣期以降の約1万5千個体に及ぶ資料のうち、トリガイは10個体にも満たない[池田2005]。18世紀前葉の『和漢三才図会』にはトリガイについて、「摂州尼崎で多く産し、漁人は殻を取り去って販売すること、また食材としては最下級品であること」などが記されている。食材となるのが足の部分で、殻も壊れやすいことなどから、現在と同様に大半が剥き身にされて流通していたと考えられ、消費地

表2　NO07－2次出土の貝類

遺構・層名	時期	サルボウ	ハマグリ	イヨスダレ	ヤマトシジミ	トリガイ
SE102	19c前半	2	2		2	
SK110	18c前半			1		69
第2層	17c初頭		8		3	

である大坂城・城下町跡における出土量の少なさはそれらに起因するものであろう。

一方、大阪府内の漁獲高を記した最初期の資料である大阪府企画調整部統計課の『明治21年大阪府統計書』(明治22年)によれば、西成郡野田村ではハマグリ270石、隣接する村落では大野村でトリガイ15,000・ハマグリ500(ともに単位不明)・アカガイ74斗、福村でトリガイ2,600貫・ハマグリ400石・シジミ160石が水揚げされており、調査地周辺の漁場ではトリガイを始めとする貝漁が盛んに行なわれていたことがわかる。これらのことから、SK110出土資料は水揚げ地において、剥き身加工あるいは自家消費されたものである可能性が高い。

次に、第2層出土資料は層中にまばらに分布していた資料の一部を平面および断面から手掘りで回収したものである。非食用種が含まれていないこと、ハマグリの殻高計測値が45.0～59.9㎜と大型で、幼貝が含まれていないこと、殻が閉じたままのものがないことなどから、自然に棲息していたものの遺体ではなく、食料残滓であると考えられる。また、第2層が一連の整地層でありながら、上部に貝殻が見られないのは、酸化作用による腐食が原因とみられる。貝類が食用に供される2種類に限定されることなどから、整地土は貝塚近辺から搬入されたことが考えられる。

〈まとめ〉

この調査は野田城跡伝承地においての最初の本調査であった。また、近世野田村の東辺部で行われたものであったが、厚い整地層とそれによって埋められた堀状遺構を確認することができた。整地層の時期は17世紀初頭とみられ、この遺構は文献史料や伝承から推定される中世末の野田城に関連する可能性をもっている。さらに、整地層の上面では多数の土壙が検出され、陶磁器・木製品が出土したほか、食料として採集された貝の殻が多量に見つかった。このことは漁撈関係者が多数居住していたという近世野田の集落に係るものとして興味深い。今回の調査によって実態のわからなかった野田城の解明に1つの手掛かりを得ることができた。

引用・参考文献

有田町1988、『有田町史』古窯編

池田研2005、「中・近世における大坂城下町出土の貝類について」：大阪大学考古学研究室編『待兼山考古学論集　－都出比呂志先生退任記念－』、pp.859～886

井上正雄1922、『大阪府全誌』巻之二、浙文堂出版

奥野高広・岩沢愿彦(校註)1969、『信長公記』、角川書店

川口宏海1990、「16世紀における大和瓷土釜の動向」：中世土器研究会編『中近世土器の基礎研究』Ⅵ、pp.63－79

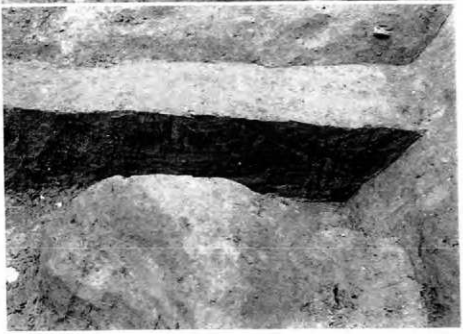
吉良哲明1954、『原色日本貝類図鑑』保育社

波部忠重・奥谷喬司1983、『学研生物図鑑　貝Ⅱ』学習研究社

調査区西壁断面

調査区北壁断面

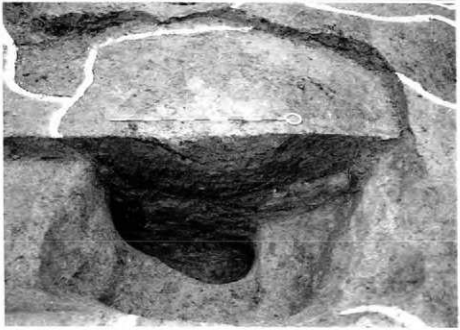
調査区北壁断面
細部



第1a層および
2層上面遺構
（北から）

SK110・113断面
（南東から）

SK104断面
（西から）



Ⅲ 中　央　区

・調査個所　大阪市中央区淡路町2丁目17－2
・調査面積　18㎡
・調査期間　平成19年7月4日～7月6日
・調査主体　財団法人　大阪市文化財協会
・調査担当者　文化財研究部次長　南秀雄、田中清美

〈調査に至る経緯と経過〉

調査個所は上町台地に沿って拡がる砂堆上に位置しており、現在の堺筋から西に約70mの地点に当る(図1)。周辺には北西側にOJ00－13次調査地、東側にはOJ06－1次調査地、南側にはOJ92－33次調査地などがある。中でもOJ00－13次調査地ではTP－0.3m前後から豊臣後期の整地層が、TP－0.6～0.7m前後で古代から中世の遺物を含む地層をはじめ、地山とされる砂堆の地層が確認されている[大阪市文化財協会2002]。

大阪市教育委員会が当該地で実施した試掘調査でも地下約1.9～2.8mで江戸時代前期(17世紀)の遺物が検出されたほか、下層に豊臣期の遺物包含層が存在するものと予想された。

本調査は大阪市教育委員会の指示に基づき、建物基礎の予定範囲内に調査区(東西6m、南北3m)を設定して(図2)、現地表面下2.3mまで重機で掘削した後、さらに人力で2.8mまで掘下げて、遺構・遺物を検出した。

本報告で示した方位は図1・2が座標北である。図5は磁北、水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)

図1　調査地位置図

図2　調査区位置図

で、挿図中ではTP±○mと記した。

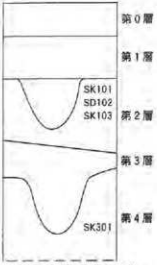


図3　地層と遺構の関係

〈調査の結果〉

1．層序(図3・4)

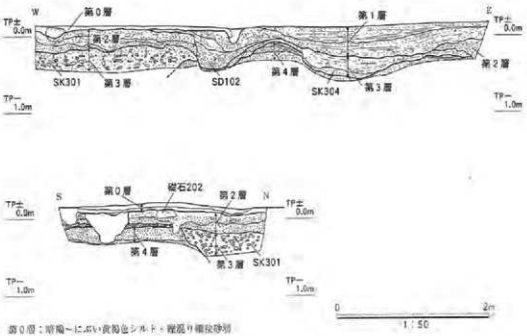
北および西壁で地層を観察したが、調査面までの地層が掘削されて残っていなかったほか、調査地の周囲を矢板で土留されており、地表から調査面までの層序は確認できなかった(図4)。

第0層：暗褐～にぶい黄褐色シルト・礫混り細粒砂層で、層厚は5～10cmある。調査区の中央以西に分布しており、18～19世紀代の陶磁器・瓦も含むが、重機掘削時の攪乱層である。

第1層：調査区の中央部以東で確認した暗灰褐～暗褐色シルト混り砂礫を主体とする整地層で、層厚は10～40cmある。本層は第4層の黄橙色砂礫混り粘土質シルトの偽礫を多く含んでおり、17世紀前葉から18世紀にかけての肥前陶器や瓦の細片が出土した。

第2層：にぶい黄褐色シルト・礫混り細粒砂を主体とする整地層で、層厚は20～40cm前後ある。本層は砂礫および第4層の偽礫を多く含む部分に二分されるが、総じて上部は第4層の偽礫が主体であった。SK101、SD102、礎石202～204は本層上面の遺構である。

第3層：黒褐色シルト混り細粒砂層で、焼壁・炭・焼瓦を多量に含む。層厚は10～30cmあり、調査地の中央部以東では焼壁・炭の含有量が減少して、シルトや礫を含む細粒砂層へ移行する。本層は



第0層：暗褐～にぶい黄褐色シルト・礫混り細粒砂層
第1層：暗灰褐～暗褐色シルト混り砂礫層
第2層：にぶい黄褐色シルト・礫混り細粒砂層
第3層：黒褐色シルト混り細粒砂層（焼壁・炭・焼瓦を多量に含む）
第4層：暗灰黄色礫・シルト混り細粒砂～黄褐色シルト混り粗粒砂層（砂丘の地形）

図4　北壁・西壁断面実測図

17世紀前葉の肥前陶器、二次的な火を受けた青花18・19をはじめ、焼塩壺20(図6)、焼瓦片を含むことから、大坂冬ノ陣に伴うものであろう。しかし、基底面に火災の形跡が確認されないことから陣後に、再整地されたものと考えられる。

第4層：暗灰黄色礫・シルト混り細粒砂～黄褐色シルト混り極細粒砂層で、上面の標高はTP−0.1～0.3mを測る。本層は当地域の砂堆を形成する地層で、土壙SK301・302・304は上面から検出された遺構である。

2．遺構と遺物

a．第4層上面の遺構と遺物(図5・6)

SK301 調査区の西北部に位置する深さ0.3m以上ある土壙状の遺構である。埋土は暗褐～黒褐色シルト混り細粒砂で、焼礫・炭・二次的な火を受けた瓦を多量に含む。瀬戸・美濃焼皿1・2、肥前陶器鉄絵皿3・小碗6・碗7・8、信前焼徳利4、焼塩壺蓋5など、17世紀前葉に属する陶器や土師器が出土した。遺構の大半は調査範囲外のため、形状や規模は明らかでないが、埋土や出土遺物などからみて、大坂冬ノ陣後の廃棄物処理用の土壙であろう。

SK304 調査区の東北部に位置する平面形が不整形な土壙である。検出面での最大長は約2.3m、深さは約0.4mあった。埋土は黄灰色シルト・礫混り細粒砂で、第4層の偽礫を含む。肥前陶器碗9、唐草文軒平瓦10など、豊臣後期に属する遺物が出土した。

b．第2層上面の遺構と遺物(図5・6)

SK101 調査区の東南部に位置する径0.7～0.8m、深さ0.6mの土壙である。埋土は下から黒褐色シルト混り細粒～極細粒砂、黒褐色細粒砂、黒色砂礫混りシルト、暗灰黄色砂礫混りシルトで、17世紀中葉に属する肥前磁器染付碗11～13、土師器灯明皿14・15、土師器焙烙16をはじめ、ウサギが浮彫された硯17などが出土した。

礎石202～204 調査区の北西部に位置する3個の礎石である。南北に並ぶ礎石202・203の距離は

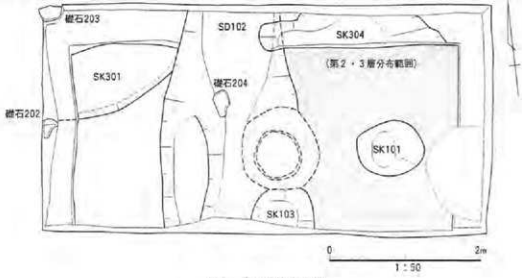


図5 主要遺構配置図

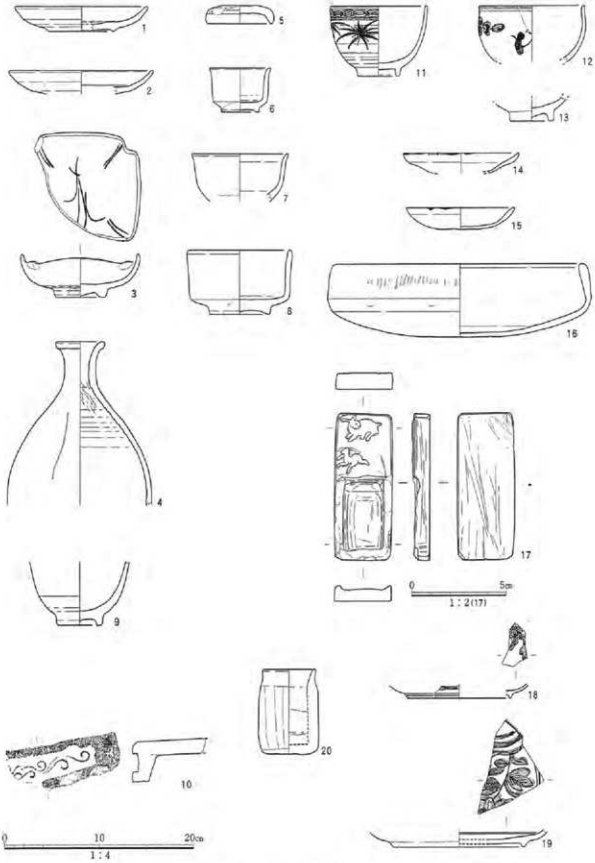


図6　出土遺物実測図

SK301(1～8)、SK304(9・10)、SK101(11～17)、第3層(18～20)

1.5mを測る。

SD102　調査区の中央部に位置する幅1.2～1.7m、深さ0.4～0.5mの南北方向の溝である。埋土は上層の客土である灰黄褐色シルト混り細粒砂・暗褐色シルト混り砂礫、極細粒砂のラミナが観察された下層の暗褐色シルト混り砂礫(機能時堆積層)に二分される。なお、溝の南部では底から焼瓦や焼壁が出土した。本溝は調査個所の西側にある南北通りに並行することから敷地境の溝の可能性がある。

SK103　調査区の中央南部に位置する直径約0.8m、深さ約0.4mの土壙である。埋土は黄灰色シルト・礫混り細粒砂で、木片が出土した。井戸の可能性もあるが、調査深度の制約もあって性格は明らかにできなかった。

〈まとめ〉

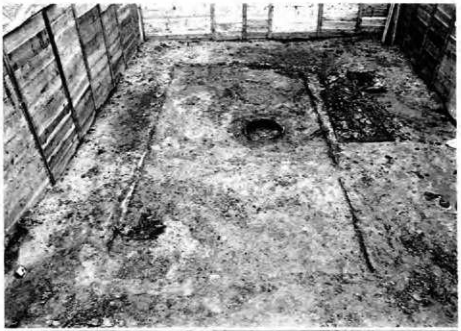
今回の調査では、調査個所が上町台地の西側に拡がる砂堆上に位置することが確認されたほか、大坂冬ノ陣後に焼壁・焼土・炭・焼瓦が投棄された土壙が確認された。また、徳川前期の南北方向の溝SD102は敷地境の溝とみられるもので、調査地域の豊臣後期および江戸時代前期の道路や敷地境の溝と同方位であることが確認された。本溝を境に西側は地盤も硬く、建物の礎石なども検出されたが、溝の東側にはゴミ穴があった。溝SD102の西側には現代の南北道路とほぼ重複する位置に江戸時代前期の道路が存在した可能性が高い。

一方、大坂冬ノ陣後の整地層である第3層上に盛土された第2層の層厚は、僅か20～30cmしか確認されなかったが、本層の上面では礎石建物やゴミ穴とみられる土壙SK101も検出されたことから、17世紀中葉以降に整地され町屋が復興したことを示唆している。今後、調査地周辺の調査が進めば、大坂冬ノ陣前後の船場のようすがさらに明らかになるものと思われる。

〈引用・参考文献〉

大阪市文化財協会2002、「OJ00－13次調査」:『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告－1999・2000年度－』、pp.176－180.

第０層の基底面の状況
（西から）



北壁断面中央部
（南から）

主要遺構調査状況
（西から）

・調査個所　大阪市中央区平野町2丁目11－7・8・9
・調査面積　81㎡
・調査期間　平成20年2月25日～3月3日
・調査主体　財団法人　大阪市文化財協会
・調査担当者　文化財研究部次長　南秀雄、池田研

＜調査に至る経緯と経過＞

調査地は豊臣期の船場城下町推定域の中央部やや北寄りに位置し、堺筋の西側街区で平野町通りの北側にある。これまでに周辺で行なわれた調査では、東接するOJ93－7次調査で大量の貝殻を廃棄した15世紀代の土壙群や、豊臣後期の土壙、礎石の抜取穴などが見つかっている[大阪市文化財協会2004]。また、北東約50mに位置するOJ05－8次調査では13～14世紀代の溝・土壙・ピット、豊臣後期から江戸時代前半にかけての溝・土壙・柱穴・ピットなどが見つかっている。[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2006](図1)。

本調査に先立つ大阪市教育委員会による試掘調査では、現代盛土層や江戸時代前期から後期にかけての複数の整地層の下に、現地表(TP+2.3m前後)下270～340cmで豊臣期から中世にかけてのものとみられる遺構や包含層の存在が確認されたことから、本調査を実施することとなった。本調査では9m四方の調査区を設定し、東西に基準杭を打設した(図2)。現地表面下270cmまでを事業者側が重機で掘削し、2月25日からは人力掘削を開始した。豊臣期以降の整地層とみられる第1層上面で、上

図1　調査地位置図

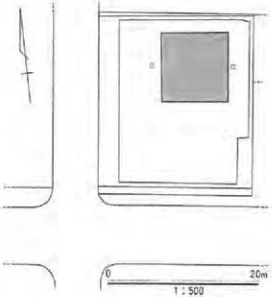


図2　調査区配置図

位層の遺構を一括して検出したのち、水成層である第2層上面では豊臣期に埋没する流路NR16を検出し、3月3日には調査を終了した。

なお、本調査で使用した水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)で、TP+○mと記した。また、指北記号は図2・5が磁北、図1は座標北を示す。

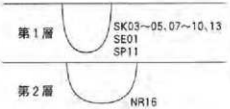


図3　地層と遺構の関係図

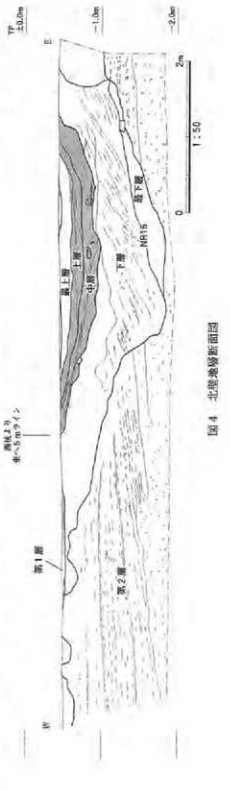


図4　北壁土層断面図

＜調査の結果＞

1．層序(図3・4)

第1層：にぶい黄褐色極細粒～極粗粒砂質シルトを主体とする豊臣期以降の整地層である。上面では本層および上位層に伴う遺構を一括して検出した。

第2層：黄褐～オリーブ褐色極細粒砂～細礫からなる水成層で、上方細粒化している。上面では流路であるNR16を検出した。

2．遺構と遺物(図5)

a．第2層上面

第2層上面で検出したNR16は、調査区中央で西肩を検出した南北方向の流路である。南端でやや蛇行していることや、下面に明瞭な加工痕が確認されなかったことから、自然流路とみられ、南から北へ流れていたと考えられる。東側は調査区外に続いており、幅6m以上、深さ1.4m程度である。埋土は最上層が黒褐色シルト質極細粒～中粒砂からなり、炭化物・木片を多く含む。上層は黒色極細粒砂質シルトからなり、偽礫を含む。中層は黒褐色粘土からなり、自然木を含む。上・中層は暗色化している。下層は灰白色極細粒～細粒砂からなる。最下層は暗オリーブ褐色シルト質極細粒～中粒砂からなり、淘汰が悪い。

埋土のうち、最上～中層からは土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、備前焼、丹波焼、常滑焼、瀬戸美濃陶器、瀬戸美濃焼志野、肥前陶器、中国製青磁・白磁などの陶磁器のほか、焼塩壺、丸・平瓦、漆椀、銭、スッポンなどが出土している。一方、下層と最下層からは土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、備前焼、常滑焼、李朝白磁、中国製青磁などの陶磁器

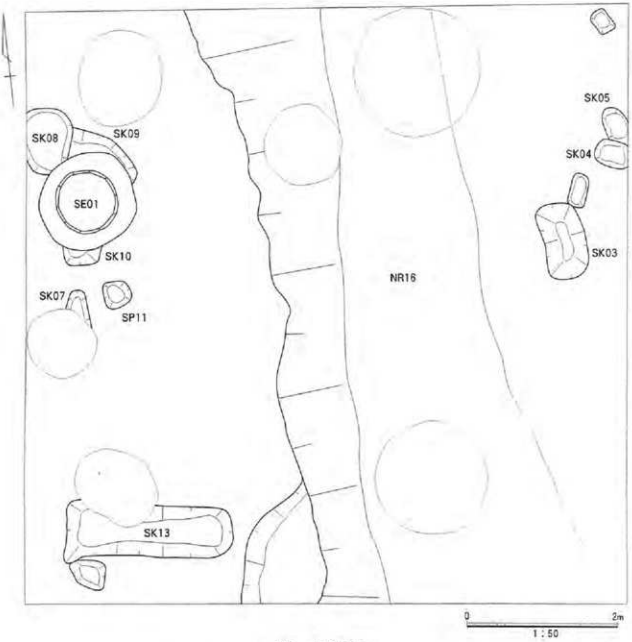


図5　遺構平面図

のほか、丸・平瓦、土錘、ヤマトシジミなどが出土している。

出土した遺物から、NR16の機能していた時期は室町時代を中心としており、豊臣期には完全に埋没したと考えられる。

b．第1層上面

第1層上面では本層や上位層に伴う土壙・井戸などの遺構を一括して検出した。以下では主要な遺構について触れる。

SK08　調査区西端で検出した楕円形の土壙で、長径が0.9m、深さは0.3m程度ある。埋土は黄灰色(2.5Y4／1)シルト質極細粒～中粒砂からなり、炭化物を含む。土師器、須恵器、1本擂目の丹波焼擂鉢、肥前陶器、瀬戸美濃焼志野、中国製青花、丸・平瓦などが出土しており、豊臣後期の遺構と考えられる。

SK13　調査区西南部で検出した長方形の土壙である。長辺が2.2m、短辺が1.2m、深さ0.2m程度で、埋土は暗灰黄色(2.5Y4／2)シルト質極細粒～細粒砂からなる。埋土からは土師器、須恵器、瓦器鉢、瀬戸美濃焼志野、肥前磁器染付、軒平・丸瓦などが出土しており、18世紀代の遺構と考えられる。

SE01　調査区西端で検出した井戸である。湧水のため完掘できなかったが、掘形は直径1.6m程度で、井戸側には井戸瓦を用いている。掘形の埋土からは土師器、丹波焼、備前焼、肥前陶器、瀬戸美濃焼志野、肥前磁器染付、桟瓦、サヌカイトなどが出土している。一方、井戸側の埋土からは備前焼、関西系陶器、漆椀など近世の遺物に加え、近代のガラス・金属製品も出土していることから、近代に入ってから埋戻されたと考えられる。

3．まとめ

今回の調査では、中世から近世にかけての流路・土壙・井戸などの遺構を検出した。調査開始面の関係から徳川期以降の遺構については不明な部分が多いが、豊臣前期の地層や遺構面が確認されなかったことも含め、遺構や遺物の年代は東接するOJ93－7次調査の内容とほぼ一致している。

中でも注目されるのは、室町時代から豊臣後期にかけての遺物が多く出土したNR16である。中世段階では道修町から平野町にかけての地域に入り江が入込んでおり[趙哲済2006]、NR16もそうした入り江に注ぎ込む流路の1つであったと考えられるが、入り江の周辺ではOJ93－7、OJ94－16次調査でヤマトシジミを主体とする大規模な貝塚が検出されるなど、漁業集団が集住していたと考えられる[池田研2005]。今回の調査ではNR16の最下層から少量のヤマトシジミが出土したのみであったが、下層から出土した有溝土錘とともに、そうした漁業集団の活動を反映したものである可能性がある。

引用・参考文献

池田研2005、「中・近世における大坂城下町出土の貝類について」：大阪大学考古学研究室編『侍塚山考古学論集　－都出比呂志先生退任記念－』、pp.859－886

大阪市文化財協会2004、『大坂城下町跡』Ⅱ

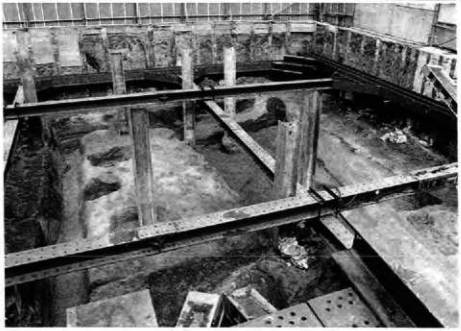
大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2006、「大坂城下町跡(OJ05－8)発掘調査」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2005)』、pp.161－172

趙哲済2006、「船場・道修町、その土地の成り立ちに迫る」：道修町資料保存会編『第13回　道修町文化講演会』、pp.9－42

北壁地層断面
（南東から）

豊臣期以降の遺構と
NR16検出状況
（南から）

NR16
（南西から）



南船場二丁目所在遺跡発掘調査(OJ07－6)報告書

・調 査 個 所　大阪市中央区南船場２丁目１－２
・調 査 面 積　25㎡
・調 査 期 間　平成19年12月17日～12月22日
・調 査 主 体　財団法人　大阪市文化財協会
・調査担当者　文化財研究部次長　南秀雄、高橋工

〈調査に至る経緯と経過〉

本調査地は大坂城三ノ丸の造成に伴って開発された船場地区の南に当り、元和８(1622)年に開削された長堀川を埋め立てた長堀通りの北側に面する(図１・２)。当地における建築工事の実施に先立って行われた大阪市教育委員会による試掘調査では、現地表下約2.5ｍで豊臣期の遺物を含む遺構が確認され、これをうけて本調査が行われることとなった。

掘削は現代の盛土層から第３層までを重機を用いて行い、それ以下については人力で行った。遺構・遺物が発見された場合は、適宜に写真・図面で記録を行いながら調査を進めた。

調査で使用した水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)で、「TP+○m」と記した。本報告では磁北と座標北、２種類の指北記号を用いている。

〈調査の結果〉

１．層序(図３・４)

第０層：現代の盛土層で、層厚は約250cmである。上面の標高はTP+3.5～3.7ｍである。

第１層：灰オリーブ色細粒～中粒砂からなる盛土層である。上限を削剥され、層厚は最大で40cmで

図１　調査地位置図

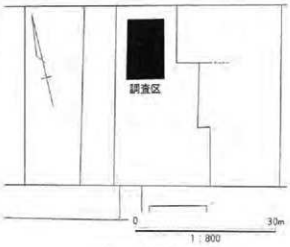


図２　調査区配置図

ある。調査区の南東隅にのみ遺存していた。遺物が出土しなかったので年代は不明である。

第2層：黒褐色細粒～中粒砂や暗褐色中粒～粗粒砂などからなる盛土層である。SE11・SK12・13の埋土で、層厚は約60cmである。これらの遺構から出土した遺物(図6)からみて、年代は豊臣後期である。

第3層：暗灰黄色砂細粒砂からなる盛土層である。層厚は15cmである。調査区の南東隅にのみ遺存していた。遺物が出土しなかったので詳細な年代は不明である。

第4層：にぶい黄色細粒～粗粒砂からなる海浜成堆積層である。下部は平行ラミナが顕著で、上方に細粒化し、上部

図3　地層と遺構の関係図

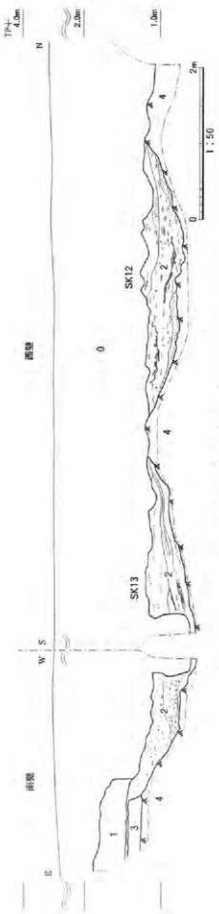


図4　南・西壁地層断面図

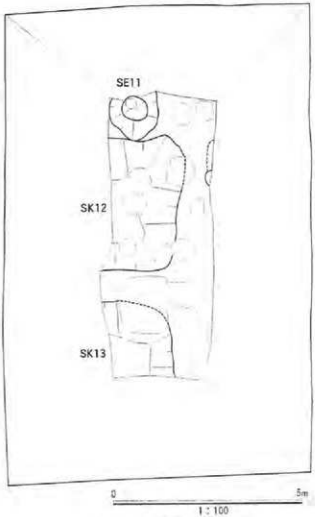


図5　検出遺構平面図

約15cmは風などによる風化をうけて、本来もつ堆積構造が失われていた。陸化の年代は、最上部からは飯蛸壺10が出土し、その形態から弥生時代後期～古墳時代頃とみられる。

2．遺構と遺物（図5・6）

第4層の上面で、以下の遺構を検出したが、南壁地層断面の所見から、これらは本来、第3層の上面から掘込まれた遺構である。いずれも近世初頭のものである。

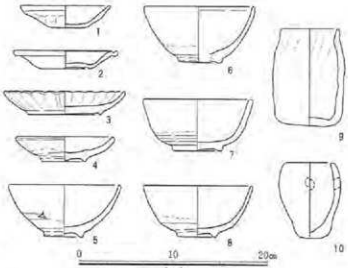


図6　出土遺物実測図
SE11(1)、SK12(2・3・5・6・9)、SK13(4・7・8)、第4層上部(10)

SE11　調査区の北西で検出され、東西1.30m以上、南北1.30m以上、深さ0.85mである。第2層のにぶい黄褐色細粒～粗粒砂で埋戻されていた。井戸側などは発見されなかった。遺物は少なかったが、土師器皿1が出土した。

SK12　隅丸方形を呈し、南北3.45m、東西1.95m以上で、深さは0.58mである。埋土はおおむね3層に分けることができ、上から黄褐色細粒～中粒砂(層厚最大；以下同、20cm)、黒色細粒～中粒砂(35cm)、にぶい黄褐色細粒～中粒砂(10cm)である。最下層は掘削時に形成され、他の2者は炭化した有機物や第4層の偽礫を含み、埋戻されていた。ごみを棄てた土壙である。

おもに上・中層から、内禿の瀬戸美濃焼陶器皿2・菊花の瀬戸美濃焼志野皿3や、肥前陶器碗5・6、土師器焼塩壺9などが出土した。

SK13　調査区の南西で検出した土壙で、南北2.00m以上、東西1.85m以上で、深さは0.64mを測る。一部分を検出したにとどまるが、平面・断面形や規模、埋土の状況はSK12に似ており、同様のごみ棄て穴であろう。肥前陶器皿4や瀬戸美濃焼陶器碗7・肥前陶器碗8などが出土した。

以上の遺構は、出土遺物の形態からみて17世紀初頭、豊臣後期に属する。

3．遺構の評価

今回発見した豊臣後期の遺構は、この時期、当地に住居が営まれていたことを示している。船場地域の開発が本格的に行われたのは豊臣期とされ、文献の検討からその範囲は、北は道修町筋、東は東横堀川、西は心斎橋筋、南は順慶寺町筋と想定されている[伊藤毅1987]。調査地は順慶寺筋のさらに南に当り、この範囲からは外れている。しかし、今回発見の豊臣期の遺構については、①方四十間とされる船場の街区内に当るとみて同時期の船場が順慶寺町筋より南の後の長堀のライン近くまで整備されていた。あるいは、②船場として開発された地域外の、恐らく中世以前から連続するプリミティブな集落の一部、という2つの可能性が考えられる。今回検出されたごみ棄て穴を南面する屋敷地の裏手とすれば、①の可能性も考えられよう。しかし、ごみ棄て穴から出土した遺物はコンテナで2箱

程度で、船場の屋敷地から出土する遺物量と比較すればいかにも少ない。このことから②である蓋然性をより強く考えるが、いずれにしても周辺地域での調査成果の増加を待って決するべきであろう。

〈まとめ〉

今回の調査で得られた成果は以下のとおりである。

豊臣後期に属する井戸およびごみ棄て穴2基を発見した。

海浜成堆積層(第4層)を検出し、その上部から弥生時代後期～古墳時代前期の遺物を発見した。この発見は当地が陸化した時期を示す可能性があり、上町台地西側の大阪平野の成り立ちを考える上で重要な成果である。

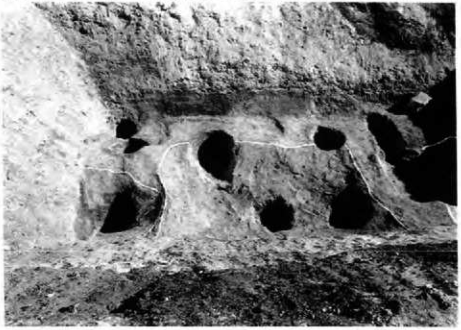
参考文献

伊藤毅1987、『近世大坂成立史論』　生活史研究所

地層断面（南壁）

検出遺構全景
（北西から）

SE11・SK12
（西から）



・調査個所　大阪市中央区本町橋29
・調査面積　49㎡
・調査期間　平成20年2月28日～3月5日
・調査主体　財団法人　大阪市文化財協会
・調査担当者　文化財研究部次長　南秀雄、黒田慶一

〈調査に至る経緯と経過〉

調査地は豊臣氏大坂城惣構内の西部に位置し、これまで北東のOS85－36次調査[大阪市文化財協会2003]や南方の大阪府教育委員会の調査地(現、マイドーム大阪)[大阪府教育委員会1986]で、いずれも豊臣期や江戸時代の遺構が検出されている。特に南隣の区画は江戸時代を通じて一貫して徳川幕府の直轄地で、浜の御蔵(米蔵)、次いで御塩噌蔵となり、それが1724(享保9)年の妙知焼けの大火で焼失すると、西町奉行所となった重要地点である(図1・2)。

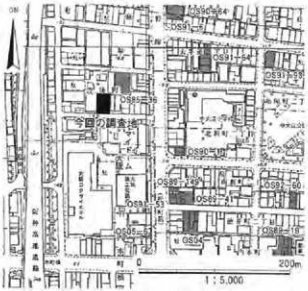


図1　調査地位置図

当地で大阪市教育委員会が試掘調査を行ったところ、地表下1.6～1.7mで大坂夏ノ陣のものとみられる焼土層があり、周辺での調査成果からみて、調査地には豊臣期前後の遺構・遺物が分布すると考えられた。今回の調査は焼土層の状況や関係する遺構・遺物の有無を明らかにし、この地域の歴史的変遷を復元する基礎資料を得ることを目的とした。

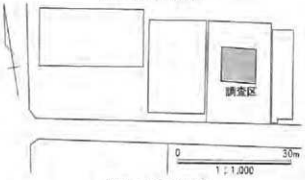


図2　調査区位置図

調査は、事業者が地下1.6mまでの地層を重機で掘削したのちに開始し、全て人力により掘削、精査した。またそれ以下の地層については部分的に深掘りをして確認することとした。

2月28日から地層断面と遺構面の精査を行い、遺構・地層の実測図の作成、写真撮影をし、3月5日現地におけるすべての作業を完了した。

現場の調査では平面図は磁北を基準に図化し、水準はT.P.値(東京湾平均海面値)で、本文・挿図中

では「TP＋○m」と記した。

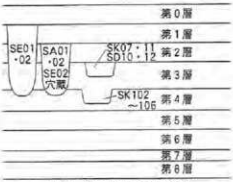


図3　地層と遺構の関係図

〈調査の結果〉

1．層序

本調査地の基本的な層序は以下のとおりである(図3・4・7)。

第0層：層厚40～160cmの現代盛土層で、焼土やコンクリート片を含み、第2次大戦以降の整地土である。

第1層：層厚60～90cmの黄褐～オリーブ褐色のシルト～粗粒砂の整地層で、層厚10～30cmの粗粒砂層で地上げしたのち、層厚5～10cmのシルト層で上面を整える地業が、2回以上行われている。

第2層：層厚10～30cmのオリーブ褐～黄褐色のわずかに中礫混り粗粒砂質シルトからなる整地層である。

第3層：層厚10～30cmの炭・焼土を多く含む暗褐色中粒砂層で、大坂夏ノ陣の焼土層である。瀬戸美濃焼志野皿1、肥前陶器皿3を含む

第4層：層厚70～80cmの明黄褐色シルト混り中粒砂の整地層で、5～30cmの敷層に細分層できる。時期を決定できる遺物はないが、慶長3(1598)年の大坂町中屋敷替えに伴うものと考えられる。格子タタキ痕跡をもつ古代の平瓦10が出土した。

第5層：層厚5～20cmの明黄褐色細粒砂の整地層である。

第6層：層厚30～40cmの暗灰黄色粘土混りシルトの偽礫と明黄褐～オリーブ褐色の粗粒砂混り小礫による整地層である。

第7層：層厚4cmの灰オリーブ色中粒砂である。

第8層：層厚10cm以上の灰オリーブ色シルト偽礫混り粗粒砂からなる整地層である。

2．遺構と遺物

a．第4層上面の遺構と遺物(図5・7)

いずれも第3層の焼土を埋土とする。

SK102：東西0.6m、南北0.3m、深さ0.1mの不定形の土壙である。

SK103：東西1.1m、南北0.3m、深さ0.2mの溝状の土壙である。

SK104：東西0.3～0.6m、南北0.6m以上、深さ0.3mの東で北に振る溝状の土壙である。

SK105：東西0.5m、南北0.8m以上、深さ0.3mの平面が楕円形の土壙である。肥前陶器皿2が出土した。

SK106：東西0.5m、南北0.6m、深さ0.1mの平面が方形に近い土壙である。

他に小ピットも多数あるが、深さ0.1m前後と浅く、並ばない。不定形の溝状の土壙には植物の細い根が見られ、木の根の痕跡の可能性がある。ただ第4層上面の植栽にしては浅いことから、上層からの侵入の可能性もある。

b．第３層上面の遺構と遺物(図５～７)

SK07：東西0.6ｍ以上、南北0.9m以上、深さ0.5mの土壙で、黄褐色中粒砂混りシルトを埋土とする。

SK11：長さ2.5ｍ以上、幅1.2m、深さ0.6mの北で東に振る楕円形の土壙で、暗灰黄色中粒砂混りシルトを埋土とするが、上部に明黄褐色中粒砂の偽礫が入る。瓦質のミニチュア土釜4、肥前磁器白磁碗5・6、中国製色絵大皿11が出土した。17世紀後半の遺構と見られる。遺物量が多いことからゴミ穴の可能性がある。

SD10：長さ4.3ｍ以上、幅0.4m、深さ0.1mの南北溝で灰色シルトを埋土とする。

SD12：長さ3.0ｍ以上、幅0.4m、深さ0.15mの南北溝で、埋土は上部が黄褐色シルト混り細粒砂、下部が第３層の焼土である。

c．第２層上面の遺構と遺物(図５～７)

SA01：柱穴SP05・06・09・13からなり、

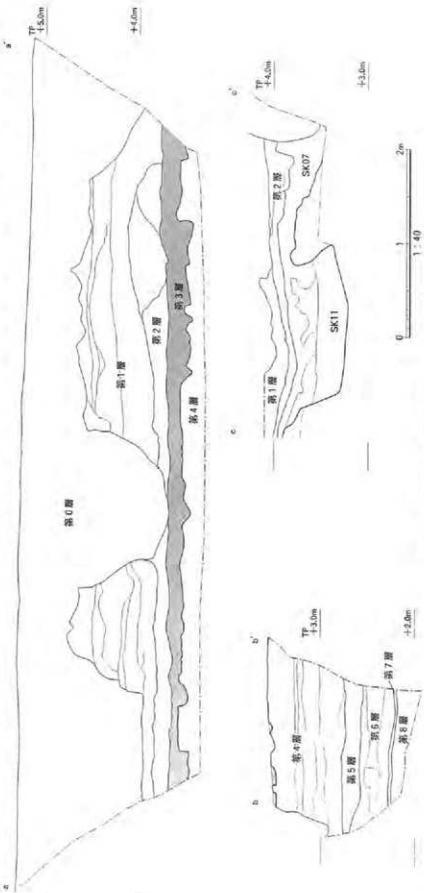


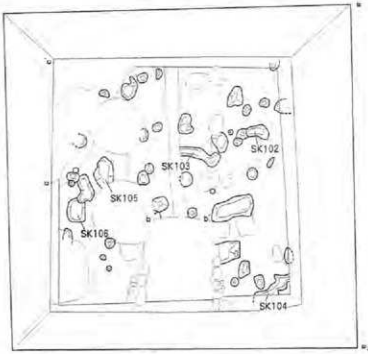
図４　地層断面図(位置は図５参照)

SA02に切られる。屋敷境の塀と考えられる。柱の芯々間は1.3～1.4mを測り、石の礎板の上面はSP05がTP+3.48m、SP06がTP+3.41m、SP09がTP+3.47m、SP13がTP+3.41mと、ほぼ高さが揃っている。SP09の断面図に見られるように深さ0.45m掘り、厚さ0.2m程度の土を入れて礎板を設置している。礎板上に見られる小石は、柱と柱穴掘形の壁の間に入れられた根固めであろう。柱穴の埋土はいずれも黄褐色シルト混り細粒砂である。

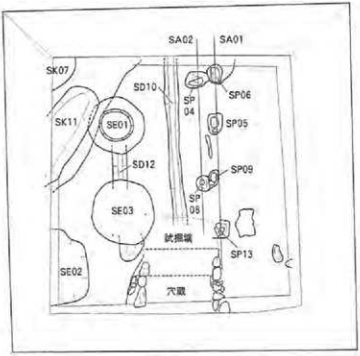
SA02：柱穴SP04・08からなる。柱の芯々間は2.7mで、SA01の2間分である。断面図からもわかるように礎板を入れずに、深さ0.55m、0.75m掘り、柱と柱穴掘形の壁の間に石を詰めて根固めしたと思われる。柱穴の埋土は黄褐色シルト混り細粒砂である。

SE02：直径2.0mの井戸で、軒平瓦7、三島手の肥前陶器鉢12が出土した。17世紀後半の廃棄とみられる。

穴蔵：北壁は試掘壙で失われていたが、東西1.8m、南北1.3m以上、深さ0.9mの平面が長方形で、壁面が野面積み石垣でできた地下室である。掘形は東西2.8m、南北1.7m以上で、掘形の裏込めから肥前磁器輪花皿9が、穴蔵内から肥前磁器輪花皿8が見つかった。築造は17世紀末～18世紀初頭と考えられる。



第4層上面

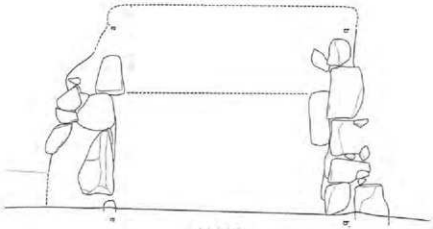


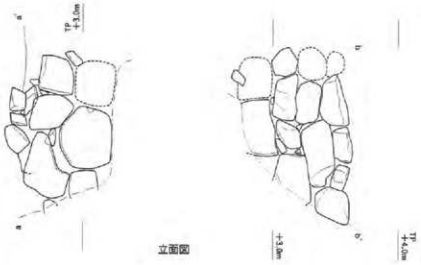
第3層上面

0　5m
1：100

図5　遺構平面図

d．第1層上面の遺構と遺物(図5・6)





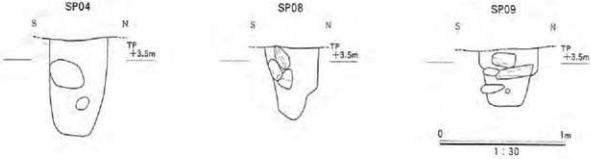


図6　穴蔵の平面図・立面図と柱穴の断面図

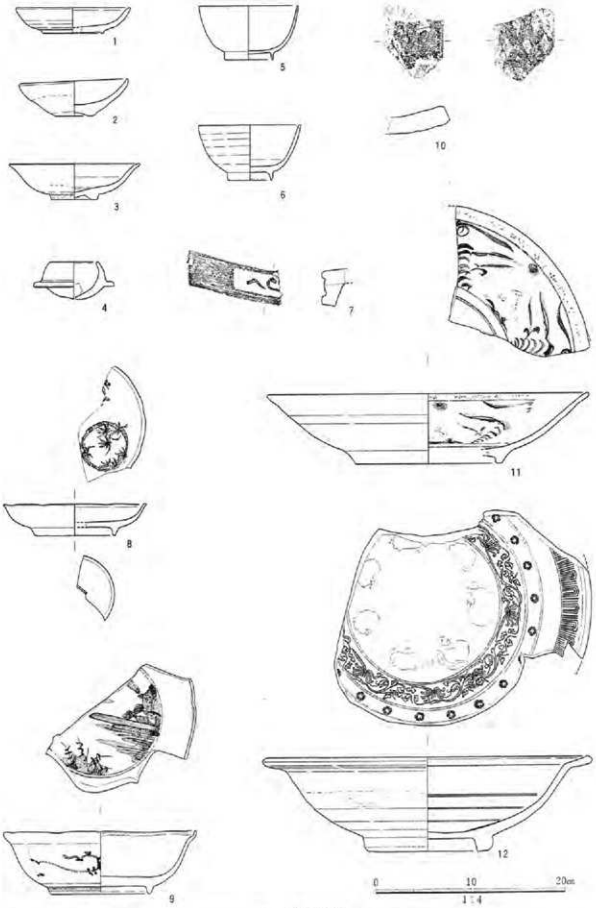


図7　遺物実測図
第3層(1・3)、SK105(2)、SK11(4～6・11)、SE02(7・12)、穴蔵内(8)、穴蔵裏込め(9)、第4層(10)

SE01：掘形の直径1.5mを測り、井戸瓦で築造し、裏込めに黄褐色粘土を詰めた井戸で、井戸側内は直径0.7mである。煉瓦と焼土で埋まっていたことから、当地で第２次大戦時に焼失した３階建て洋館に伴う井戸と考えられる。

SE03：掘形が直径1.7mの井戸で、煉瓦は出土していない。

図８　マイドーム大阪の遺構との位置図

３．考察

豊臣期～江戸前期の歴史的変遷について

当調査地を考えるに当って看過できないのが、南方のマイドーム大阪の調査地である[大阪府教育委員会1986・佐久間貴士1989]（図８）。

マイドーム大阪では発掘担当者の佐久間貴士氏によると、大坂冬ノ陣時には砦と考えられる遺構があったらしい。冬ノ陣の際、南側の本町橋で豊臣方の武将塙団右衛門の活躍があったことと相まって注目されるが、図８はその砦の下層の町屋遺構である。幅4.1mの南北道を挟んで、間口を開く東西に細長い短冊形地割で、１つの屋敷地は太閤検地の１間＝６尺３寸(約1.90m)で換算すると、間口７～８間、奥行き22間を測り、建物１～３棟と井戸１基、それにゴミ穴をもつ庭からなっていたようである。

マイドーム大阪とコクサイホテルのある一画は、江戸時代を通じて幕府の直轄地で、この南北道を踏襲する道路は見られないが、本町通の南側には現在も南北道があり、江戸時代の絵図にこの南北道が見られることから、佐久間氏はその南北道が豊臣時代の町割を踏襲する可能性を考え、マイドーム大阪の豊臣時代の南北道との関係を示唆している。

ただ今回の調査では夏ノ陣の焼土層下面では、建物遺構や井戸等は検出されず、この町屋遺構が当地におよんでいたかは不明である。マイドーム大阪でも冬ノ陣ではこの町屋は撤去され、溝で囲まれた南北23m以上、東西13mの曲輪を東西に３つ以上並べた砦状の遺構に変更されていたらしいので、当地も町屋を撤去し空閑地になっていた可能性はある。

また17世紀末以降の敷地境の塀と考えられるSA01・02は、図上で見る限りマイドーム大阪の地割は踏襲していない。豊臣時代には南北方向には道およびその側溝と背割りの排水溝が存在し、東西方向の敷地境の塀とは遺構の性格を異にしている。SA01・02は南北方向の塀であるから、当然南北方向の短冊形地割が予想される。江戸時代には東西道に間口を開いていたと考えられ、やはり豊臣時代の地割とは異質と考えるべきであろう。

〈まとめ〉

江戸時代前期の遺構である敷地境の塀SA01・02や、井戸、穴蔵、ゴミ穴を検出した。豊臣後期の夏ノ陣の焼土で埋まる土壙・ピットは性格が明瞭なものがなく、調査範囲は空閑地であった可能性も残る。周辺の調査が進めば、当地の歴史的変遷もより明確になるものと思う。

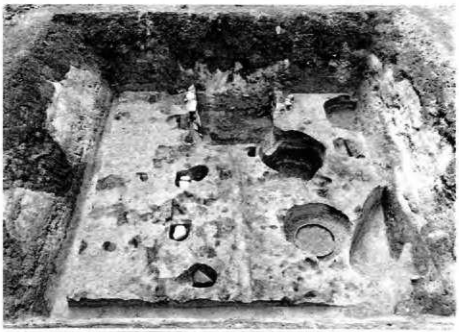
参考文献

大阪市文化財協会2003、『大坂城跡』Ⅶ

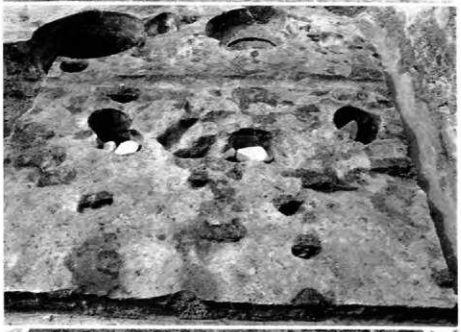
大阪府教育委員会1986、『大坂城惣構・西町奉行所跡発掘調査概要』

佐久間貴士1989、『よみがえる中世２－本願寺から天下一へ　大坂』、平凡社

第４層上面
（北から）

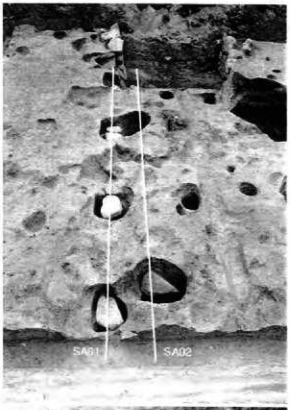


第４層上面
（東から）



第３層上面
（南から）

SA01・02
（北から）



穴蔵の石積み
（西から）

堆積状況
（東壁）

Ⅳ 天 王 寺 区

・調 査 個 所　大阪市天王寺区北河堀町54－3
・調 査 面 積　75㎡
・調 査 期 間　平成19年11月5日～11月13日
・調 査 主 体　財団法人　大阪市文化財協会
・調査担当者　文化財研究部次長 南秀雄、趙哲済

〈調査に至る経緯と経過〉

北河堀町所在遺跡は、古墳時代～中世の集落遺跡である。本調査地は南側が高く北側が低い斜面に造成された棚段に位置する。この位置は大阪府史跡茶臼山の南の河底池から河堀町～河堀口へと、東西に延びる構造性の谷の南斜面に当っている(図1・2)。この谷は『続日本紀』の延暦7(788)年3月16日の条にある和気清麻呂が河内と摂津の国境に川を掘って堤を築き、河内川を荒陵の南から西流させようとして掘削した運河の跡といわれている。この条項の叙述が史実であるならば、運河は河底池～河堀口に繋がる構造谷を利用したことになる。

調査地の西側を南北に走る庚申街道は、四天王寺から古市街道へ続く古代～近世の幹線道路のひと

図1　調査地位置図

図2　調査区位置図

つである。この街道を挟んで、西隣の敷地で行った発掘調査(KC99－1・00－1)では、飛鳥時代の遺構や遺物が見つかり、前期難波宮や四天王寺の造営との関係があると考えられた。また、多量の埴輪片が出土し、付近に古墳があった可能性も指摘された[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2002]。

当敷地で大阪市教育委員会が行った試掘調査では、地表下55cm以下で中世の遺物包含層が分布することが明らかになったが、当地域の基盤層である上町層は地表下110cmと50cmで確認されて深度が一定せず、複雑な地形であると考えられた。そこで、地層の時期や遺構遺物の分布状況を明らかにし、地域の歴史を復元するための基礎資料を得ることを目的として、本調査を実施した。11月5日に重機により表土掘削を行い、翌日より人力により掘下げ、実働7日間の調査により、遺構と遺物の検出と記録に努めた。

本報告で用いる水準は東京湾平均海面値を用い、TP＋○mと表記する。また、示北記号は図1が座標北を、それ以外は磁北を示す。

〈調査の結果〉

1．層序

本調査には、現代の盛土・攪乱層(第0層)が現地表から平均約30cmの深さまで分布した。その下位の遺物包含層を5層に区分し、基盤の上町層を第6層とした(図3・4)。

第1層は暗オリーブ～オリーブ褐色の細礫・砂質シルトからなる畠作土層で、基盤層である第6層の分布高度が高い調査区東南部では層厚が8cm前後であるのに対して、第6層の分布高度が低い西北部では北西側に徐々に層厚を増し、最大35cmであった。近世・近代の遺物を含んだ。

第2層は褐色の中～細礫・粗粒砂質シルトからなる作土層で、第1層と同じく調査地北西側に厚くなり、最大層厚は20cmであった。須恵器、土師器、瓦器、瓦質土器、輸入青磁など、中世後半の遺物を含んだ。

図3　地層と遺構の関係図

第3層は第2層とよく似た褐色の中～細礫・粗粒砂質シルトからなる作土層で、第2層と同様に調査地西北部で厚くなり、最大層厚は25cmであった。第2層との境界は不明瞭であった。土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、古代瓦、中国製白磁、埴輪など、多時期の遺物を含んだ。

第4層はにぶい黄褐色の中～細礫・粗粒砂質シルトからなる盛土層で、西北部の第6層が低い範囲に分布したが、層厚は第6層の分布高所の外周で厚く25～30cmあり、北西側へは第3層に削られて薄くなり尖滅した。須恵器、瓦質土器などを含んだ。

第5層は黄褐色～明黄褐色の中～細礫・粗粒砂質シルトからなる盛土層で、層厚は13～35cmであった。褐灰色シルト質細粒砂の中礫大の偽礫を含んだ。溝SD03の北西側に分布し、北西側へ徐々に分布高度を下げつつ層厚を増した。本層の上面でSD02・03を検出した。

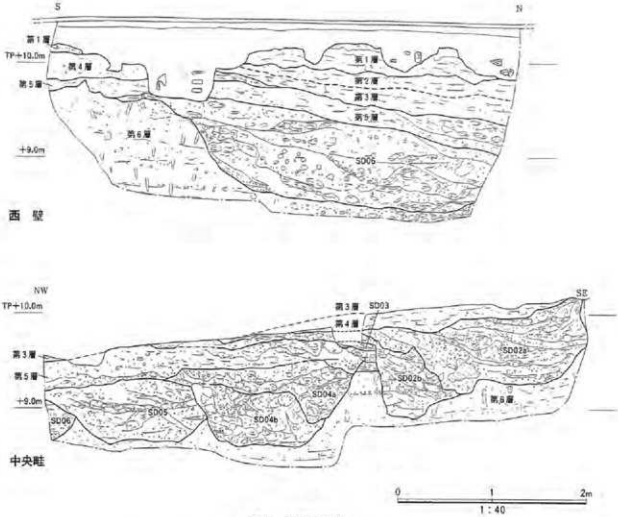


図4　地層断面図

第6層はにぶい黄褐色で分級の悪い中～細礫・シルト質粗粒砂からなる海成層で、当地域の基盤層である上町層である。TP+8.5m以下では径5～8cmの亜円偏平～棒状の中礫層に変化した。砂質部には甲殻類のものとみられる直径2.5～4.0cmの巣穴が多数分布した。巣穴の充填物は黄灰～灰黄色の極細粒砂質シルトやシルト質粗粒砂であり、後世に削剥された第6層の上部堆積物とみられる。本層の上面で、SD04～06を検出した。

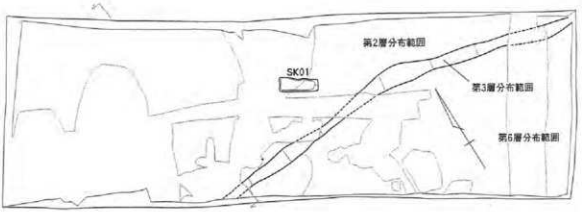
2．遺構と遺物

a．遺構

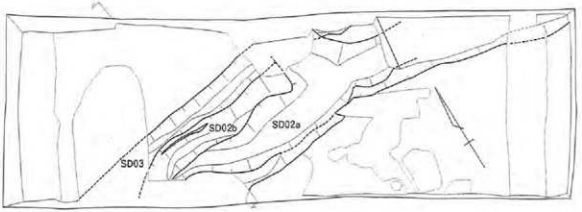
第6層上面で溝3条、第5層上面で溝2条、第3層上面で土壙1基などを検出した(図5)。

第6層上面のSD06は調査地の西北部を北東－南西方向に延びる幅2.2m以上、深さ1.1mの溝で、検出した溝の中では最大の規模であった。埋土は褐色をおもな色調とし、中礫サイズの粘土偽礫を多数含む中～細礫・シルト質粗粒砂が主体の人為層であった。

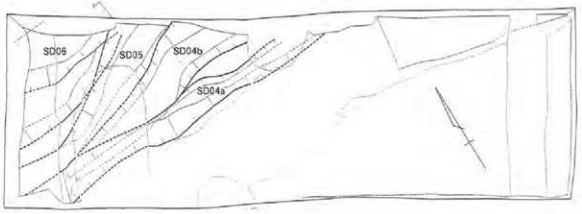
SD05はSD06が埋積後にSD06の南側にSD06と一部重なって北東－南西方向に延びる幅0.5m～1.5m以上、深さ0.1m未満～0.7mの溝で、東側が幅広く深い。埋土は黄褐色をおもな色調とし、中礫サ



第２・３層上面の遺構



第５層上面の遺構



第６層上面の遺構

0　　5m
1：100

図５　遺構平面図

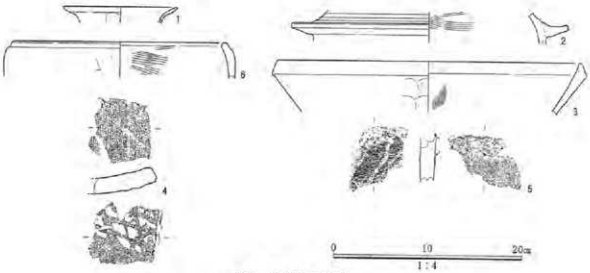


図6　出土遺物実測図

SD04b(1)、SD02(4・6)、第3層(2・3・5)

イズの砂質粘土偽礫を含むシルト・細礫質粗粒砂が主体の人為層であった。

SD04はSD05の埋積後にSD05の南側にSD05と一部重なって掘られた溝で、北側で東北東－西南西に延びる幅0.7m、深さ0.8m以下のSD04bと、SD04bが埋積後に南側で東西方向に延びる幅0.8m～1.7m、深さ0.3～0.8mのSD04aとが重なっていた。04bは05と同様に東側が幅広く深い。埋土は04a・bとも黄褐色をおもな色調とする砂質シルトの大～中礫サイズの偽礫層で、基質は砂質シルトであった。SD04a・bの埋土から土師器や瓦器が出土した。

第5層上面のSD03は第4層の整地後にSD04aの南側にこれと一部重なって掘られた東西方向に延びる幅0.6m以上、深さ0.3mの溝である。埋土のにぶい黄褐色のシルトラミナと灰色の極細粒砂ラミナの互層構造から、唯一、流水と溜水があったことが認められた溝である。

SD02はSD03の埋積後にSD03の南側にSD03と一部重なって掘られた東西方向の溝で、北側の幅0.8m以上、深さ約0.8mのSD02bと、SD02b埋積後に南側に掘られた幅約1.7m、深さ約1mのSD02aとが重なっていた。SD02aは調査地東部で北北東－南南西方向、調査地西部でやや屈曲してより東西方向に近くなって延び、屈曲部でT字状に北側に枝溝が延びていた。埋土はSD02a・bとも黄褐～褐色をおもな色調とし、シルト質粘土やシルトの大～中礫サイズの偽礫を多量に含む中礫～粗粒砂が主体の人為層であった。埋土からは土師器、須恵器、瓦器、古代瓦、埴輪などが出土した。

第2層上面の土壙SK01は長さ2.0m、幅0.8m、深さ0.4mの土壙で、埋土はわずかに礫質粗粒砂質シルトからなり、土師器片が出土した。

SD02aの南・東側は第6層の上町層が高く分布したが、現代の造成により削られて遺構は分布しなかった。

SD06～02は、その重なりから、古い方から新しい方へ、北の低い位置から南の高い位置へ順次造りかえられたことが明らかとなった。また、埋め土のようすからは、掘っては埋め、埋めては掘るという行為が、整地を交えて比較的短期間に行われたことが推定された。さらに、溝03を除く溝には流水や溜水の証拠は認められず、これらが空堀であったと推定される。

以上のことから考えると、これらの溝が、中世の砦を囲む防御用の堀のように、南の高台と北の谷底の比高を利用して、高さを際立たせる区画の役割を果たしていた可能性がある。

b．遺物

SD04bから出土した1は15世紀頃の土師器皿である。第3層から出土した2は瓦質土器羽釜の鍔部分、3は瓦質土器の擂鉢であり、ともに14～15世紀のものである。6はSD02から出土した土師器鉢である。5は第3層から出土した円筒埴輪の破片である。4はSD02から出土した格子タタキのある古代の平瓦であり、白鳳期のものとみられる。ただし、布目が粗いので時代が降る可能性もある(図6)。

〈まとめ〉

本調査では、河底池から東に延びる構造谷の南斜面に、斜面に並行する中世後半の複数の空堀を検出した。この空堀群はおおむね中世後半の比較的短い時間の中で、盛土を挟みながら北から南へ順次造り変えられたものである。これらの堀の性格は明らかではないが、砦などの防御用の施設の一部であった可能性を指摘できよう。また、古代の瓦は近傍の四天王寺との関連を想像させるし、数は少ないが、西側のKC00－1調査地と同様に埴輪の破片が出土したことにより、近隣に古墳が存在した可能性を再度確認した。

引用文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2002、「住友不動産株式会社による造成工事に伴う北河堀町所在遺跡発掘調査(KC00－1)」:『平成12年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.61－69

調査地近景
（北東から）

中央奥のビルは
KC00−1調査地

第３層上面の検出状況
（東から）

SD02掘下げ状況
（北西から）

SD03・06掘下げ状況
（西から）

SD02～06断面
（南西から）

SD06断面
（東から）

難波京朱雀大路跡発掘調査(NS07－2)報告書

・調 査 個 所　大阪市天王寺区清水谷町14－3・14－15・14－16
・調 査 面 積　40㎡
・調 査 期 間　平成20年2月18日～2月21日
・調 査 主 体　財団法人　大阪市文化財協会
・調査担当者　文化財研究部次長　南秀雄、櫻井久之

〈調査に至る経緯と経過〉

調査地は府立清水谷高校の南側(図1)にあって、前期難波宮の「朱雀門」より南に500mの場所にある。周知の埋蔵文化財包蔵地として指定される難波京朱雀大路跡の範囲からみると、その西辺に当る位置となる。また、調査地南側には文禄3(1594)年に豊臣氏大坂城の南の防御ラインとして設けられた惣構南堀が推定されている[積山洋2000]。

調査地周辺でのこれまでの主たる調査として、西150mにOS91－3次調査があり飛鳥時代の掘立柱建物12棟、柵3列が検出されている[大阪文化財協会1991]。また、北西50mのOS92－7次調査地でも飛鳥時代の大型の掘立柱建物が見つかっている[松本啓子1993、大阪市文化財協会2002b]。そのほかにも周辺では古代の建物跡が多く確認されている。一方、調査地の南西40mに位置する市営空清住宅におけるOS99－16次調査では、豊臣前期の畠を埋める整地層から天正13(1585)年銘の一

図1　調査地位置図

図2　調査区配置図

石五輪塔が出土している[大阪市文化財協会2002a]。

当該地での建物建設に伴って、2008年1月、大阪市教育委員会が敷地内の南北2箇所で試掘を行った。北試掘壙では地表下約0.3mに地山層が、南試掘壙では地表下約0.5mに地山層が見られ、ピットの存在も確認された。この結果を受け、2月18日より本調査に着手し、重機による現代盛土・攪乱の除去を行った。調査区は市教委の指示に従って敷地中央部に設け、東西4m、南北10mで、40㎡の調査面積を確保した。

調査では、地山層の上面でピット・土壙・溝といった近世初頭から近代にかけての遺構が検出され、これらの遺構の記録作成を順次進め、21日に調査区の埋戻し、機材の撤収を行い、現地での作業を終えた。調査で使用した水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)で、本文・挿図中では「TP+○m」と記した。また、本報告の指北記号は図1に座標北を用いた以外、磁北を用いている。

〈調査の結果〉

1．層序(3・4)

調査区のある敷地は北から南に向って緩やかな傾斜をもっており、地山層の標高も調査区北壁で高くTP+18.1mにあり、南壁ではTP+17.3mに最高所がある。

第0層：現代の盛土や攪乱による地層である。調査区東辺では、本層内に建物の基礎であったと思われる煉瓦敷や敷地境界の石列や橋が正南北方向に設けられていた。

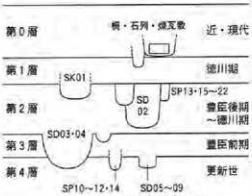


図3　地層と遺構の関係図

第1層：黄灰～暗灰黄色細礫質・粗粒砂シルト層である。西壁断面では南に向って層厚を増す傾向にあり、平面的に輪郭の捉えられなかった溝が断面にかかっているのかもしれない。層厚は最大40cmである。図7の堺系擂鉢1などが含まれる。本層内の遺構としてSK01がある。

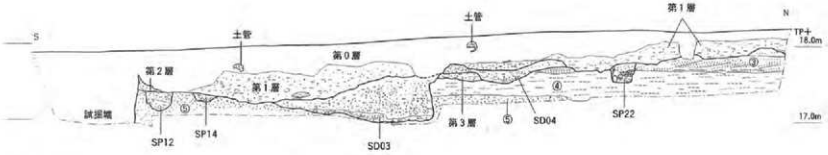
第2層：にぶい黄～浅黄色細～中礫質シルト・粗粒砂からなる整地層である。南壁では層厚20cmある。本層上面に溝SD02や柱穴SP13など、肥前系陶磁器を含んだ遺構が多数存在したが、この層内に肥前系陶磁器は含まれない。また、本層によってSD03・04が埋戻される。

第3層：オリーブ褐色粗粒～極粗粒・砂粘土質シルトの作土層である。本層上面にSD03・04、層内にSP10～12・14、下面に耕作溝SD05～09がある。遺物には土師器や須恵器の細片しかないが、層相からOS99－16次の第3a層(豊臣前期)に相当する。

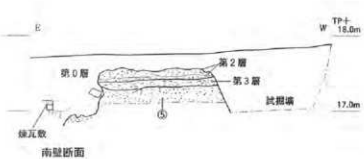
第4層：段丘構成層である。今回確認できた約1mの間に①浅黄色含中礫粗粒砂、②にぶい黄橙色極細粒砂、③淺黄色粗粒～極粗粒砂、④明黄褐色極細粒砂、⑤浅黄橙色細～中礫質中粒～粗粒砂がほぼ水平に堆積している。

2．遺構と遺物(図5～7)

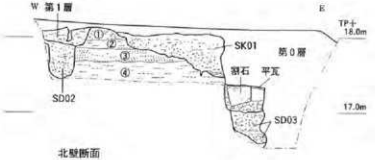
今回検出された遺構については、a．第3層内および下面遺構、b．第3層上面遺構、c．第2層



西壁断面



南壁断面



北壁断面

0　2m
1：50

①～⑤は第4層（地山層）

図4　調査区断面図

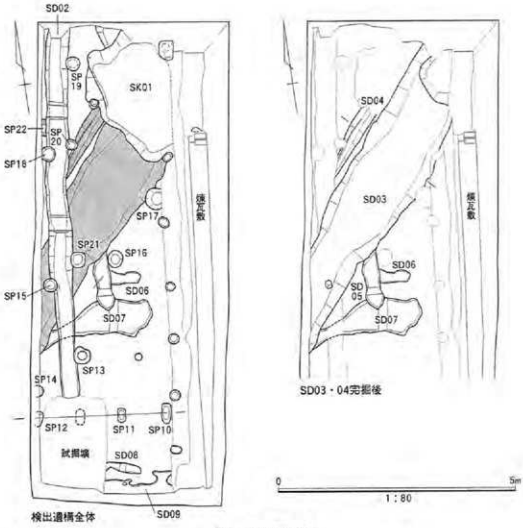


図5　遺構平面図

上面および第1層内遺構、d．第0層内遺構に分けて報告する。

a．第3層内および下面遺構

第3層下面のSD05～09はいずれも深さ0.03mほどの浅い溝である。幅は一定せず、輪郭も歪なところがある。耕作溝であろう。第3層内のピットSP10～12・14は調査区南部にある。SP10～12は正東西方向に並び、柵となる。SP10－SP11間が0.95m、SP11－SP12間が1.75mあり、後者の間にもう1基のピットが存在したものと推測される(図6)。

b．第3層上面遺構

調査区北半部に北東－南西方向を採った溝SD03・04がある。SD03は幅1.5m、深さ0.7mの規模をもつ。調査区北東隅付近でさらに0.4mほど深くなっている。溝の南側から第2層をもって埋められている(図6下段1～8)。遺物には豊臣期の巴文軒丸瓦2・唐草文軒平瓦3のほか古代の土師器・須恵器があったが、肥前系陶器は全く含まれなかった。SD04はSD03の北側に併走する溝で、幅0.4m、深さ0.2mである。第2層によって埋戻され、流水の痕跡は認められない。当該遺構面前後の第3層内、第2層上面の遺構に正方位方向を意識したものが存在するにもかかわらず、SD03・04とも斜行していることは注目されよう。その要因として考えられるのは調査区南方に存在する大坂城惣構堀の

方向である。[積山2000]の復元によれば、南面堀は調査地付近で東西方向から北東－南西方向に屈折する(図8)。まだ、この部分の惣構堀が確認されたわけではないのでこれ以上言及することはできないが、可能性を指摘しておきたい。

c．第2層上面および第1層内遺構

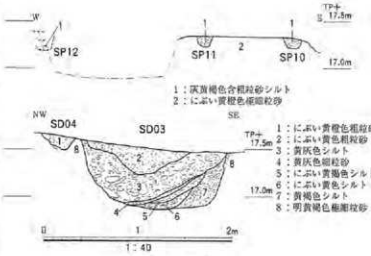


図6　遺構断面図

第2層上面のSD02は調査区西壁に際にある南北溝である。幅0.5m前後あり、調査区南部で0.03mの深さしか残らないが、北壁断面では地山層を0.50m掘込んでいる。直線的に掘削されており区画溝としての機能が考えられる。埋土は暗灰黄色粗粒～極粗粒砂質シルトで、細礫大の偽礫を多く含んでいた。この溝の埋没後、それに沿って柵が造られたようで、SP13・19・20・21が溝東肩に、SP15・18が西肩に並ぶ。そのうちのSP13には巴文軒丸瓦の瓦当部4が埋土中位に上向きに収まっていた。柱を抜取ったのちに埋込んだものであろう。江戸時代後期のものである。そのほかのピットのうち、SP22はSD02に先行するが、SP16・17についてはSD02との関係や関連するピットが明らかでない。

第1層内の遺構には調査区北端のSK01がある。東側を近代の石列等によって破壊されている。検出された西側の肩部の形状は不整形で、複数の土壙が重なっている可能性も考えられるが、それを明確に捉えることはできなかった。深さは0.5mある。肥前系磁器染付など19世紀前半の遺物が出土した。

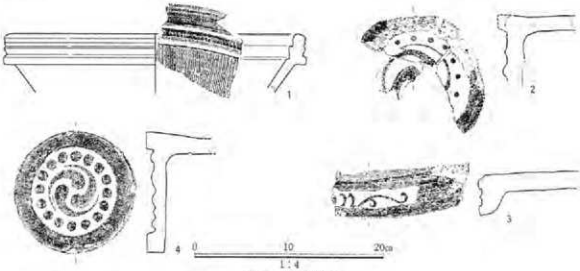


図7　遺物実測図
第1層(1)，SD03(2・3)，SP13(4)

d．第０層内遺構

調査区東壁に沿って６基のピットから構成される柵があり、その撤去後、同じ位置に割石による石列が設けられていた。石列は東側に面をもって１段分を並べたものである。石列の東には煉瓦敷が南北7.3ｍにわたって見つかった。煉瓦間の目地材が粗く、容易に取り外すことができた。煉瓦に刻印は認められなかった。

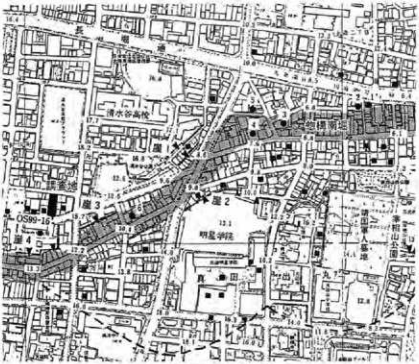


図８　惣構南堀の推定位置

〈まとめ〉

今回の調査地は難波京朱雀大路跡内にあったが、それに伴う路面や側溝といった遺構は確認できなかった。また、周辺の調査地に検出されているような古代の掘立柱建物も認められなかった。これについては道路内に当るからという説明ができるのかもしれないが、限られた調査面積での議論には無理があろう。存在の確かなもっとも古い遺構は畠の耕作溝で、近隣の調査から豊臣前期のものと考えられた。この畠の作土層上面に大小２条の溝が検出された。これらの溝の方向は推定される惣構南堀の方向と一致しており（図８）、関連する遺構の可能性を指摘することができる。今後の調査により惣構南堀の実態が明らかにされてくれば、今回検出した遺構についての評価も明確なものとなってこよう。

参考文献

大阪文化財協会1991、『上町台地の遺跡―大阪市天王寺区清水谷町の調査―』

大阪市文化財協会2002a、『大坂城跡』Ⅴ

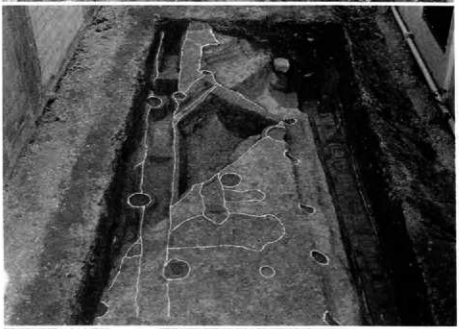
大阪市文化財協会2002b、「清水谷地区の調査」：『大坂城跡』Ⅵ、pp.219－233.

積山洋2000、「豊臣氏大坂城惣構南面堀の復元」：渡辺武尾氏退職記念論集刊行会編『大坂城と城下町』、pp.43－59.

松本啓子1993、「豪族の邸宅？―清水谷町の調査から―」：大阪市文化財協会編『草火』第43号、pp.６－７

遺構検出状況
（南から）

調査区北半部の遺構
（南から）



SD03完掘状況
（北東から）

・調査個所　大阪市天王寺区清水谷町17－10、11
・調査面積　21㎡
・調査期間　平成19年4月11日～4月14日
・調査主体　財団法人　大阪市文化財協会
・調査担当者　文化財研究部次長　南　秀雄、小田木富慈美

〈調査に至る経緯と経過〉

調査地は史跡難波宮跡の南方約100m、前期難波宮「朱雀門」跡の西方約100mに位置する(図1)。付近では、南に約10m離れた敷地でOS95－12次調査が行われている(図2)。この調査では、古代の整地層の下位で7世紀中葉から後半にかけての掘立柱建物が1棟、古墳時代に遡る可能性のある掘立柱建物が1棟と古代の溝が検出されている[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1997]。このほかにも、南ではOS87－135・95－1・97－12次調査、南西でOS00－25次調査が行われるなど、周辺では数多くの調査が実施され、前期難波宮期を中心に遺構・遺物や整地層が確認されている。なお、これら清水谷周辺の調査成果については、すでに報告書が刊行されている[大阪市文化財協会2002]。一方、近世においても、調査地から南へ約200mの地

図1　周辺の遺跡

1:OS91-3	2:NW82-33·45	3:OS87-135	4:OS88-97
5:OS92-7	6:OS93-3	7:OS96-22	8:NS90-14
9:NS95-11	10:OS95-12	11:OS00-25	12:OS97-12
13:OS95-1	14:OS99-30	15:OS98-3	16:OS88-29
17:OS96-28	18:OS99-82	19:OS87-124	20:OS95-56
21:OS99-16	22:NW87-18	23:OS98-19	24:NS00-19
25:NW06-1			

図2　周辺の調査位置図

点で行われたOS93－３次調査で豊臣期の惣構堀が確認されたほか、徳川期を通じて多くの遺構・遺物が検出されている。

2007年３月に調査地において大阪市教育委員会が試掘調査を行ったところ、段丘構成層上面で近世の柱穴または土壙と思われる遺構が確認されたため、本調査を行うことになった(図３)。発掘調査を実施するに当り、周辺で確認されたような古代、豊臣～徳川期の遺構の拡がりを確認することが期待された。

調査は2007年４月11日に開始した。現代および近世の盛土層を重機によって除去し、それ以下の段丘構成層上面までを人力で掘削した。段丘構成層上面では近世の遺構を検出し、適宜写真撮影と記録作業を行った。４月14日に埋戻しを行い、発掘調査に関する基本的な作業をすべて終了した。本報告で使用した方位は図３・６が磁北、これ以外は国土座標第Ⅵ系に基づく座標北を示す。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)で、本文および挿図中ではTP＋○mと略記する。

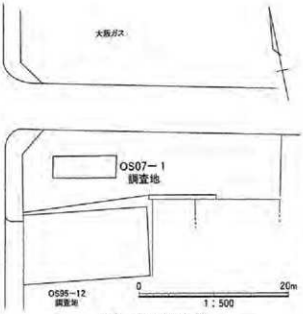


図３　調査区周辺図

図４　地層と遺構の関係図

〈調査の結果〉

１．層序

調査では段丘構成層の上面に中世～近世の地層が良好な状態で残存していた。各層の上面では遺構が検出された。以下で各層の特徴について述べる(図４・５)。

現代盛土層：厚さ40～80cmで、数枚の整地単位に分かれる。下部は焼土を多く含み、第二次世界大戦に伴う可能性がある。

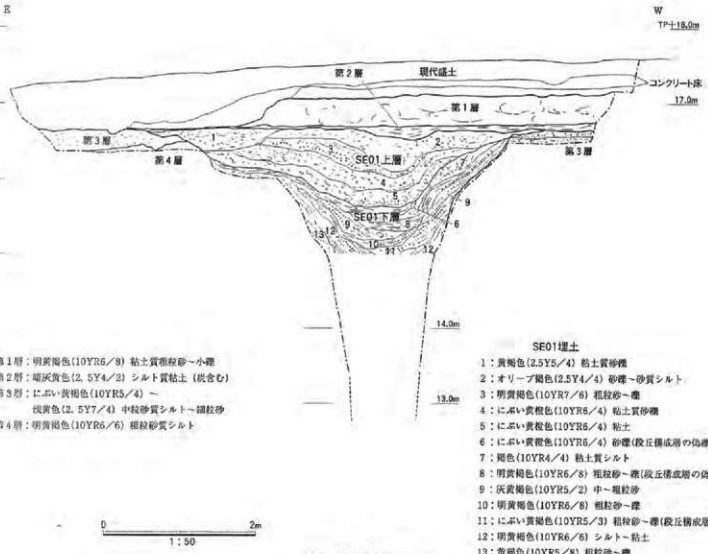
第１層：層厚40cmの明黄褐色粘土質粗粒砂～小礫層で、段丘構成層の偽礫からなる盛土層である。出土遺物は幕末期の国産陶磁器・土器類および瓦類である。

第２層：暗灰黄色シルト質粘土層で、炭を含んでいる。層厚は10cmである。出土遺物は19世紀中葉の国産陶磁器および土器類、瓦である。このほか、窯道具が出土している。

第３層：にぶい黄褐～淡黄色中粒砂質シルト～粗粒砂層で、段丘構成層の偽礫を含む盛土層である。層厚は20～30cmである。出土遺物は肥前磁器・陶器の細片である。豊臣期ないしは徳川期初頭の整地層であろう。本層

の上面では井戸・土壙が検出された。

第4層：明褐色砂礫層で、段丘構成層である。上面の標高はTP+16.4～16.5mで、東へ向って低くなっている。本層の上面では溝・落込み・柱穴・小穴を検出した。



第1層：明黄褐色(10YR6/8) 粘土質細粒砂～小礫
第2層：暗灰黄色(2.5Y4/2) シルト質粘土（炭含む）
第3層：にぶい黄褐色(10YR5/4) ～
　　浅黄色(2.5Y7/4) 中粒砂質シルト～細粒砂
第4層：明黄褐色(10YR6/6) 細粒砂質シルト

SE01埋土
1：黄褐色(2.5Y5/4) 粘土質砂礫
2：オリーブ褐色(2.5Y4/4) 砂礫～砂質シルト
3：明黄褐色(10YR7/6) 粗粒砂～礫
4：にぶい黄橙色(10YR6/4) 粘土質砂礫
5：にぶい黄橙色(10YR6/4) 粘土
6：にぶい黄橙色(10YR6/4) 砂礫(段丘構成層の偽礫を含む)
7：褐色(10YR4/4) 粘土質シルト
8：明黄褐色(10YR6/8) 粗粒砂～礫(段丘構成層の偽礫を含む)
9：灰黄褐色(10YR5/2) 中～粗粒砂
10：明黄褐色(10YR6/8) 粗粒砂～礫
11：にぶい黄褐色(10YR5/3) 粗粒砂～礫(段丘構成層の偽礫を含む)
12：明黄褐色(10YR6/6) シルト～粘土
13：黄褐色(10YR5/8) 粗粒砂～礫

図5　調査区南壁断面図

2．遺構と遺物

第3層上面では、井戸1基と土壙2基を検出した(図6)。

SE01は平面形が隅丸方形の井戸であり、東西3.8m、南北1.7m以上を測る。東側はテラス状に段をつけて浅く掘られている。井戸側は確認されなかった。記録作業を行うことのできた埋土の上層は人為的な埋戻し土層であった。その下層は、重機で掘削したため詳細な記録は行っていないが、水に漬かった状態を示す粘土質砂礫層や段丘構成層が崩れて落込んだ堆積層であり、自然に埋まったものとみられる。第3層上面から約4mまで掘削したが、底は確認できなかった。埋土からは17世紀初頭

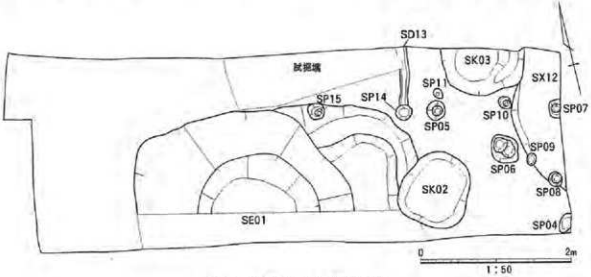


図6　第4層上面検出遺構平面図

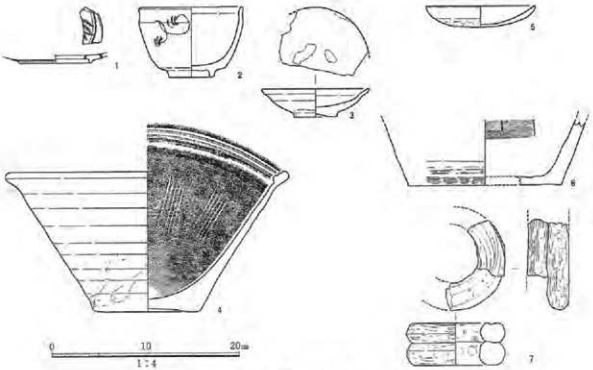


図7　出土遺物実測図

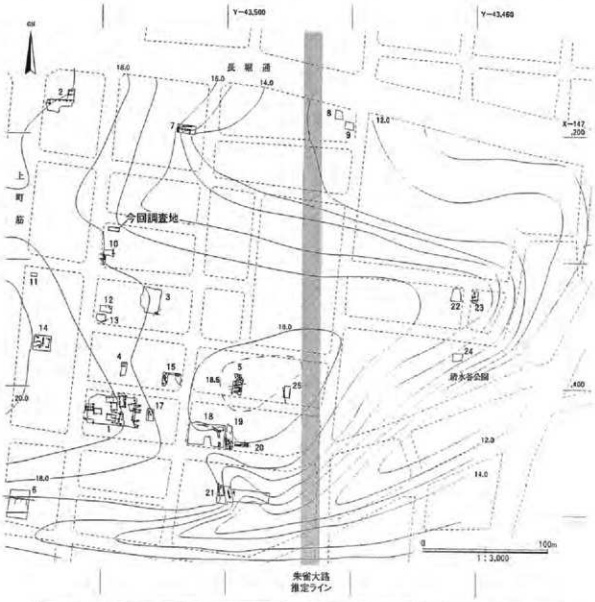
SE01(1～5)、SK02(6)、第2層(7)

～前半の中国産磁器・国産陶磁器のほか、土師器・須恵器が出土した。

SK02は東西0.8m、南北1.0mの隅丸方形の土壙で、埋土は灰黄色砂質シルトである。備前焼壺の底部が出土した。SK03は直径1.1mの円形の土壙と思われ、北半部は調査区外になる。深さは0.1mと浅く、土師質土器火入れの破片が出土した。

第4層上面では、落込みや溝のほか柱穴および小穴を検出した。

柱穴は建物の一部の可能性があるが、調査範囲が狭いため、組合せを詳細に検討することができなかった。SP07・05・15は東西に並んで検出されている。3基ともに直径は0.2mで、柱痕跡の直径は



1：OS91－3	2：NW82－33・45	3：OS87－135	4：OS88－97	5：OS92－7	6：OS93－3
7：OS96－22	8：OS90－14	9：NS95－11	10：OS95－12	11：OS00－25	12：OS97－12
13：OS95－1	14：OS99－30	15：OS98－3	17：OS96－28	18：OS99－82	19：OS87－124
20：OS85－56	21：OS99－16	22：NW87－18	23：OS98－10	24：NS00－19	25：NW06－1

図8　清水谷周辺の地形復元図（[大阪市文化財協会2002]に一部加筆）

0.1mである。埋土は灰褐色中粒砂質シルトで、段丘構成層の偽礫をわずかに含んでいた。これらは規模や埋土の特徴ともに類似していることから、一つの建物の柱穴であった可能性がある。柱間寸法は約1.6mである。また、SP06・08・10でも柱痕跡が確認されており、掘立柱建物の柱穴と思われる。

以上のほかにも小穴が数基確認されたが、詳細については不明である。なお、柱穴および小穴からは瓦片が出土したのみで、時期を特定することはできなかった。

SX12は調査区の東で検出された不整形の浅い落込みで、SD13は幅0.2m、深さ0.1mの浅い溝である。これらの遺構からは遺物は出土していない。

3．出土遺物(図7)

1～5はSE01より出土した。1は景徳鎮産青花皿である。17世紀初頭であろう。2は肥前磁器染付天目碗である。3は肥前陶器皿である。釉は灰釉と思われ、見込内には砂目痕が残る。4は九州系陶器の擂鉢で、施釉はない。擂り目は6本を1単位とする櫛描きで、体部の中位に認められるが、使用による磨滅が著しいため底部にまで及んでいたかは不明である。5は土師器皿である。これらは17世紀第2四半期のものであろう。6はSK02より出土した備前焼壺の底部である。7は第2層から出土した環状の窯道具である。2個体が熔着したものとみられる。釉の付着は認められない。

〈まとめ〉

今回の調査は、南の敷地で検出されたものと同様に古代の建物の検出を目的の一つとしたものであった。しかし、古代に遡る可能性のある遺構は検出することができなかった。ここで、南のOS95－12次調査で確認された段丘構成層上面の標高をみると、調査区の南端ではTP＋17.2mであり、今回の調査地よりも約1m高かった(図8)。よって、調査地では難波宮期に属すると考えられる整地層および遺構は、近世の整地や遺構の掘削によって失われた可能性がある。

近世においては、17世紀中葉以前に掘罠された井戸や土壙、建物の柱穴を検出することができた。当地は大坂城惣構内に位置している。第3層が豊臣期の整地層に当るとすれば、第4層上面で検出した柱穴は豊臣期以前に遡る可能性を指摘しうる。ただし柱穴の規模からみて、存在した建物はさほど大規模ではないであろう。

「参考文献」

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1997、「竹網氏による施設工事に伴う発掘調査(OS95－12)略報」『平成7年度大阪市埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.59－63

大阪市文化財協会2002、『清水谷地区の調査』『大坂城跡』Ⅵ、pp.219－233

遺構完掘状況
（西から）

調査区東半部遺構検出状況
（東から）

SE01断面
（北から）

・調査個所　大阪市天王寺区勝山２丁目331・332
・調査面積　約30㎡
・調査期間　平成19年５月29日～６月１日
・調査主体　財団法人　大阪市文化財協会
・調査担当者　文化財研究部次長　南秀雄、高橋工

〈調査に至る経緯と経過〉

四天王寺の中心伽藍を包摂する四天王寺旧境内遺跡は、天王寺区南部の上町台地上に位置している。中心伽藍については、1950年代に文化財保護委員会によって行われた発掘調査で７世紀代の遺構・遺物が出土し、創建時の堂塔が現在と同じ位置に建てられていることがわかった。一方、その周囲の旧境内遺跡については、1985年以降、大阪市文化財協会によって発掘調査が継続されてきてい

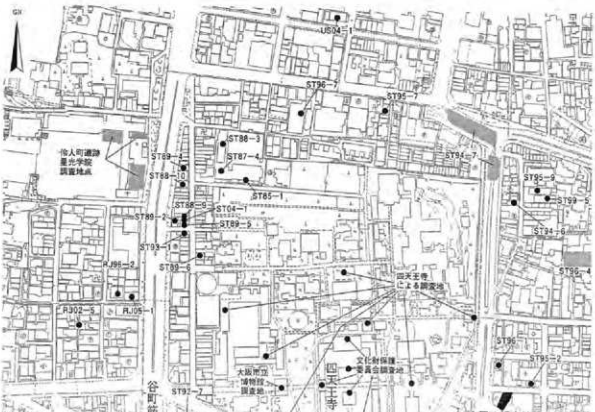


図１　四天王寺旧境内遺跡と周辺の調査地位置図

る(図１)。中世には「七千間在所」といわれ、都市として栄えたことを反映して、中世の遺構がどの地点でも発見されるが、遺跡北西部では奈良時代の遺構も検出されている。

調査地は四天王寺東門の南東でにあり、これまでの調査件数が少ない遺跡の東南部に当る。調査地は南東方向に開く谷状の地形の中で、南西に下る緩斜面に位置する。調査は敷地中央部にトレンチを設定して行った(図２)。掘削は現代の盛土層から第３層までを重機を用いて行い、それ以下については人力で行った。遺構・遺物が発見された場合は適宜写真・図面で記録を行いながら調査を進めた。

調査で使用した水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)で、「TP＋○m」と記した。本報告では磁北と座標北、２種類の指北記号を用いている。

〈調査の結果〉

１．層序(図３・４)

第０層：現代の盛土層で、層厚は約40cmである。上面の標高はTP＋10.6mである。

第１層：黒褐色礫混り中粒砂からなる現代の作土層である。層厚は約10cmである。

第２層：暗オリーブ褐色礫混りシルト～シルト質細粒砂からなる作土層である。層厚は約15cmで、時期が判明する遺物は出土しなかった。

第３層：暗灰黄色細粒～粗粒砂からなり、SX1内に堆積した地層である。層厚は最大で45cmである。年代は出土遺物からみて15世紀である。

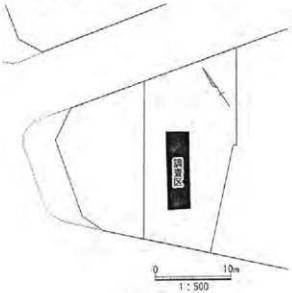


図２　調査区配置図

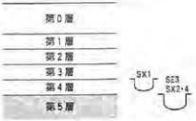


図３　地層と遺構の関係図

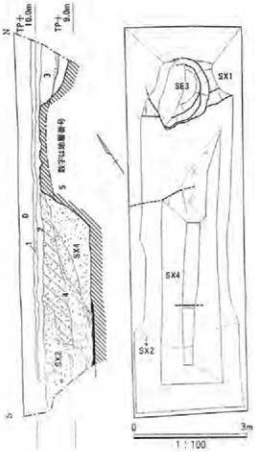


図４　検出遺構平面図・地層断面図

第4層：暗褐色細粒～粗粒砂やにぶい黄褐色粘土質細粒砂などからなり、SX4を埋積する盛土層である。層厚は約120cmである。年代は出土遺物からみて13世紀である。

第5層：にぶい黄褐色粗粒砂～大礫からなる地山層である。

2．遺構と遺物(図3～5)

地山の上面で、以下の遺構を検出した。いずれも中世の遺構である。

SX1　調査区の北端で検出され、東西に延びる溝である可能性が高い。北側の肩は調査区外で検出されなかったが、南北1.6m以上、深さ0.45mである。埋土は第3層の暗灰黄色細粒～粗粒砂で、周囲から土砂が流入して堆積したものとみられた。底部には、加工時に形成されたシルト質粘土の偽礫があった。埋土からは、土師器皿7・8・11、均整唐草文軒平瓦18、巴文軒丸瓦19、瓦質土器羽釜21・22、銅銭23(元祐通宝)が出土した。土師器皿や釜の形態・調整方法からみて15世紀のものとみられる。

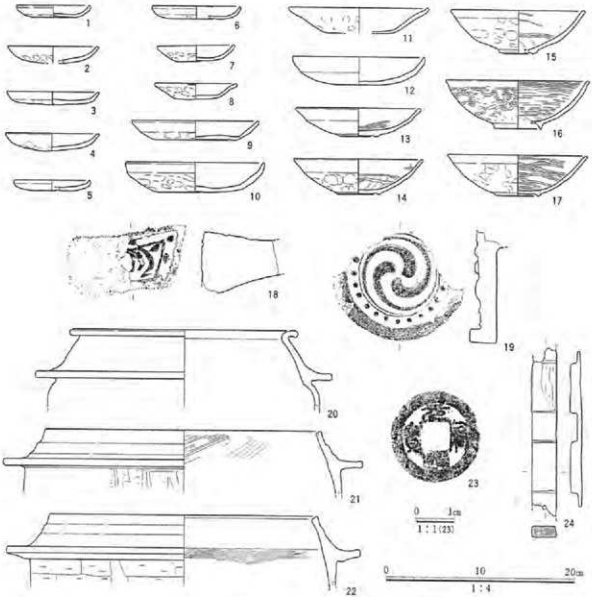


図5　出土遺物実測図

SX4(1～4・10・15～17・20・24)、SX2(5・6・12～14)、SX1(7・8・11・18・19・21～23)、9(撹乱)

SX2　SX4の埋土の上から掘り込まれた遺構である。埋土はにぶい黄褐色粗粒砂混り細粒砂で、人為的に埋め戻されていた。深さは約1.1mである。埋土からは、土師器皿5・6・12、瓦器椀13・14が出土した。外面に面取りをした5・6の形態や瓦器椀外面のミガキが省略されていることから13世紀のものと考えられるが、瓦器椀高台の退化や内面のミガキの省略が進んでいることから、13世紀でも新しく位置づけられるべきであろう。

SE3　SX1に切られる井戸である。平面形態は南北1.9m、東西1.6mのほぼ円形で、深さは1.3mである。地山に由来するオリーブ褐色中粒～粗粒砂などで埋め戻されていた。年代が判明する遺物は出土しなかった。

SX4　調査区の南半部で検出された。深さ1.2mで、北側肩部の掘込みや底部の整形は直線的である。このような特徴からみて、東西に延びる堀のような遺構の一部ではなかろうか。埋土は暗色の砂の偽礫からなり、人為的に埋め戻されたものであった。断面で、埋土の単位は南下りに観察されることから、北(高い方)から南(低い方)に向って埋立て作業が行われたものと判断された。底部の南側はさらに0.05mほど低くなり、その部分には機能時の堆積層とみられる黒色粘土が堆積していた。埋土からは、土師器皿1～4・10、瓦器椀15～17、土師器釜20、用途不明木製品24が出土した。瓦器椀外面のミガキが省略される段階のもので13世紀に属するが、SX2の出土品よりは古く位置づけられよう。

3．四天王寺東方の地形と所謂区画溝について(図6)

今回の調査に係わって、まず、調査地がある四天王寺中心伽藍の東側の地形について述べる。冒頭に述べたように、現状の地形は、四天王寺東門の南を谷頭とし、本調査地・興国高校付近を経由してJR寺田町駅方面へ開く谷である(図6)。図中の黒丸印は試掘調査で地山を検出し得なかった地点を示している。東門東南の黒丸はこの谷の範囲に一致し、現在の谷が埋没した古地形を反映していることを示している。A地点では現地表から(以下同)−1.7m、C地点では−2.8m、D地点では−3.0mまで掘削しても地山が検出されていない。特に伽藍東南辺のC・D地点付近では、現状でも比高3～4mの急斜面になっており、既に地表下に埋没した部分を考えると、比高6～7mの崖であったといえそうである。

市道東野田河堀口線が整備されたために地表面観察では気づかないが、図上で等高線を追跡すると、この谷の続きは東門以北の四天王寺東辺のすぐ東をほぼ真北方向に延びていることがわかる。ST94−6次調査で検出された西への深い落ち[大阪市文化財協会1996]、さらにST94−7次調査Ⅱ区で検出された東へ落ちるSD202[大阪市文化財協会ほか1998]は、それぞれこの谷の東の肩と西の肩を検出したものと考えられるのである。ST94−6次調査では−3m強の深度まで地山を追跡しているが、谷底には至っておらず、やはり急峻な谷を復元できる。

この一連の谷の年代は、A・D地点で中世の遺物が発見され、ST94−6次調査で到達した最下層の遺物が鎌倉時代であることから、近世等の比較的新しい時代のものではなく、古代にも遡る可能性がある。同時に、これが人工の地形ではない可能性をも示唆している。四天王寺東辺のこのような急峻な地形については、創建時の伽藍の範囲や、古代から中世末の間の寺域四至の変遷、中世末戦乱時の防御遺構などを考察する上で不可欠な要素である。

図6　四天王寺周辺の地形と「区画溝」

次に、中世末に四天王寺を取り囲んで掘られた溝について述べる。現四天王寺寺域の外側では、このような溝が少なからず発見されており、寺域を区画したもの、あるいは戦乱に伴う防御用のものではないかと考えられている。これらについては詳細に時期を整理した上で機能を決定しなければならないが、今回の調査に係わって注意すべきことをいくつか述べる。

まず、東門東側の急峻な谷は四天王寺の機構の中で何らかの明確な区画線であったことはほぼ確実であろう。これを東限とすると、測りようによっては400m強の正方形(東南隅を切り落とした形)の区画が復元可能である。また、谷の東でTP+14mの等高線が南に張り出す一画にも同様な区画溝が見られることにも注意を要する。ここでは、南北方向の溝に加えて、今回調査のSX1を含む東西方向の溝や堀がいくつか発見されており、地形に合わせながら複数の小区画が設けられていたようにも考えられる。現在、その機能を特定することは難しいが、中心伽藍に付属する何らかの施設が置かれていた可能性なども考えられよう。

〈まとめ〉

今回の調査で得られた成果は以下の通りである。

・13世紀と15世紀の遺構を検出した。前者については四天王寺東方ではあまり検出例がなく、類例の増加を待ちたい。後者は中世末の戦乱に係わる遺構と同時期のもので、これ自体もその一部である可能性がある。

・過去の発掘データと現在の地形の対照によって、四天王寺東方に埋没した谷を発見した。この谷は古代に遡る自然地形である可能性が高く、四天王寺創建から中世にかけて、その選地や寺域の変遷にについて規定的な要因となったことが考えられた。

本遺跡は、四天王寺周辺に栄えた都市や、寺域変遷の問題と深い関係をもつ遺跡である。それらの問題を解明するために、今後、特に中心伽藍の東南部、および中心伽藍と推定朱雀大路のラインの間での調査件数の増加が待たれる。

参考文献

大阪市文化財協会1996、『四天王寺旧境内遺跡発掘調査報告』I、pp.20－21

大阪市文化財協会・大阪市教育委員会1996、「岩崎邸建築に伴う発掘調査(ST94－6)」:『平成6年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.37－44

西壁層序
（東から）

検出遺構の全景
（南東から）

検出遺構の全景
（北から）

上本町遺跡発掘調査(UH07－1)報告書

・調 査 個 所　大阪市天王寺区上汐５丁目４－21
・調 査 面 積　約21㎡
・調 査 期 間　平成19年４月３日～４月６日
・調 査 主 体　財団法人　大阪市文化財協会
・調査担当者　文化財研究部次長　南秀雄、藤田幸夫

〈調査に至る経緯と経過〉

本調査地は四天王寺の北方に位置する(図１)。上町台地の脊梁部にほど近く、東に下る緩斜面に立地する。周辺で行われた調査では、南に隣接するUH04－２次調査で奈良時代の井戸が、東南のNW81－４次調査でやはり奈良時代の井戸が発見され、「米家」と記された陽書土器が出土している。南のUS04－１次調査では東西方向に延びる中世の溝が検出されている。

当地で建築工事が行われることになり、大阪市教育委員会が試掘調査を実施したところ、古代と推定される包含層が見つかったため、本調査を実施することとなった。

調査区は、敷地南側に南北3.0m、東西7.0mに設定した(図２)。調査の方法は、近世以降の盛土層を重機で掘削し、それ以下については人力で掘削し、遺構検出および記録作業を行った。

調査は４月３日から重機掘削を行い、４月６日には埋戻し作業、資材撤収作業を含むすべての作業を終了した。

なお、本報告で使用した方位は一部を除き磁北で、水準はT.P.値(東京湾平均海水面値)を使用し、本文・挿図ではTP+○mと記す。

図１　調査地位置図

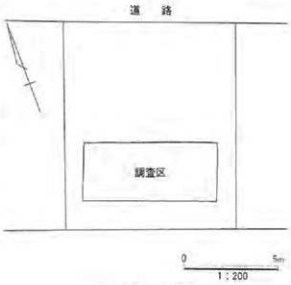


図２　調査区配置図

〈調査の結果〉

1．層序(図3・4)

第0層：近世以降の盛土層である。

第1層：オリーブ褐色シルトの盛土層で、層厚は最大約40cmである。層中には土師器・須恵器片を多く含むが、近世の瓦も出土する。この層の上面でSD11を検出し、基底面ではSK10を検出した。

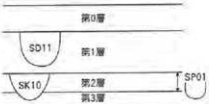


図3　地層と遺構の関係図

第2層：調査地北西部や南端中央の一部で検出した地層である。オリーブ褐色シルト層で、層厚は最大で約3cmである。層中から土師器・須恵器が出土し、須恵器杯蓋3からみて古代の包含層である。

第3層：黄橙色シルト層で地山である。

2．遺構と遺物(図5・6)

古代の遺構

SK09　後述するSD11に切られており全体は判明しないが、東西約2.9mの方形の土壙と推定される。埋土は第2層と同様のオリーブ褐色シルト層で、遺存する深さは約0.5mである。埋土中から土

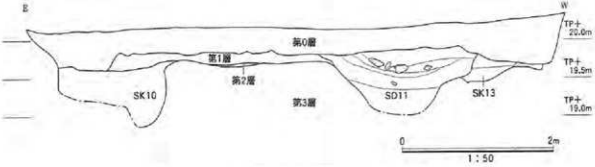


図4　南壁地層図

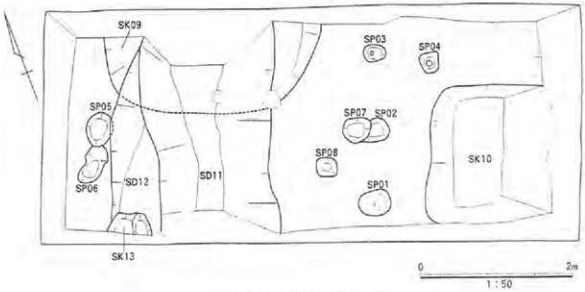


図5　検出遺構平面図

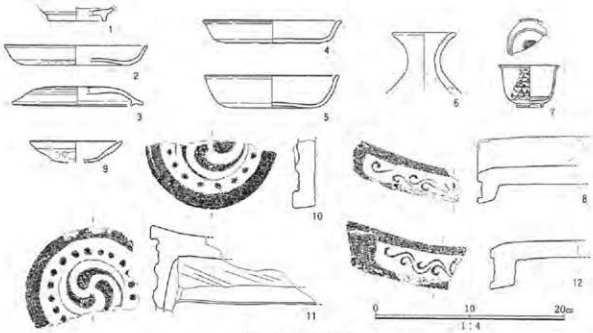


図6　出土遺物実測図

SP06(1)、SP01(2)、第2層(3)、SD11(4～8)、SK10(9～12)

師器・須恵器の細片が出土した。

小穴群　柱穴とみられるもの8基を検出した。それぞれ直径0.3m前後で、埋土は褐色～黄褐色シルトの偽礫からなり、人為的に埋め戻されていた。柱痕跡が判然としないものもあり、調査区内では明確な建物として復元されるものもなかった。SP01からは土師器皿2が出土した。2は復元口径14.8cm、器高2.1cmで、底部の調整はユビオサエである。SP06からは須恵器杯1が出土した。これらは奈良時代後半の時期を示すものである。これら8基の小穴は規模や埋土が類似しており、1・2の年代観から奈良時代後半のものと考えられる。

近世の遺構と遺物

SK10　調査区南東隅で検出した土壙で、南東部は未検出であるが、一辺約1.8mの方形を呈するものとみられる。深さは約0.8mで、埋土はオリーブ褐色の細粒砂質シルトである。肥前陶器、土師器皿9、軒丸瓦10・11、軒平瓦12などが出土した。10・11の巴文軒丸瓦は豊臣前期に属し、12は中心飾が宝珠の唐草文軒平瓦で、室町時代後期から豊臣前期の時期を示す。

SD11　調査区西側で検出した南北方向の溝である。最大幅は1.8m、深さは0.9mで、断面形はV字形を呈する。埋土は灰黄褐色細粒砂質シルトやオリーブ褐色シルト質粘土などからなり、人為的に埋め戻されていた。土師器杯4・5、肥前陶器瓶6、青花小杯7、軒平瓦8が出土した。4・5の調整は、外面をナデ、底部をユビオサエし、内面はナデで仕上げている。奈良時代のものである。7は外面に文様を施し、見込にも文様を描く。8は中心飾が三葉の唐草文である。7・8などの遺物からこの溝の時期は17世紀代(豊臣～徳川期)と考えられる。

SD12　SD11の西側に存在する溝で、SD11に切られる。残存部分の幅は約0.7mである。埋土はSD11と近似しており、おそらく同様の時期のものであろう。

SK13　SD12を切る土壙である。埋土は褐～にぶい黄褐色シルトで、時期が判明する遺物は出土しなかった。

〈まとめ〉

本調査では古代の包含層・遺構と豊臣期の遺構が確認された。調査地が狭小であったため、検出したそれぞれの遺構の性格については明らかにならなかったが、特に、奈良時代の遺構・遺物を発見することができたことは大きな成果である。四天王寺北方の上汐町一帯は、奈良時代には後期難波宮の京域にあたる地域である。冒頭にあげた調査地周辺の調査のほかにも、200～300m北側でUS04－1・06－1次調査が行われ、やはり奈良時代の遺構・遺物が発見されている。これら近年の調査成果は難波京の有無、あるいはその具体相を物語るものであり、本調査の成果もまたそのひとつである。現在、難波京の時代をはじめとした当地の地域史を再構築するには、まだ材料が不足であるが、将来、調査成果の蓄積によってこの作業は可能となるであろう。

第３層上面での
遺構検出状況
（北から）

SK10
（東から）

SD11
（北から）

・調査個所　大阪市天王寺区六万体町305－15・16・28
・調査面積　44㎡
・調査期間　平成19年10月9日～15日
・調査主体　財団法人　大阪市文化財協会
・調査担当者　文化財研究部次長　南秀雄、櫻井久之

〈調査に至る経緯と経過〉

今回の調査地は上本町遺跡の南部に位置し、100m南はこの遺跡に南接する四天王寺旧境内遺跡となる(図1)。周辺での調査を見ると、まずこの調査地南側の敷地がUS06－2次[大阪市文化財協会2006]として発掘されている。ここでは平安時代に遡る可能性のある土壙や室町時代のピット・溝が確認され、特に、近世以降の地割方向と異なる正方位に乗る南北方向の溝の存在が注目された。正方位を採る室町時代後半の溝は、これまで四天王寺旧境内遺跡の北東部で行われた複数の調査で検出されているほか、上本町遺跡内においても、今回調査地の東北東150mにあるUS04－1次[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2005]で東西方向の溝が確認されている。また、南100mにある大江小学校内では数次の調査が実施されており、そのうちST88－3次では中世末と報告される南北溝が検出されている[大阪市文化財協会1988]。

当地で建物建設が計画され、それに伴って大阪市教育委員会による試掘調査が行われた。その結果、

図1　調査地位置図

図2　調査区位置図

表1　地層と遺構の関係

層名	遺構	遺物	年代
第0層			20～21C
第1a層	↓SP118　SP101・102・105～108・110～112、115～117、SK103・104	寛永通宝 軟質施釉陶器 面型	18～19C
第1b層	SP109・113・114・116 ↓SK119		
第2層	↓SP201～203・205、落込み204	寛永通宝	17C
第3層		輸入青磁・瀬戸焼 瀬戸美濃焼・常滑焼	15～16C
第4層	SD301・302、SK304～306・310・311、SP303・309		(地山)

↓：下面遺構　←：上面遺構

地表下約1.0～1.3mに中世の遺物包含層、それ以下に地山層があり、遺構の存在も確認された。これを受けて10月9日より本調査に着手することになった。

谷町筋に西面する敷地は東西方向に細長く、東端で南に折れ曲っている(図2)。市教委の指示どおり、敷地の東寄りに東西11m、南北4mの調査区を設定し、着手した初日に現代の攪乱および近世までの地層を機械掘削した。翌日より遺構の検出作業に入り、近世に属す多数のピット・土壙に加えて、US06－2次に確認された南北溝の延長部分を捉えることができた。その後、遺構掘削、記録作成を進め、10月15日に埋戻しと調査機材類の撤収作業を行い、現場におけるすべての作業を終了した。

調査で使用した水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)で、本文・挿図中では「TP＋○m」と記した。また、本報告では磁北と座標北、2種類の指北記号を用いている。図2・5の座標値は、US06－2次の報告時に用いた大阪市道路現況平面図からの旧公共座標値である。

〈調査の結果〉

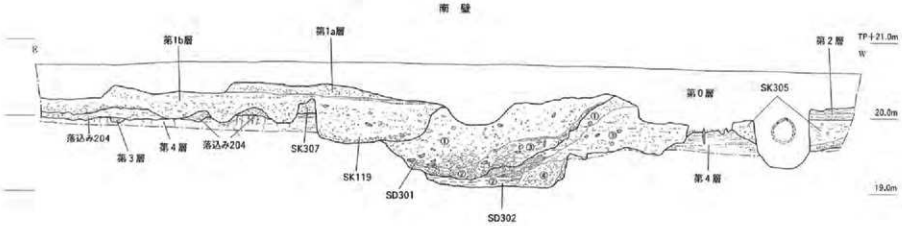
1．層序(表1・図3)

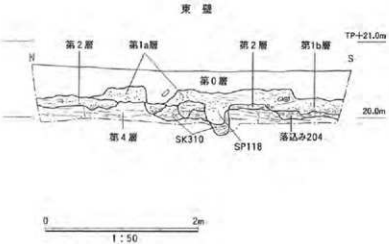
調査地の地表面の標高はTP+20.7mで、第0層の近現代の盛土下に近世の地層である第1層と第2層がある。前者は整地層、後者は作土である。中世の地層は遺構の埋土として残り、これを第3層とした。その直下の第4層が地山層となる。

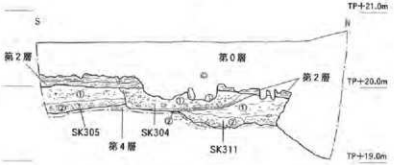
第0層：近現代の盛土層で、層厚は30～50cmである。

第1層：灰黄～暗灰黄色極粗粒砂混りシルト(第1a層)、黄灰～暗灰黄色粘土質シルト(第1b層)に分かれ、いずれも近世の整地層である。第1a層は中礫大の炭を多数含み、層厚20cm前後である。本層下面の遺構にはSP118などがある。第1b層は小礫大の地山層偽礫を多く含み、層厚20～30cmある。上面にSP109・113・114・116、下面にSK119がある。そのほかにも埋土から第1層に関係する遺構(SP101・SK103など)があるが、所属する遺構面は明らかでない。これらの遺構や層内には18～19世紀の軟質施釉陶器柴燗・鳩笛、土人形の面型等が見られる。

第2層：灰黄褐色粘土質シルトの作土層で層厚が10～20cmある。調査区東部では、本層の下面に





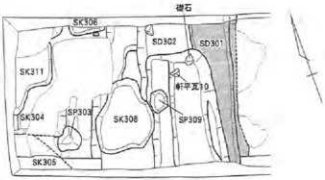


SK304
①：灰オリーブ色(5Y5/3)シルト(地山層塊多く含む)
②：黄橙色(2.5Y6/3)シルト(地山層塊多く含む)

SK305
①：灰オリーブ色(5Y5/3)粘土質シルト
②：灰オリーブ色(5Y5/3)シルト(地山層塊多く含む)

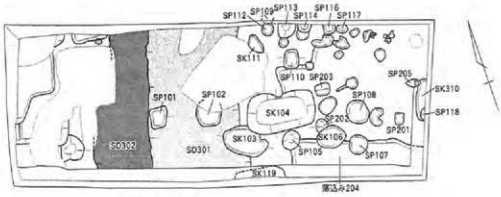
SK311
①：暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土質シルト
②：灰黄色(2.5Y6/2)シルト(地山層塊が主体となる)

図3　調査区断面実測図



SD302完掘時

SD301完掘時



SD301・302検出時

0 5m

1：100

図4　調査区平面実測図

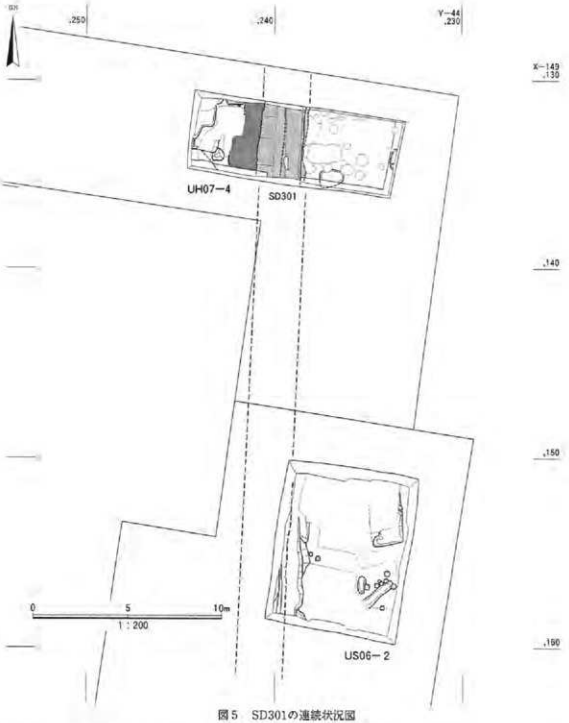


図5　SD301の連続状況図

耕作具痕の凹凸やピット(SP201～203・205)、落込み204がある。西部では地層の下半部が砂質となる部分がある。図3にある南壁断面図でも明らかなように、下層の溝SD301・302の埋土トップの水準値の方がその東西両側に分布する第2層の上端よりも高い。調査範囲内では、溝の埋土上に第2層が拡がることもなく、かつての溝の位置が埋没後もなんらかの意味をもっていたことを示す。本層からは寛永通宝18が出土している。

第3層：溝SD301・302、土壙SK304・305といった中世の遺構埋土として見られる。灰オリーブ色や明黄褐色の粘土質シルトの岩相をもつものが多い。古代の須恵器・土師器も若干含まれるが、多

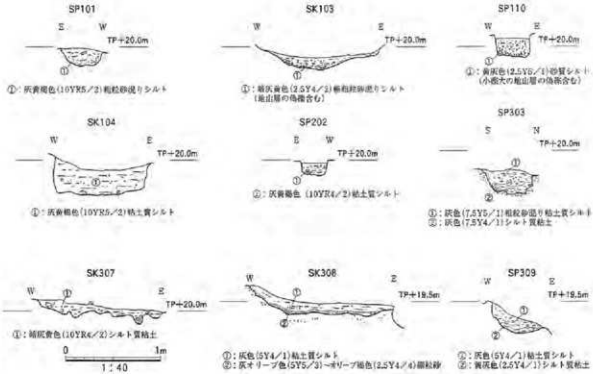


図6　遺構断面実測図

くは13～16世紀の陶器・瓦・瓦質土器である。

第4層：地山層となる中位段丘構成層で、調査区東壁付近が最も高くTP+20.2mで上面が現れ、乾痕も顕著に見られる。上面から30cm下までは明黄褐色粘土質シルト、それ以下、観察しえた90cm下までは灰白色シルト混り細粒砂であった。

2．遺構と遺物(図4～8)

近世の遺物包含層である第1～第2層を機械掘削し、第4層に当る地山層の直上にて各時代の遺構を検出した。以下、中世と近世とに分けて報告する。古代の須恵器・土師器・緑釉陶器が中・近世の遺物に混って出土していることから、かつては当該時期の遺構も存在したものと考えられる。

a．中世

溝

SD301　ほぼ正南北方向に掘られた室町時代末頃の大溝である。幅3.6m、深さ1.1mある。埋土は3層に大別される。①は廃絶時の埋戻しによる暗灰黄色粗粒～極粗粒砂混り粘土質シルト層で、中礫サイズの偽礫を多数含む。②は機能時に堆積した灰色粘土混り細粒～粗粒砂層である。③は西斜面部にある盛土で、SD302の若干東側にSD301を造った時のものである。地山層起源の明黄褐色粘土質シルトとSD302埋土からの暗灰黄色シルト質粘土が偽礫になっている。南壁断面で見ると、西側斜面のやほどにテラス状の部分を穀けていて、その上面付近の偽礫が横長に潰れているのがわかる。この③層の前面に長さ75cm、幅25cm、高さ29cmある花崗岩の自然石が溝の下端に沿って配されていた。図7・8に示す出土遺物のうち11の軒平瓦は②層からのもので、その他は①層である。

7は瓦質土器羽釜で、SD302から出土した6と同様に口縁部は直立するが、たちあがりが高く、鍔の

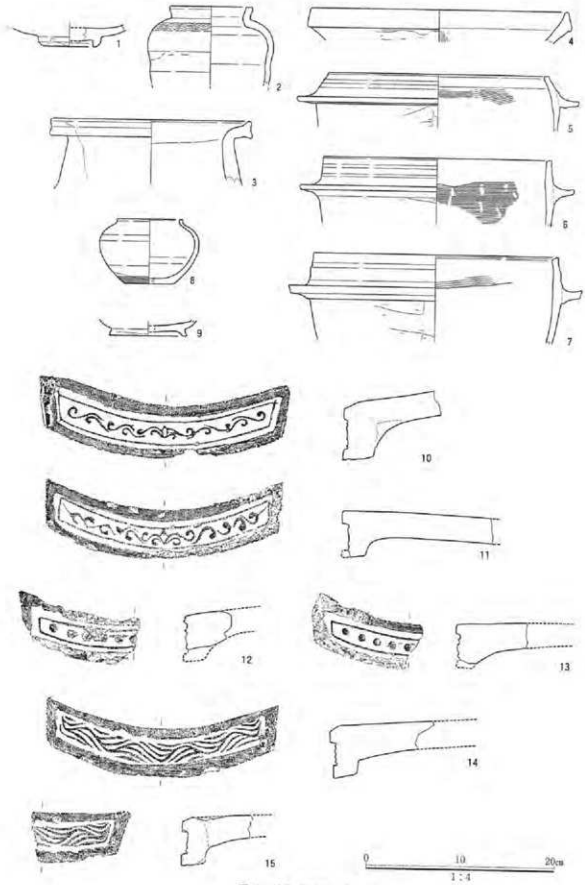


図7　遺物実測図(1)

SD302(1～6・10)、SD301(7・8・11～15)、SK202(9)

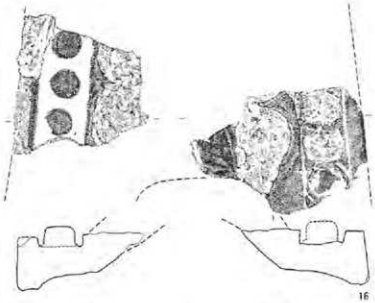


図8　遺物実測図(2)

SD301(16)、SP108(17)、第2層(18)、第1層(19)

先端がツマミ上げられている。8は瀬戸美濃焼鉄釉茶入で、底部が鉄化粧されている。[瀬戸市埋蔵文化財センター2001]によれば美濃大窯Ⅱ期(1560～75年)に編年される。11は均整唐草文軒平瓦で、ダイヤ形をした中心飾りと短いストロークで反転する唐草に特徴がある。管見では『四天王寺古瓦聚成』などに同笵瓦は見られないが、US06－2次SD01に同笵らしいものがある。凸面側の顎裾部に凹型台の圧痕が認められ、13～14世紀のものとみられる。また、顎後縁から内側6.5cmの位置に、朱塗り建物に葺かれていたことを示す赤色顔料が筋状に付着している。12・13はともに13世紀代の連珠文軒平瓦である。左から4～5つ目の珠文にある笵傷が共通することから、同笵瓦の可能性がある。14・15は波状文軒平瓦である。どちらも瓦当上縁を面取りする。同文の流行する14世紀後葉～15世紀前葉のものであろう。16は外周に珠文を巡らせた鬼瓦である。牽引方式によって棟に固定するため、裏面には刳り込みが作られている。その刳り込み方法は周縁を堤状に残して裏面全体を浅く刳るもので、[山本忠尚1998]の刳形Ⅰに当る。また、鬼面部分は剥離して残っていないが、中空に作られていたことがわかる。こうした特徴から14世紀中葉のものと思われる。

SD302　上位にSD301があるため機能時の規模は正確にはわからないが、断面形状よりSD301とほ

ぼ同規模の大溝と推測される。埋土は大きく4つに別れる。①は埋戻し土または西屑部からの流入土とみられる暗灰黄色シルト質粘土層である。②は機能時に堆積した灰色粘土層と灰色粗粒～極粗粒砂層の互層である。③・④は西屑から斜面部を形成する盛土で、地山層を西側に広く掘削した直後に埋戻されている。SK308はこの時に形成された窟みの1つである。掘削途中で規模が縮小されたものと推測する。③層は灰オリーブ色粗粒～極粗粒砂混り粘土質シルト層で、③層下方の1段掘り窪められた部分に④層があり、地山層起源のオリーブ灰色細粒砂層で埋戻されている。図7に示す出土遺物のうち、3は③層、10は②層、その他は①層から出土した。②層中には花崗岩の自然石を利用した礎石があり、平坦面の中央部に17cm四方の焼け焦げた柱痕跡がある。

出土遺物を見ると、1は中国製青磁碗の底部で、高台内面の途中まで釉が掛かる。ケズリ出し高台の形態から14～15世紀のものである[上田秀夫1982]。2は小型の備前焼壺で、肩部に櫛描波状文が巡る。小型品でありながら粘土紐巻上げによって成形されており、間壁編年のⅣ期[間壁1991]に当る15世紀代のものであろう。3は常滑焼壺の口縁部で、直立ぎみの頸部に続いて大きく折り返された幅の広い縁帯が巡る。13～14世紀のものである。4～6は瓦質土器で、4は擂鉢、5・6は羽釜である。4・5は14～15世紀に属すが、6は5に比べかなり直立する口縁部となっており、16世紀に降る。10は均整唐草文軒平瓦である。杏仁形の中心飾りの左右に展開する唐草文は厳密な左右対称形ではない。瓦当部と平瓦部を分けて作ったのち、両者を接合している。『四天王寺古瓦聚成』などに同笵瓦は見られないが、凸面の一部に凹型台の圧痕があり、13～14世紀代以降のものであろう[山崎信二2000]。

これら以外に、綾杉状の押印のある常滑焼甕、瀬戸焼灰釉卸皿、瓦質土器甕があり、いずれも14～15世紀のものである。また、円盤形に加工された備前焼片(直径3.5cm)も1点出土した。同様に円盤形にされた瓦片がUS06－2次でも5点見つかっている。[斎藤剛2003]にこの種の遺物の用途が検討されているが、明確な答えは出されていない。今後も類例に注意したい。

土壙・小穴

SK304～308・310・311　長軸が1.1～1.3mの小型の土壙SK306・307・310とその他の大型の土壙に区別できる。前者は一部に0.3mの深さをもつところもあるが、平均0.1mほどである。後者のうちSK304・305・311は調査区西壁際に集まっていて、304が他の2基の肩を掘込んでいる。いずれも深さは0.3～0.4mである。SK308は先述したようにSD302掘削過程でできた窟みで、計画変更とともに埋められている。埋土は固く締まっていた。

SP303・309　調査区西寄りにある小穴で、ともに規模は直径約0.6m、深さ約0.3mである。SP303の北西部はSK304に掘込まれている。SP309はSD302の③層の上に掘形が確認されている。

b．近世

第2層下面遺構

SP201～203・205　調査区の東寄りにあり、作土層である第2層の下面に存在する小穴である。SP205を除いて、直径または一辺が0.3m前後の円形ないし隅丸方形で、深さは0.2mほどである。SP205は東西0.4m、南北0.2mの菱形で、深さは0.2mある。平瓦片が3重に重なって埋められていた。また、SP202からは図7－9の緑釉陶器碗の底部が出土した。素地が暗灰色を呈しており、付高

台、全面施釉という特徴から猿投窯系の９世紀末頃の製品であろう[古代の土器研究会2003]。

落込み204　調査区の南東部にある帯状に掘り窪められた部分で、さらに調査区外にも続く。底は凹凸が著しく、底付近の埋土には地山層の偽礫が多い。

第１層関連の遺構

SK103・104・119　SK119は第1b層下面遺構に属すが、第２層上位で第０層基底面の土壙である他の２基の正確な畑属は明らかでない。しかし、SK104の埋土はSK119に類似し、平面・断面の形状も近い。

SP101・102・105～118　これらの小穴についてはSP109・113・114・116が第1b層上面、SP118が第1a層下面の遺構と確認されたが、その他に関しては第２層上位で第０層基底面であるため正確な層準は不明である。

第１層に関連する遺構はSD301・302埋土上には少なく、その東側に集まる傾向がある。1886年に内務省地理局測量課の作製した『大阪実測図』には、これらの溝の位置に南北方向の道路が確認できる。溝埋土上に遺構が少ない理由として、この部分が道路として利用されていたためと推測することができる。

SP108からは、17の寛永通宝が１枚出土した。「寶」字下の貝の最後の３画が「ス」状になっており、1636(寛永13)年初鋳のいわゆる古寛永に当る[櫻木晋一2007]。裏面の外周や方孔の周縁部に幅広の縁取りがある。直径2.40cmある。

c．包含層出土の遺物

第２層からは寛永通宝18、第１層からは寛永通宝19、土製玩具の面型20(図版参照)などが出土している。18は元禄10(1697)年初鋳の新寛永に分類され、裏面の外周や方孔縁に縁取りがある。直径2.40cmである。一方、19の「寶」字は古寛永のようであるが、全体に文字が不鮮明で、裏面が真平らである。また、直径2.35cmと小振りである。20の面型は直径6.4cmの半球形をしている。大きい丸鼻、そして額に兜巾があることから山伏の頭部であろう。眼球や太い眉毛などが細かく表現されている。内面全体にキラが付着する。

〈まとめ〉

今回の調査では、敬地南にあるUS06－２次調査で検出された中世末の南北溝の延長部を確認することができた。先の調査では溝が調査区西壁際にあったことや後世の攪乱により、遺構の規模が正確につかめていなかったが、今回の調査では溝の幅・深さに加えて構造の一端を知ることができた。これによりこの遺構が四天王寺北東一帯に確認されている正方位方向を意識した大溝あるいは堀と認識されているものとの関連が考えられよう。

こうした溝・堀は中世四天王寺の門前町の区画施設と考えられており[豆谷浩之1996]、そうすると、確認されたこうした遺構の中ではもっとも北西部に位置するこの場所まで門前町が拡がっていたことになる。また、SD301の埋戻し時期が16世紀後葉とみられることから、織田信長が1570年代に築いた天王寺城との係りも視野に入れる必要もあろう。天王寺城の場所に関しては、星光学院周辺に

ある「北ノ丸」・「中ノ丸」・「南ノ丸」という字名や『陰徳太平記』にある「天王寺ニ出城ヲ搆ヘシトテ、(中略)勝鬘ノ塔ノ城ヲ築キ、軍兵多ク入置」にあるという記載[東京大学史料編纂所1934]が参考となる(註1)。勝鬘院は今回の調査区の南西100mにあり、この地に築城されていたならば、なんらかの影響を被っていた可能性はある。SD301が埋戻された原因の一候補となろう。

SD301・302からは鬼瓦を含む鎌倉～室町時代の多数の瓦類が出土しており、付近に瓦葺の堂宇が存在した可能性がある。四天王寺の旧境内の状況をうかがう上でも、上本町遺跡南部は注目される。

註)

(1)天王寺城の場所に関しては、勝鬘院の北250mにある月江寺が城跡とする記事が『摂津名所図会』にある。いずれにしても、天王寺城跡は本調査地の西隣付近に推定される。

参考文献

上田秀夫1982、「14～16世紀の青磁碗の分類について」:日本貿易陶磁研究会編『貿易陶磁研究』NO.2、pp.55－70

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2005、「上本町南遺跡発掘調査(US04－1)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2002・03・04)』、pp.191－201

大阪市文化財協会1988、「大阪市立大江小学校々舎建替に伴う四天王寺旧境内遺跡発掘調査(ST88－3)略報

大阪市文化財協会2006、「株式会社鶯谷商店による建設工事に伴う上本町南遺跡発掘調査(US06－2)報告書」

古代の土器研究会2003、『古代の土器研究—平安時代の緑釉陶器・生産地の様相を中心に—』

斎藤剛2003、「加工円盤をめぐる諸見解について」:徳島県埋蔵文化財センター編『徳島城下町遺跡　出来島本町1丁目地点』、pp.133－136

櫻木晋一2007、「出土銭貨研究の成果と展望」:『近世・近現代考古学入門』、pp.101－118、慶應義塾大学出版会

四天王寺文化財管理室1986、『四天王寺古瓦聚成』

瀬戸市埋蔵文化財センター2001、『瞰国・織豊期の陶磁器流通と瀬戸・美濃大窯製品』

東京大学史料編纂所1934、『大日本史料』第十編之四、p.876

間壁忠彦1991、『備前焼』、ニューサイエンス社

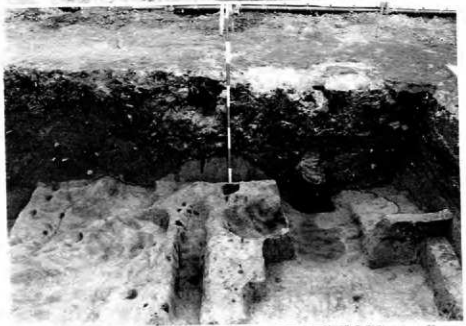
豆谷浩之1996、「四天王寺の寺域と「境内」について」:大阪市文化財協会編『四天王寺旧境内遺跡発掘調査報告』I、pp.120－130

山崎信二2000、『中世瓦の研究』奈良国立文化財研究所学報第59冊

山本忠尚1998、『鬼瓦』日本の美術No.391、至文堂

調査区東壁断面
南半部

調査区南壁断面
西端部



調査区西壁断面

調査区全景
（西から）

SD301・302断面
（北から）

第１層出土　土製玩具　面型
（右は型起ししたもの）

・調査個所　大阪市天王寺区上之宮町26－23
・調査面積　32㎡
・調査期間　平成20年3月10日～3月14日
・調査主体　財団法人　大阪市文化財協会
・調査担当者　文化財研究部次長　南秀雄、池田研

〈調査に至る経緯と経過〉

上本町遺跡は市内を南北に延びる上町台地上に位置し、東方には細工谷遺跡や堂ヶ芝廃寺、南方には四天王寺旧境内遺跡などが近接している。近隣における既往の調査では、西方約350mで奈良～平安時代初めにかけての掘立柱建物群や井戸が見つかったUS06－1次調査[大阪市文化財協会2006]をはじめ、UH07－1・2次調査[大阪市文化財協会2007a・b]、NW81－4次調査[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1983]、US04－2次調査[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2005a]など、多くの地点で難波京の時代に関連する遺構の存在が確認されている(図1)。また、US04－1次調査では溝など中世の遺構も確認されている[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2005b]。

今回の調査地では建築工事に先立ち、大阪市教育委員会が試掘調査を実施したところ、現地表下約40～100cmで古代の遺物包含層や遺構の埋土とみられる地層が確認されたことから、本調査を行うこととなった。

敷地内に設定した調査区は東西8m、南北4mであるが、東西で2分割し、一方を排土置き場とし

図1　調査地位置図

図2　調査区配置図

て利用しながら調査を行った(図２)。３月10日には調査区西半で重機掘削を開始し、近世の整地層以上を除去した後、それ以下を人力で掘削した。近世以降の耕作溝や土壙を検出し、３月14日には調査を終了した。

なお、本調査で使用した水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)で、以下ではTP+○mと記した。指北記号は図１が座標北、図２・５が磁北を示す。

〈調査の結果〉

１．層序(図３・４)

第０層：暗灰黄色(2.5Y4／2)わずかに礫質砂質シルトを主体とする現代盛土層である。

第１層：暗オリーブ褐色(2.5Y3／3)極細粒～極粗粒砂質シルトを主体とする整地層で、焼土・炭化物を含む。上面ではSK02を検出した。

第２層：オリーブ褐色(2.5Y4／4)極細粒～極粗粒砂質シルトからなる作土層である。炭化物を含む。下面では耕作溝群を検出した。

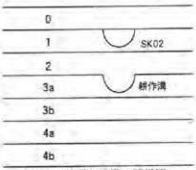


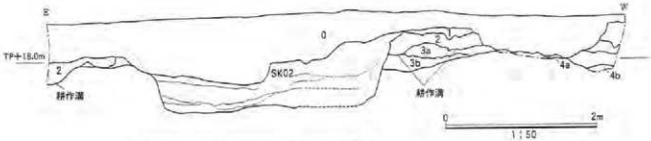
図３　地層と遺構の関係図

第3a層：にぶい黄褐色(10YR5／4)極細粒～極粗粒砂質シルトからなり、炭化物を少量含む。土師器、須恵器、肥前陶器、肥前磁器染付などが出土しており、近世の作土層とみられる。

第3b層：黄褐色(2.5Y5／4)極細粒～中粒砂質シルトからなり、炭化物を少量含む。土師器、須恵器が出土しており、近世以前の作土層とみられる。

第4a層：褐色(10YR4／4)泥質極細粒～極粗粒砂からなる。分布は局部的で、地山の風化層とみられる。

第4b層：浅黄色(5Y7／3)極細粒～極粗粒砂からなる地山である。



0 :暗灰黄色(2.5Y4／2)わずかに礫質砂質シルト(現代盛土層)
1 :暗オリーブ褐色(2.5Y3／3)極細粒～極粗粒砂質シルト(焼土・炭化物を含む。整地層)
2 :オリーブ褐色(2.5Y4／4)極細粒～極粗粒砂質シルト(炭化物を含む。作土層)
3a:にぶい黄褐色(10YR5／4)極細粒～極粗粒砂質シルト(炭化物を少量含む。作土層か)
3b:黄褐色(2.5Y5／4)極細粒～中粒砂質シルト(炭化物を少量含む。作土層か)
4a:褐色(10YR4／4)泥質極細粒～極粗粒砂(地山の風化層か)
4b:浅黄色(5Y7／3)極細粒～極粗粒砂(地山)

図４　南壁地層断面図

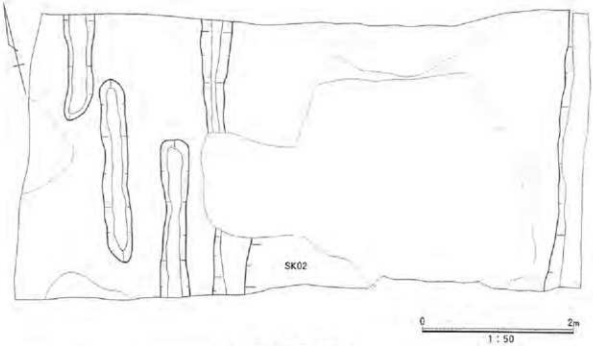


図5　遺構平面図

2．遺構と遺物(図3・5・6)

a．第2層下面

耕作溝　第2層の下面では南北方向の5条の溝を検出した。幅は0.3～0.4mで、深さは残りの良いもので0.2m前後ある。埋土からは土師器、須恵器、瓦器、肥前陶器、肥前磁器染付、平瓦などが出土しており、近世の耕作溝群とみられる。

b．第1層上面

第1層上面では土壙SK02を検出した。大部分が攪乱を受けており本来の形状は不明であるが、南壁断面では幅が3.5m程度ある。埋土は人為的な埋戻し土で、4層に細分される。上層は褐色(10YR 4／4)細粒砂質粘土からなる。中層は貝ボタン製造のための材料みられるアワビ類などからなる貝層である。下層はにぶい黄褐色(10YR5／4)細粒砂質粘土、最下層は灰黄色(2.5Y6／2)極細粒～細粒砂からなる。

埋土からは土師器、須恵器、瓦器、丹波焼、肥前・瀬戸美濃磁器、産地不明磁器、連珠巴文軒丸瓦、平瓦などが出土した。1は瓦器椀である。2はSK02から出土した産地不明の磁器染付鉢である。銅版

写真1　SK02出土貝類
1：アワビ類、2：サラサバテイ、3・4：ボタンの母材を打抜いたとみられる資料

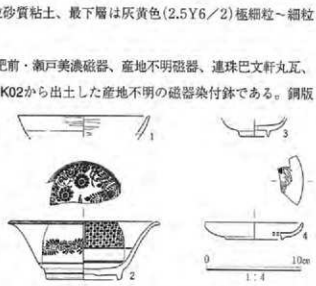


図6　SK02出土遺物実測図

転写技法が用いられており、明治期の資料である。3は瀬戸美濃磁器染付碗である。4は産地不明の青磁小杯で、内面には上絵付けが施されている。

また、埋土中層からは大量の貝類が出土した。コンテナ1箱分のサンプルを採取したが、アワビ類を主体とし、沖縄以南に棲息するサラサバテイとみられるニシキウズガイ科7個体やヤマトシジミ1個体などが含まれていた。こうした貝種構成はハマグリやヤマトシジミを主体とする19世紀代の当地域における一般的な貝種構成からはかけ離れている。アワビ類やサラサバテイは真珠層をもち、貝ボタンなどの材料として用いられたことが知られており、また出土資料の中には、貝ボタンの母材を打抜いた後の廃材とみられるものが含まれていた(写真1)。これらの貝類は食料残滓ではなく明治期の貝細工に関するものである可能性が高い。

〈まとめ〉

今回の調査では、近世の作土層とそれに伴う耕作溝群を検出した。土師器、須恵器、瓦器片なども出土しているが、既往の調査で確認されている古代から中世にかけての遺構や包含層は検出されず、後世の耕作などによって削平された可能性がある。

一方、近世の整地層の上面で検出した土壙からは、貝細工の材料とみられる大量の貝類が出土しており、貝ボタンや歯ブラシをはじめとする近代大阪における手工業の展開を知る上で、貴重な資料であるといえよう。

引用・参考文献

大阪市文化財協会2006、『昭和住宅株式会社による建設工事に伴う上本町南遺跡発掘調査(US06－1)報告書』

2007a、『上本町遺跡発掘調査(UH07－1)報告書』

2007b、『カナセ興産株式会社による建設工事に伴う上本町遺跡発掘調査(UH07－2)報告書』

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1983、『難波宮跡(NW81－4次)発掘調査概報』;『昭和56年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.57－62

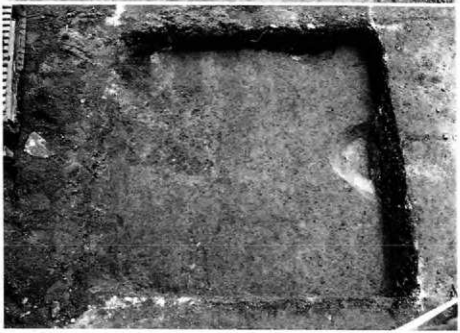
2005a、「上本町南遺跡(US04－2次)発掘調査報告書」;『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2002・03・04)』、pp.203－210

2005b、「上本町南遺跡(US04－1次)発掘調査報告書」;『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2002・03・04)』、pp.191－201

南壁地層断面
（調査区西半　北から）

地山上面と南壁地層断面
のSK02貝層
（調査区東半　北から）

耕作溝群・SK02検出状況
（調査区西半　北から）



V 東 淀 川 区

摂津国分尼寺跡発掘調査(KN07－２)報告書

・調査個所　大阪市東淀川区柴島２丁目369－３・369－９
　　(住居表示：柴島２丁目10番)
・調査面積　10㎡
・調査期間　平成19年12月５日～12月７日
・調査主体　財団法人　大阪市文化財協会
・調査担当者　文化財研究部次長　南秀雄、趙哲済

〈調査の経緯と経過〉

調査地は淀川デルタに位置し、古代の寺院跡の存在が推定されている摂津国分尼寺跡の中央部やや南西側に当る(図１)。北には中世の城館跡である柴島城跡伝承地、南には中世の寺院跡である薬師堂廃寺がある。調査地周辺では、８件の試掘調査と１件の本調査が行われおり、中世～近世の遺構・遺物が発見されている。特にKN00－２調査地から出土した瓦や五輪塔台座とみられる石製品を含む鎌倉時代後半～室町時代の遺物は、摂津国分尼寺との係わりも含めて、近隣に中世寺院があった可能性を示すものとして注目されている[大阪市文化財協会2002]。

図１　調査地位置図

当該地で大阪市教育委員会が行った試掘調査では、地表下1.1mで中世の遺物包含層が検出された。そこで、遺物包含層や遺構の分布状況を明らかにして、当該地域の歴史的変遷を復元する基礎資料を得ることを目的に、本調査を実施した。

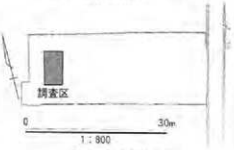


図２　調査区位置図

調査区は開発敷地の西奥に設定した(図２)。当初、地表下1.1mまで重機掘削する予定であったが、0.5～0.6mの深さで遺物を含む土壌があることがわかったので、重機掘削は0.6mまでにとどめ、それより下位は人力で掘下げて調査を行った。遺構検出作業は３面で行い、その都度、写真撮影と実測などの記録作業を実施した。

本報告で用いた示北記号は図１が座標北、それ以外の図が磁北であり、標高はT.P.値(東京湾平均)

海面高)を用い、TP+○mと表記した。

〈調査の結果〉

1．層序

調査地の標高はTP+2.9m前後であり、地表下約2mまでの地層を6層に区分して調査を行った(図3・4)。

第0層は現代の攪乱・盛土層であり、層厚は50～60cmであった。

第1層は黒褐色わずかに礫質砂質シルトからなる作土層で、層厚は10～15cmであった。上面で近代の関西系陶器を含むSK01を検出した。

第2層は層厚40～50cmの人為層で、上部40cm前後は暗褐色砂質シルトからなる盛土層や近世末の遺物を含むSK02・05の埋土層(第2a層)であった。上面でSD03・04を検出した。また、部分的に下部15cm前後は灰黄褐色シルト質中粒～細粒砂層(第2b層)であった。

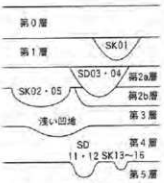


図3　地層と遺構の関係図

第3層はにぶい黄褐色シルト質中粒～細粒砂からなる盛土層で、最大層厚は43cmであった。下半部に灰色シルトの偽礫を多く含み、上半部で比較的分級が良く、やや擾乱された盛土層であった。

第4層は灰黄褐色わずかに礫質細粒砂質シルトからなる作土層で、層厚は15～25cmであった。上面で浅い凹地、下面で溝と小土壙を検出した。須恵器、土師器、瓦器などの中世の遺物を包含していた。

第5層は上方細粒化する淀川デルタの堆積層で、TP+1.0～1.3m付近では中～細礫からなるトラフ型斜交葉理が発達した。斜交葉理からみた古流向はTP+1.0m付近で北西から南東へであったが、TP+1.3m付近では現淀川の流下方向と一致する北東から南西へであった。

2．遺構と遺構

a．中世の遺構(図5左・中)

作土層である第4層の上面には、北北東－南南西方向で比高数cmの浅い窪みがあった。第4層の下

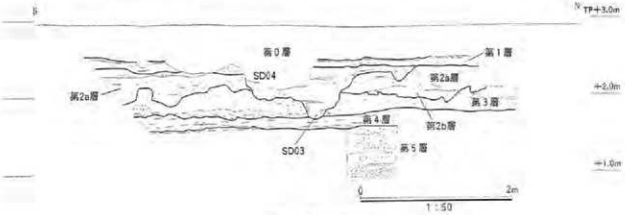


図4　西壁地層断面図

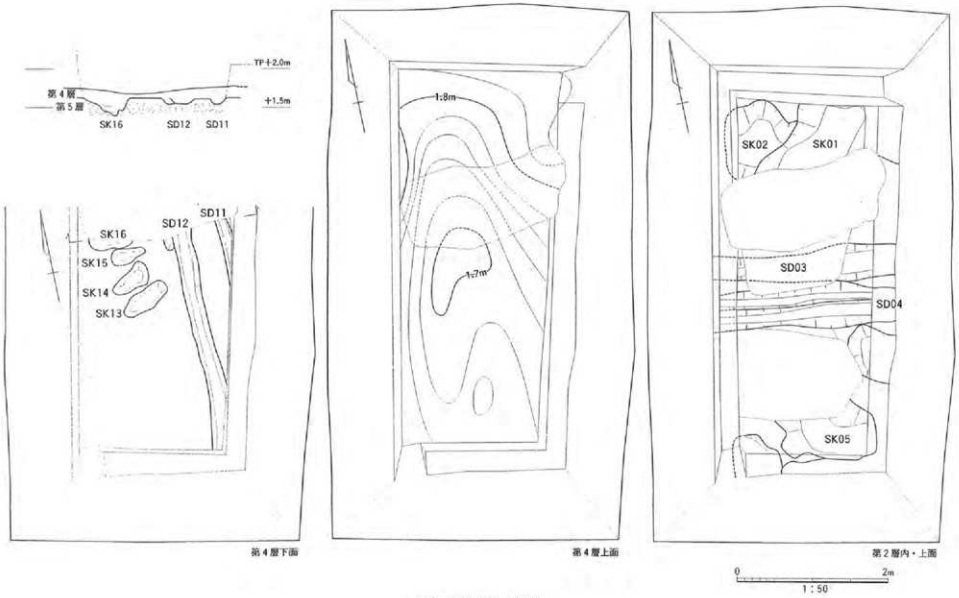

TP+2.0m
第4層
第5層
+1.5m
SK16
SD12
SD11
SK16
SD12
SD11
SK15
SK14
SK13
第4層下面
1.8m
1.7m
第4層上面
SK02
SK01
SD03
SD04
SK05
第2層内・上面
0
2m
1:50

図5　遺構平面・断面図

面には溝SD11・12と小土壙SK13～16を検出した。溝はそれぞれ幅0.15、0.25m、深さ0.08、0.06mで、埋土はシルト質中粒～細粒砂であり、畠の畝間であった可能性がある。小土壙は長さ0.45～0.65m、幅0.25～0.30m、深さ0.12～0.35m、埋土は溝群と同じシルト質中粒～細粒砂で、これも耕作に係わるものであろう。

b．近世・近代の遺構(図5右)

第2a層堆積物を埋土とする第2b層上面の土壙SK02・05は、1m以上の長径と1m内外の短径が推定される深さ0.3m内外の土壙であり、遺物が雑然と分布したことからゴミ穴であったとみられる。肥前磁器染付・白磁、土師器火入・皿、瓦質火入、関西系陶器鍋など、18世紀後半～19世紀の遺物が含まれていた。

第2層上面の溝SD03・04は幅1.5mの窪地の中にあるほぼ東西方向の2条の溝であり、最大深はSD03で0.65m、SD04で0.38mであり、SD04の溝底は浅く2筋に分かれていた。両溝の新旧は認められなかった。埋土はともに炭を含む黒灰～にぶい黄褐色礫・砂質シルトであり、含まれた遺物は、肥前磁器染付・白磁、肥前陶器、京焼、丸瓦・平瓦など、近世以降のものであった。当該地の地割に係わる溝と思われる。

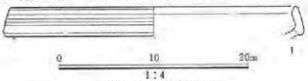


図6　出土遺物実測図

c．包含層出土遺物

図6は備前焼の擂鉢であり、中世末のものである。出土層準は第2～4層の中である。

〈まとめ〉

本調査では、中世の作土層を検出し、下面で耕作に係わるとみられる遺構を検出した。このことは、当該地域が中世には耕作地であったことを示している。また、古代以前の遺物が発見されていないことから、当該地の基盤層である第5層は、中世かそれより少し前に離水したものと推定され、それ以前の当該地は淀川の流れの中にあったものと推定される。今後、周辺地域の調査が進めば、当該地域の歴史的変遷がより具体的に明らかにできるであろう。

参考文献

大阪市文化財協会2002、「摂津国分尼寺跡の調査」：『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告－1999・2000年度－』

調査地遠景
第2層内・上面の遺構
（南から）

第4層下面の遺構
（西から）

地層の断面
（西壁）

Ⅵ 旭　　区

森小路遺跡発掘調査(MS07－2)報告書

・調査個所　大阪市旭区新森5丁目71－12・71－18(新森5丁目16番)
・調査面積　30㎡
・調査期間　平成19年6月20日～6月26日
・調査主体　財団法人　大阪市文化財協会
・調査担当者　文化財研究部次長　南秀雄、趙哲済

〈調査に至る経緯と経過〉

森小路遺跡は1931(昭和6)年に発見された弥生時代中期～古墳時代中期後葉を中心とする遺跡である。京阪森小路駅にほど近い新森中央公園を中心に直径約800mの範囲が遺跡に指定されていたが、近年の市営地下鉄今里線に係る調査などの国道479号(大阪内環状線)周辺での調査で、弥生時代の遺構が確認され、遺跡が北東側に拡がることが明らかとなっている(図1)。

当該地は遺跡の東北部に位置し、近辺では、西約25mのMS88－31次調査地で韓式土器を包含した土壙が、また、南約40mのMS80－5次調査地で弥生土器、磨製石斧、石庖丁などを包含した土壙が見つかっている。2007年5月27日に大阪市教育委員会が試掘調査を実施したところ、近世～中世の作土層に瓦片や弥生土器が含まれ、その下位に、遺構や遺物は発見できなかったものの、弥生～古墳時代の古土壙と推定される地層が確認された。そこで、本調査を行うことになった。

調査範囲は開発敷地の西部に設定し、6月20日に近現代の盛土層を機械掘削した後、順次、人力により掘下げ、遺構と遺物の記録に努めた。本調査では森小路遺跡縁辺部の状況を確認し、予定どおり26日に埋戻しを行い終了した。

本報告で用いる水準は東京湾平均海面値を用い、TP±○mと表記する。また、示北記号は図1が座標北、それ以外は磁北を示す。

〈調査の結果〉

1．層序

森小路遺跡の基本層序は編まれていないが、おおむね、現代、近世、中世、古墳、弥生の各時代の遺物包含層が重なり、その下位にいわゆる森小路地山層が分布している[大阪市文化財協会2001]。本調査地では粘土偽礫と砂からなる現代の搬入土層(第0層)の下位を第1～3層に区分した(図3・4、図版上)。

第1層は灰オリーブ色粗粒～中粒砂からなる搬入土層で、黄灰色粘土偽礫を多数含有した。層厚は約40cmであった。

第2層はオリーブ黒～黄灰色のシルト質粘土からなる作土層であり、層厚は20～30cmであった。

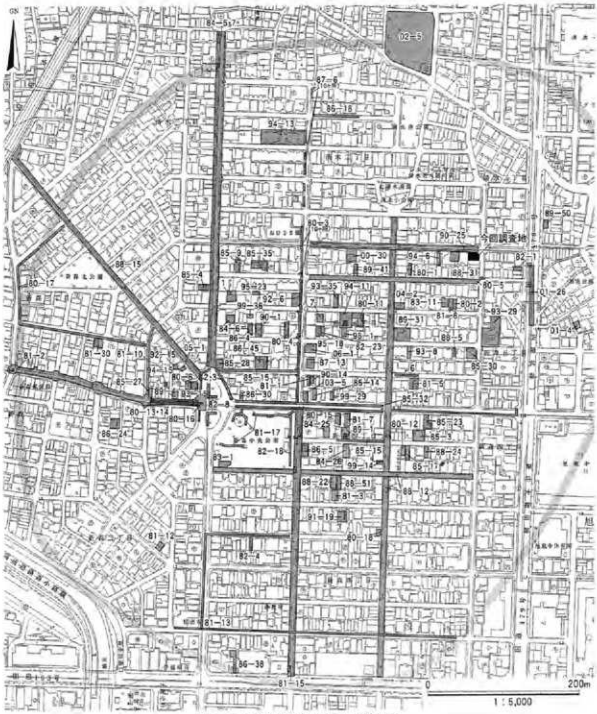


図１　森小路遺跡の範囲と調査地位置図

断面は塊状で管状斑鉄を多数認めた。上面で畠を、下面で耕作痕跡を検出した。

第３層は全層厚115cm以上で、上位から暗灰黄色シルト質細粒砂層(層厚約５cm)、黒褐色砂質粘土～シルト層(層厚約10cm)、暗灰黄色粗粒砂主体の細粒～極粗粒砂層(層厚約10cm)、灰色粗粒～中粒砂層(層厚約15cm)、灰褐色極細粒砂質シルト薄層と灰～暗灰色中粒～極細粒砂質シルト薄層の互層(層厚約25cm)、灰色粗粒～中粒砂層(層厚18cm)、レンズ状に極粗粒砂を複数挟む灰色中粒～粗粒砂層(層厚30cm以上)であった。生物擾乱のために全般に地層境界は不鮮明で、下半部には甲殻類の巣穴の化石である直径1.5～3.0cmの砂管を多数認めた。遺物は出土しなかった。上位から２層目が弥生～古墳

図２　調査区配置図

アミ掛部分は深掘り箇所

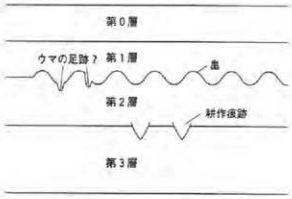


図３　地層と遺構の関係図

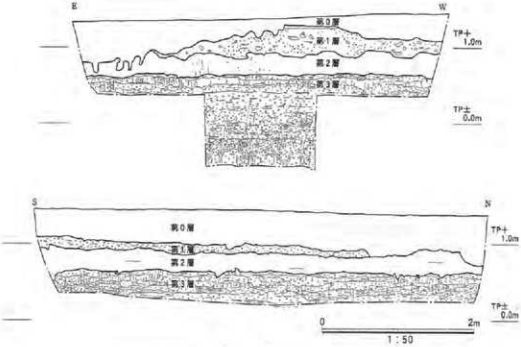


図４　地層断面図

上：南壁(深掘り部南壁断面投影)、下：西壁

時代の古土壌と推定された地層であるが、本層全体は弥生時代より古く、淀川デルタの前縁に堆積したいわゆる森小路地山層に当る。

２．遺構と遺物

ａ．遺構

第２層は森小路遺跡のいわゆる蓮田層の岩相に似るが、第２層上面で畠を検出した。畠は南北方向の畝が６条、畝間が６条である。畝幅は30～40cm、畝間幅は30～60cm、畝高は８cm前後であった(図

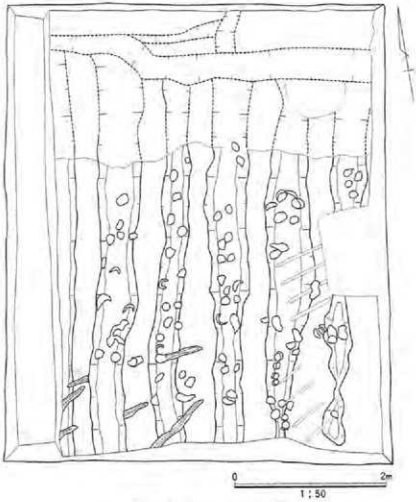


図5　第2層上面の遺構分布図

5、図版中)。

畠の面には縁が1～2㎝へこむ直径10㎝強の丸い窪みが多数認められた。踏鋤をはめたウマの足跡の可能性がある(図版下)。また、北東－南西方向に何かを引きずった幅10㎝前後の溝状の窪みも観察された。第2層下面では歪みながら幅数～10数㎝、奥行き2～3㎝で、ごく浅い紡錘形の窪みが多数認められた。踏込みによる撹拌は顕著でなく、下位層が変形に乏しいことから、これらの窪みは耕具による耕作痕跡とみられる。したがって、当該地の第2層は森小路遺跡のいわゆる廻田層ではなく、畠と水田の二毛作が行われた作土層であった可能性がある。

b．遺物

第2層から出土した遺物はすべて破片であるが、最新のものが肥前染付磁器、備前擂鉢、瀬戸陶器碗、瀬戸美濃鉄釉碗などであることにより、第2層の形成は近世と考えられる。その他、弥生土器、土師器、須恵器、瓦質三足羽釜、白磁など、多時期の遺物が出土したので、その中の弥生土器底部の実測図を掲載した(図6)。

図6　第2層出土の弥生土器底部遺物実測図

〈まとめ〉

本調査地は森小路遺跡の東北部に当り、当該地で初めて近世の畠を検出した。一方、周辺の調査結果から期待された弥生～古墳時代の遺構は、近世の耕作により削られたらしく、確認できなかった。しかし、破片ではあるが弥生土器が出土しており、近辺には弥生時代の遺構が遺存するものと思われる。

参考文献

大阪市文化財協会2001、『森小路遺跡発掘調査報告』Ⅰ、221ps.

地層の断面

第２層上面の畠

畠上のウマの足跡？

森小路遺跡発掘調査(MS07－３)報告書

・調 査 個 所　大阪市旭区新森５丁目16番22
・調 査 面 積　40㎡
・調 査 期 間　平成20年３月17日～３月26日
・調 査 主 体　財団法人　大阪市文化財協会
・調査担当者　文化財研究部次長　南秀雄、岡村勝行

〈調査に至る経緯と経過〉

森小路遺跡は1931(昭和６)年に発見された弥生時代中期～古墳時代中期後葉を中心とする遺跡である。京阪森小路駅にほど近い新森中央公園を中心に直径約800ｍの範囲が遺跡に指定されていたが、近年の市営地下鉄今里線に係わる調査などの国道479号(大阪内環状線)周辺での調査で、弥生時代の遺構が確認され、遺跡が北東側に拡がることが明らかとなっている。

当該地は遺跡の東北部に位置し、近辺では、北約15ｍのMS88－31次調査地で韓式土器を包含した土壙が、また、南約10ｍのMS80－５次調査地で弥生土器、磨製石斧、石庖丁などを包含した土壙が見つかっている(図１)。2008年３月５日に大阪市教育委員会が試掘調査を実施したところ、地表下40～65cmに弥生土器を含む遺物包含層が確認され、本調査を行うことになった。

調査範囲は開発敷地の中央から北にかけて、東西4ｍ、南北10ｍに設定した(図２)。土置き場の関係から、中央の半分を先に調査し、埋戻したのち、北側の調査を行なった。３月17日に近現代の作土層および弥生時代の遺物包含層の一部(第３層の半分)までを機械掘削したあと、人力により掘下げ、

図１　調査地位置図

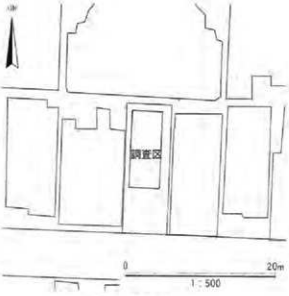


図２　調査区配置図

遺構と遺物の記録に努め、26日に終了した。

本報告で用いる水準は東京湾平均海面値を用い、TP±〇mと表記する。また、示北記号は図1・2が座標北、それ以外は磁北を示す。

〈調査の結果〉

1．層序

森小路遺跡の基本層序は纏まれていないが、おおむね、現代、近世、中世、古墳、弥生の各時代の遺物包含層が重なり、その下位にいわゆる森小路地山層が分布している[大阪市文化財協会2001]。本調査地では現代の盛土層以下を第1～5層に区分した(図3・4)。

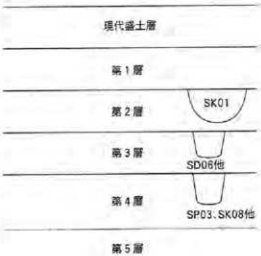


図3　地層と遺構の関係図

第1層は灰黄褐色中粒砂からなる近現代の作土層で、層厚は10～20cmであった。

第2層は黄褐色シルトの偽礫を含む黒褐色中粒砂質シルトの盛土層で、層厚は10～15cmであった。弥生時代中期前葉、古墳時代中期の土器を含み、それ以降の遺物が確認できなかったことから、古墳時代に遡る盛土の可能性がある。

第3層は黄褐色シルトの偽礫を多く含む灰黄褐色細砂質シルトの盛土層で、層厚は約10cmであった。畿内第Ⅱ様式の弥生土器やサヌカイト製の石器を含み、その他の時代の遺物を確認できなかった。上面ならびに第4層上面で、同期の遺構が多数検出され、弥生時代中期前葉の盛土層と考えられる。

第4層は褐灰色粘土質シルトからなり、層厚は約30cmであった。弥生時代より古く、淀川デルタの前縁に堆積したいわゆる森小路地山層に当る。

第5層はにぶい黄褐色中粒砂からなる森小路地山層で、層厚は約30cm以上であった。

2．遺構と遺物

a．遺構(図4)

i)第3層および第4層上面遺構

調査初段階に第3層と第4層のそれぞれの上面に遺構が存在することは確認したが、調査期間と遺構検出の効率性を勘案すると、遺構は第4層上面で一度に検出せざる得なかった。遺構は柱穴、土壙、溝があり、総数108基を数える。すべて弥生時代中期前葉に属する遺構と考えられる。

柱穴は全遺構の約9割を占める。平面形が一辺0.15～0.40mの円形もしくは隅丸方形を呈し、深さが検出面から0.2m以上が過半数で、なかには0.5m以上もあった。柱痕跡が確認できたのは、全体の1割に満たないが、SP03では柱そのものを検出した(図版2中)。かなり朽ちているものの現状では平面形が一辺約15cmの方形を呈する。柱穴が密集するため、正確に掘立柱建物を復元することは困難であるが、その可能性のある柱列は、南西に緩やかに下がる旧地形や、SD06、SK08に平行あるいは直交する方向に確認できる。そのほかに土壙を4基、溝を4基検出した。いずれも堀土はSD06で黄

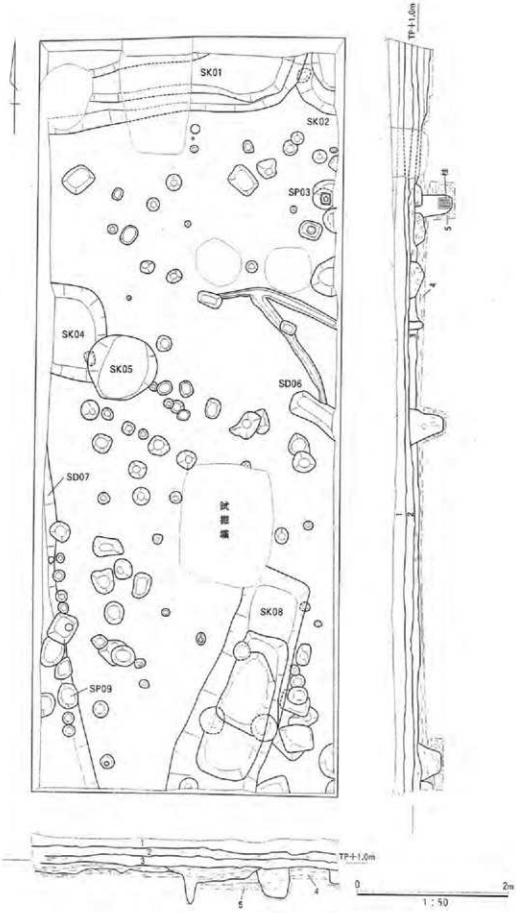


図4　遺構平面・地層断面図

褐色シルトの偽礫が認められるほかは、黒褐色粘土質シルトを主体とする自然堆積層であり、弥生土器の細片が出土している。SK02は調査区北東隅で検出した東西0.5m以上、南北0.7m以上、深さ0.2mの土壙で、調査区北東外に拡がる。SK04は調査区中央西端で検出した土壙である。平面形が隅丸方形で、東西0.7m以上、南北1.3m以上、深さ0.3mである。SK05は平面形が歪な円形をなし、径0.9m、深さ0.5mの土壙である(図版2上)。SD06は調査区中央東端で検出された溝である。幅0.3m、長さが0.6m以上、深さ0.5mで、東側に延びる。SD07は調査区南西隅で検出した幅0.7m、長さ4.5m以上、深さ0.2mの落込みである。調査区南西に拡がる。埋土は炭化物を多く含む。SK08は幅1.2m、長さ3.6m以上、3段落ちとなる土壙で、最深部で深さ0.6mである。南壁沿いで検出されたピットは先細りで、杭状のものが抜き取られた状況が埋土の観察から確認できた。畿内第Ⅱ様式の土器細片が10数点出土した。よく似た形の遺構には、MS98－1次のSK601、SK602、MS95－18次のSX501がある。このうちSK601では、壁際に杭が打ち込まれ、蓋と考えられる板材が検出されており、貯蔵あるいは水溜施設の可能性が指摘されている。

ii)第2層上面検出遺構

第2層上面で確認した遺構は、SK01のみである。調査区北側に拡がる、長さ3.5m以上、幅1.0m以上、深さ0.7m以上の土壙で、埋土は上位の約20cmが黒褐色細粒砂質シルトで、以下は中粒砂あるいは粗粒砂を主体とする水成層である。畿内第Ⅴ様式の弥生土器や、古墳時代中期の須恵器の細片が出土し、その他の時代の遺物は確認されなかったが、層相や周辺の調査成果からみて、江戸時代以降の遺構の可能性がある。

b．遺物(図版2下)

遺物包含層、遺構からは、弥生時代のサヌカイト製の石器1点、土器片約200点、古墳時代中期の須恵器片が数点出土している。1は側縁の突起や、対面する側縁がやや内湾する形態の特徴から石小刀と考えられる。先端と基部を欠失し、残存長7.0cm、最大幅3.0cmである。2は広口壺の口縁部である。3は櫛描直線文が巡る壺の体部である。4は蓋、5は壺の底部である。6は壺の体部から頸部にかけての破片で、櫛描流水文を巡らす。7は細頸壺の頸部の破片で、櫛描直線文を巡らす。以上の弥生土器は畿内第Ⅱ様式に属する。

〈まとめ〉

本調査地は面積40㎡にもかかわらず、多数の弥生時代中期前葉の遺構、遺物を検出することができた。集中し、切合う柱穴から、建物は同一個所に何度か建替えられた状況がうかがえる。北東40mで行われたMS07－01次調査では当該期の遺構はまったく確認されておらず、今回の調査区は弥生時代中期前葉の集落域の北東隅に近い個所であることが予想される。こうした調査の積み重ねによって、森小路遺跡の全貌が明らかになるものと期待される。

参考文献

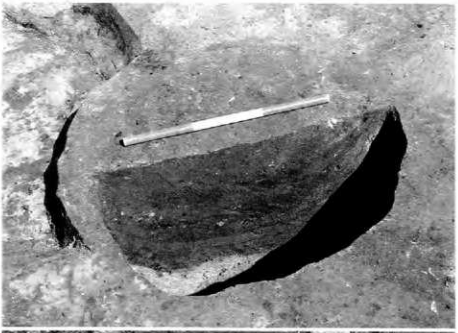
大阪市文化財協会2001、『森小路遺跡発掘調査報告』Ⅰ、221ps.

南区全景（北から）

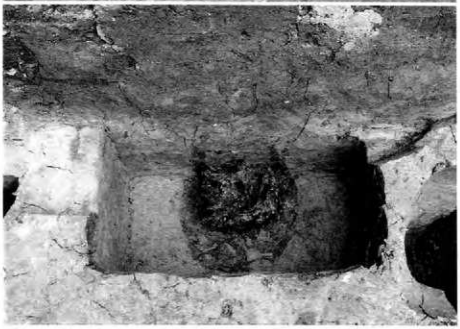
北区全景（南から）

SK08埋土（北から）

SK05埋土(南から)

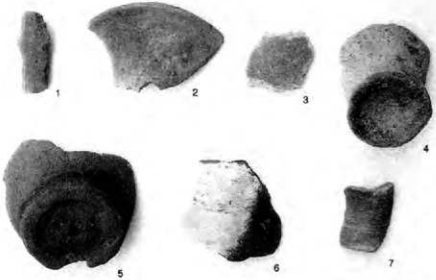


SP03柱(西から)



おもな出土遺物

第3層(1)、SK05(2・3)、SP09(4)、SK08(5・6)、SK01(7)



Ⅶ 住　吉　区

・調査個所　大阪市住吉区苅田６丁目43
・調査面積　35㎡
・調査期間　平成19年７月17日～７月20日
・調査主体　財団法人　大阪市文化財協会
・調査担当者　文化財研究部次長　南　秀雄、小田木富慈美

〈調査に至る経緯と経過〉

今回の調査地は、苅田４丁目所在遺跡から南西に約100m離れた苅田６丁目に位置する(図１)。苅田４丁目所在遺跡の東には難波京朱雀大路から南へ続く難波大道が通っていたと推定されている。北西および南西では旧石器～江戸時代の複合遺跡である南住吉遺跡と山之内遺跡が存在する。また、南には７世紀以降に造られたとみられる依網池跡がある。

苅田４丁目所在遺跡では府営住宅の建替えに伴い二度にわたって発掘調査が行われている(図２)。

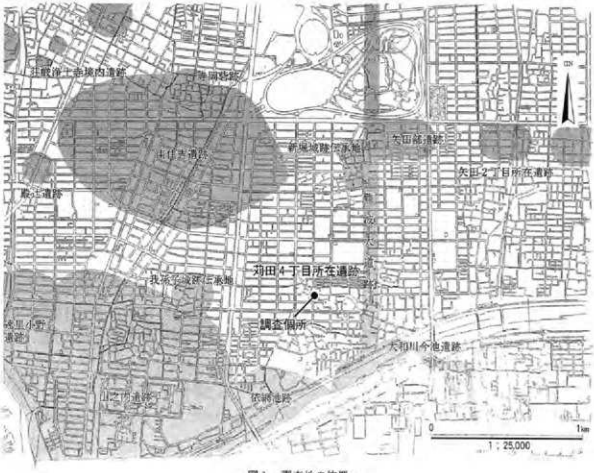


図１　調査地の位置

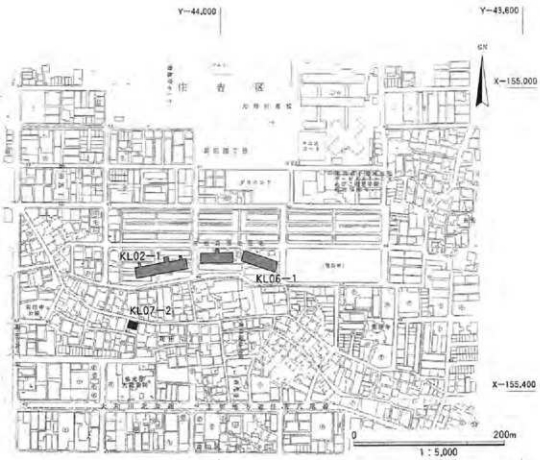


図2　周辺の調査位置図

KL02－1次調査では、室町時代(14～15世紀)の鋳造に関連する遺構・遺物が検出されており、文献との対比からこの地に「苅田鋳物師」が存在したことが確実視されるようになった[大阪市文化財協会2004]。また、これに引き続いて行われたKL06－1次調査では、鋳造工房関連遺構が検出された。さらに、集落の北を区画したとみられる堀や溝、多数の井戸を確認することができた[小田木富慧美2006]。これらからは鋳造関連遺物が多数出土しているが、工房に直接伴う建物跡などの検出には至らなかった。今回の調査地はこれよりも南の旧苅田村内に位置し、村内での最初の発掘調査となることから、鋳物師集団の母体となった集落本体の様相が明らかになることが期待された。

調査に先立ち行われた試掘調査で、段丘構成層の上位で中世の遺物包含層が確認されたため、今回の調査を実施することになった。今回の調査では中世の遺構や遺物の拡がりを確認することが期待された。調査区は敷地の北西に設定した(図3)。人力掘削は2007年7月17日に開始し、検出された遺構はSE03を除きすべて人力で掘削した。SE03は上～中層の上部を人力で掘削し、その下部は重機を用いて底まで掘削を行った。調査期間内は、適宜写真撮影と記録作業を行い、7月20日に現地での作業をすべて終了し、撤収作業を行った。なお、図1～3で使用した方位は座標北で、図5の方位は磁北である。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)で、本文および挿図中ではTP+○mと略記する。

図3　調査区配置図

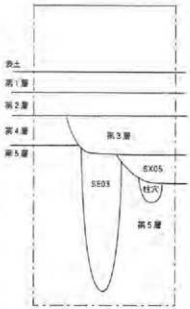


図4　地層と遺構の関係図

〈調査の結果〉

1．層序

表土および現代盛土を除去すると、中～近世の遺物包含層が確認された。これ以下は段丘構成層であった。遺構は段丘構成層である第5層上面および、近世の作土層である第3層基底面で検出された。以下で各層の特徴について述べる(図4・5)。現地表の標高はTP+10m前後でほぼ水平であるが、これ以下の各層上面は、高低差に若干の差異はあるものの、北が高く南へ向って低くなる堆積状況を示している。

表土層：厚さ10～60cmで、旧住宅の解体工事に伴う整地層である。

第1層：層厚10～20cmの含礫灰黄褐色シルト質粘土層で、段丘構成層の偽礫を主体とし2～3枚の単位に分れる整地層である。近代のものである。

第2層：灰黄褐色中粒砂～黒褐色シルト質粘土からなる整地層である。層厚は10～20cmである。出土遺物が無く時期は不明であるが、第1層に堆積状況が類似しており、近代であろう。

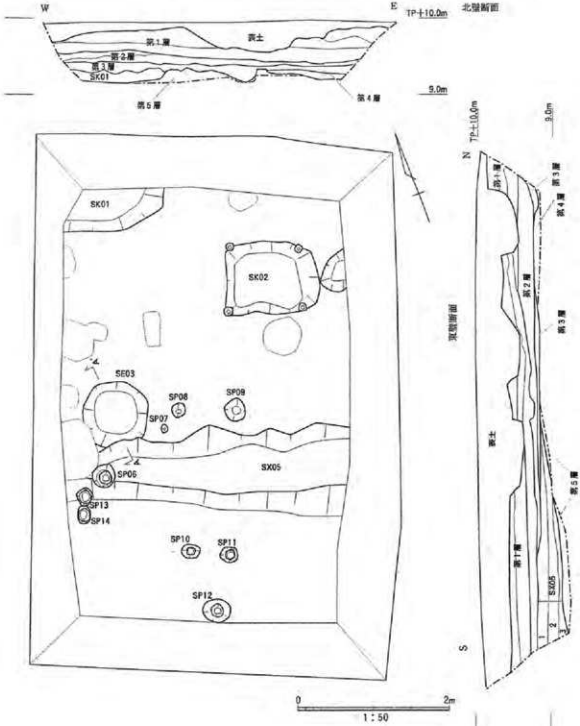
第3層：含礫暗褐色粗粒砂質シルト層で、調査区の全域に薄く分布する近世～近代の遺物包含層である。層厚は10cm以内である。出土遺物は18～19世紀の国産陶磁器・土器類である。第5層上位の本層基底面では、土壙・小穴を検出した。

第4層：調査区北東部に部分的に分布する暗褐色粗粒砂質シルト層で、炭や土師器・瓦質土器の細片を含む。層厚は10cm以内で、中世の遺物包含層である。

第5層：にぶい黄色砂礫層で、段丘構成層である。本層の上面では中世の遺構が検出された。

2．遺構と遺物

第5層上面および第5層上位の第3層基底面で遺構を検出した(図5・6)。これらからは中世の遺



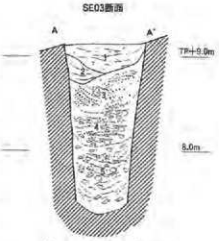
第1層：合礫灰黄褐色（10YR4／2）シルト質粘土（段丘構成層の偽礫を主体とする）
第2層：沢黄褐色（10YR4／2）中粒砂～黒褐色（10YR3／2）シルト質粘土
第3層：合礫暗褐色（10YR3／3）粗粒砂質シルト
第4層：暗褐色（10YR7／4）粗粒砂質シルト（炭・土器片を含む）
第5層：にぶい黄色（2.5Y6／3）砂礫（段丘構成層）

SK01埋土
にぶい黄褐色（10YR4／3）細粒砂質シルト（炭・土器片を含む）
SX05埋土
1：合礫黒褐色（10YR3／1）中粒砂質シルト
2：黒褐色（7.5YR3／2）粘土質砂礫
3：合礫暗褐色（10YR3／2）粘土質シルト（炭・土器片を含む）

図5　調査区平・断面実測図

物が出土している(図7)。調査区の北半部は江戸時代以降の土壙や小穴によって一部撹乱を受けていたが、南半部では中世の遺構がまとまって確認された。第5層上面の標高は調査区の北端ではTP+9.2m、南端ではTP+8.8mで、約0.4mの段差がある。なお、北に約70m離れたKL02－1次調査では、段丘構成層上面の標高はTP+8.7m前後であり、KL06－1次調査ではTP+8.3m前後であった。このことから、周辺の地形は、調査地の北からKL02－1次調査地にかけて高く、北東方向に緩やかに低くなっていたことが推測される。また調査地の南は一段低い地形であったと思われる。

土壙　調査区の北で2基を検出した。SK01は北西隅で確認された。規模は東西1.4m、南北0.5m以上で深さは0.2mである。埋土はにぶい黄褐色細粒砂質シルトで、炭や土器の細片を含み、SX05の埋土下層に類似している。2はSK01出土の土師器擂鉢である。口縁部は断面三角形で外面の稜線はややあまい。口径は31.4cmである。15世紀後半～末のものであろう。SK02は平面が東西1.2m、南北0.9mの隅丸長方形で、深さは0.1mとごく浅いものであった。埋土は含礫灰黄褐色シルトで、炭や土器細片を含むが、時期のわかる遺物は出土しなかった。埋土の特徴が他の中世の遺構に類似していることから、中世に遡る可能性がある。この土壙の四隅には直径0.1m、深さ0.3mの柱穴を掘削しているが、これを含めて土壙の用途については不明である。



SE03埋土
1：灰黄褐色(10YR4／2)含礫粘土質シルト
2：にぶい黄褐色(10YR4／3)シルト質粘土
3：褐色(10YR4／4)粗粒砂
(暗褐色粘土偽礫を含む)
4：にぶい黄褐色(10YR5／3)粗粒砂～礫
(暗褐色粘土偽礫を含む)
5：灰黄褐色(10YR5／2)粘土質砂礫
(黒褐・暗褐色粘土偽礫を含む)

図6　SE03断面実測図

井戸　調査区の西で1基が検出されている。SE03は直径0.9m、深さ1.8mで、切合い関係から後述するSX05よりも古い。この井戸は素掘りで、段丘構成層や中世の遺物包含層と思われる暗褐色粘土の偽礫で人為的に埋戻していた(図6)。埋土からは中国産青磁・国産陶器・瓦質土器・須恵器・土師器が出土した。3は土師器擂鉢である。内面には煤が付着する。4は瓦質土器で、復元径は60cm程度となり井戸側の可能性がある。口縁部外面には凸帯が認められる。体部内面には横方向のハケメを施す。5は瓦質土器羽釜である。口縁部外面に凹線が認められる。体部外面には比較的平滑なヘラケズリを施す。6は国産陶器壺で、常滑焼の可能性がある。肩部には耳が付く。これらの土器類は15世紀後半～末のものであろう。7は鞴羽口で、炉壁との接合部分から炉外にかけての破片である。外径は13.6cm、孔径は8.9cmで、厚さは約2cmである。KL06－1次調査出土遺物よりも小ぶりで厚いことが特徴である。

落込み　SX05は、調査区の南で確認された東西方向の落込みで、北は一段浅くなっている。幅は2.4～2.8m以上、深さは0.2～0.4mである。埋土上層は含礫黒褐色中粒砂質シルトで、炭・土師器片を含む。作土の可能性がある。中層は黒褐色粘土質砂礫で、段丘構成層の偽礫をわずかに含み、客土と思われる。下層は含礫暗褐色粘土質シルト層で、炭・土器片を含む。本層も作土の可能性があり、

下面で、不明確ながら耕作痕跡と思われる凹みを確認している。埋土からは中国産青磁・白磁のほか、土師器・瓦質土器が出土している。時期のわかるものは15～16世紀前半の年代を示す。1は土師器擂鉢である。口縁部の稜は緩やかな曲線となっている。16世紀前半のものであろう。なお、この落込みの下位では、第５層上面で柱穴を検出した。

柱穴・小穴　SX05の周辺や下位では第５層の上面で柱穴や小穴を検出した。これらのうちSP07～09は深さが0.1m以内と浅い小穴である。SP06・10～14は直径が0.2～0.3m、深さ0.1～0.3mで、直径0.1m前後の柱痕跡が認められる。これらは掘立柱建物や柵を構成する柱穴であったとみられるが、建物を復元するには至らなかった。

〈まとめ〉

今回の調査地は旧苅田村内に位置する。大正期の地図でみると、調査地は村内を東西に横断して周

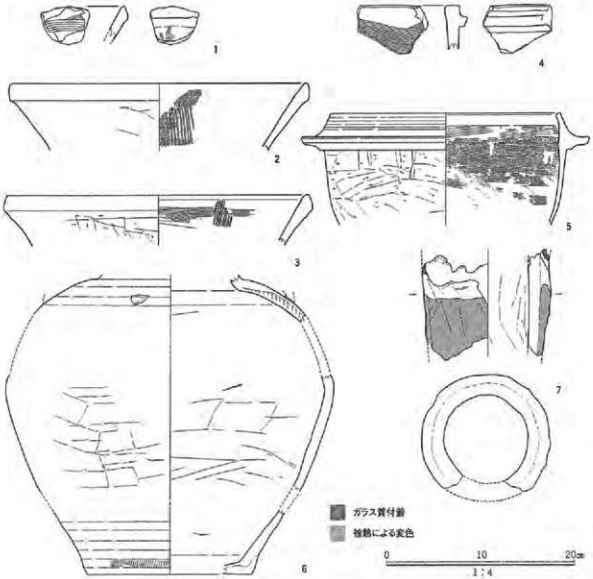


図７　出土遺物実測図
SK01(2)、SX05(1)、SE03(3～7)

辺集落へ繋がる中心道路に北面し、道路沿いには東西に長い建物が認められる(図8)。付近の集落は中世には周囲に環濠を巡らせており、近代初頭までその姿を大きくは変えていなかったとみられている。図8では苅田をはじめ庭井・枯木・我孫子の各集落で周囲に環濠の名残と思われる水路や溝が確認される。また、調査地の西では環濠を埋めた際に建立されたとみられる苅田橋の碑がある。

一方、苅田村の北東で行われたKL06－1次調査では、15世紀代に営まれたと考えられる鋳造関連遺構や井戸・溝などとともに、集落の北を画すると思われる堀が見つかっている(図8)。この堀は16世紀半ばには埋められたと考えられ、工房の廃絶もほぼこれに相前後すると推測されている。このことから、16世紀前半～中葉に集落の姿を変えるなんらかの画期があったと思われる。なお、鋳造に関連する工房の中心施設はKL06－1次調査地よりも南で、かつ現在の集落よりも北に存在したと推測される。

今回の調査では15世紀後半に埋められた井戸と、これとほぼ同時期と考えられる柱穴、井戸の廃絶後に形成された落込みを確認することができた。これらは苅田において少なくとも15世紀後半までには集落が成立していたことを示す貴重な資料となった。集落の時期は過去二度にわたって調査地の北

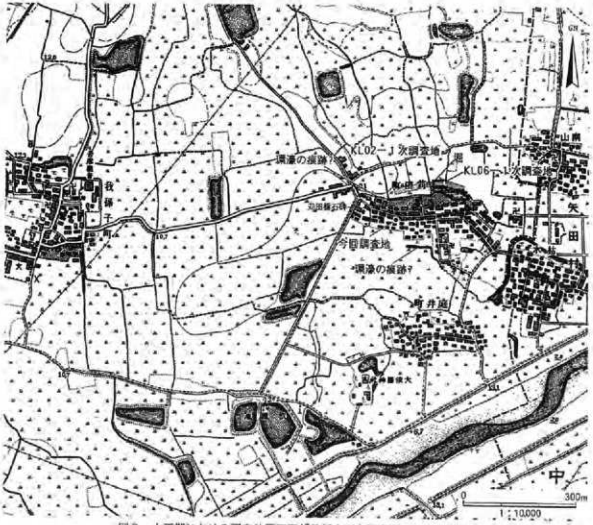


図8　大正期における調査地周辺図(『最新実測大阪市街地図』1920年)

で検出された鋳造関連遺構や井戸の存続期とほぼ同時期であり、両者は有機的に関連していたと推測される。

以上のように、今回の調査では苅田村の中世における姿の一端を知るうえで貴重な手掛かりを得ることができた。しかし、集落内では最初の調査ということもあり、周辺を含めた集落の全容を知るうえではまだ十分な資料の蓄積が必要である。今後の調査成果に期待したい。

参考文献

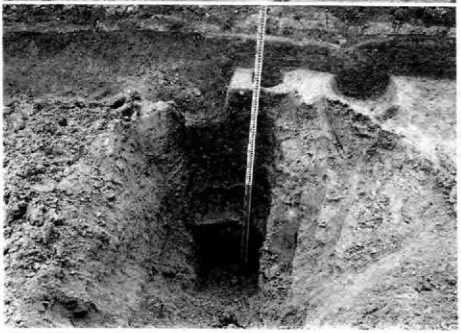
大阪市文化財協会2004、『苅田４丁目所在遺跡発掘調査報告』

小田木富慧美2005、「いずくにや去らん～かつた村の鋳物師たち～」：大阪市文化財協会編『葦火』127号、pp.４－５

調査区東壁断面
（西から）

遺構完掘状況
（南から）

SE03下半部
遺構検出状況
（東から）



・調査個所　大阪市住吉区遠里小野３丁目10
・調査面積　20㎡
・調査期間　平成19年５月29日－６月１日
・調査主体　財団法人　大阪市文化財協会
・調査担当者　調査研究部次長　南秀雄、田中清美

〈調査に至る経緯と経過〉

調査個所は弥生時代から室町時代に至る複合遺跡である遠里小野遺跡の東南部に位置しており、北側には古墳時代および平安時代の掘立柱建物や平安時代の瓦敷きなどが検出されたOR05－１次調査地がある(図１)。また、当地は江戸時代の文献に見える「榎津寺」の比定地でもあり、OR05－１次調査では白鳳時代から平安時代に属する軒丸・軒平瓦をはじめ、多数の平・丸瓦が出土している[大阪市文化財協会2006]。

本調査では、大阪府住宅供給公社による住宅建設工事中に古代の瓦や土器が採集された地点の近くにトレンチを設定して、遺構・遺物の層準などの確認を行った。

調査はまず、７世紀後葉から８世紀前葉にかけての軒丸・軒平瓦が採集された電気室の北東側に第１トレンチを設けた後、その東側７ｍに、掘削中であった排水管路の未掘削部分を第２トレンチとし、電気室から西に延びる幅0.5ｍの電気ケーブルの埋設管路を第３トレンチと仮称して行った(図２)。以上のトレンチの内、人力掘削によって、遺構・遺物の検出作業を実施したのは第１・２トレンチで、

図１　調査地区位置図

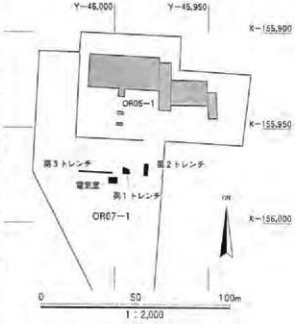


図２　第１～３トレンチ配置図

第3トレンチについては掘削時の地層の観察に止めた。

本調査で使用した方位は図1・2が座標北、図4・5は磁北、水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)で、挿図中ではTP+○mと記した。

〈調査の結果〉

i．層序(図3～5)

3箇所のトレンチで地層を観察したが、いずれも既に大規模な地盤改良工事が行われており、厚さ40cm前後の第0層の現代整地層の直下に第2層あるいは第3層の部分があった。

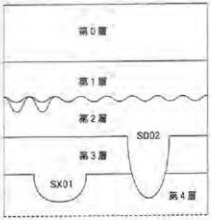


図3　地層と遺構の関係

第1層：暗灰黄色砂礫混りシルト層で、層厚は10～20cmある。古代から中世とみられる土師器の細片が出土した。第1トレンチでは本層の下面で浅い溝状の遺構が確認された。中世以降の作土層であろう。

第2層：暗灰黄色砂礫混りシルト層で、層厚は20cm前後ある。本層は地山である第4層の偽礫を多く含んでおり、サヌカイト製の石器遺物をはじめ、古墳時代後期から飛鳥時代に属する土師器・須恵器、白鳳時代後期から奈良時代にかけての瓦類が出土した(図6)。第2トレンチにある溝SD02は本層下面の遺構である。

第3層：第1～3トレンチに分布している灰黄褐色砂礫混りシルトを主体とする地層で、第1トレンチのSX01は本層下面の遺構である。古墳時代後期から飛鳥時代にかけての須恵器や土師器片が出土した。

第4層：灰黄褐色礫混り粘土質シルト層で、層厚は40cm以上ある。本層は上町台地の洪積層で、上面の標高は10.6～10.9mを測り、調査個所の北東から南西にかけてわずかに傾斜している。

ii．遺構と遺物

a)古墳時代の遺構と遺物(図4)

SX01　第1トレンチの北東部に位置する深さ0.4mの土壙状の遺構である。埋土は下から灰黄褐色粘土質シルト、第4層の偽礫を含むにぶい黄褐色粘土質シルトで、TK43型式に属する須恵器高杯形器台の杯部・壺・甕をはじめ、土師器甑の細片が出土した。底が平坦なことから竪穴建物の可能性もあるが、遺構の大半が調査範囲外のため、規模や性格は明らかでない。

b)奈良時代の遺構と遺物

SD02　第2トレンチのほぼ中央部に位置する幅1.4m以上、深さ0.2m以上を測る南北方向の溝で、南北約3.6m分を確認した。溝北端の底面では、埋土中に焼土や奈良時代の土師器皿片を含む小穴(直径約0.3m、深さ0.1m前後)が検出されたが、その性格については明らかにできなかった。また、溝は掘形や底の状況からみて、トレンチの北部で西に曲がっている公算が強い。

埋土は上層の黒褐色砂礫混り粘土質シルト、下層のオリーブ褐色砂礫混り粘土質シルトに二分される。下層は第4層の偽礫を多く含む加工時堆積層で、上層は7世紀後葉から8世紀の瓦類や有機物を

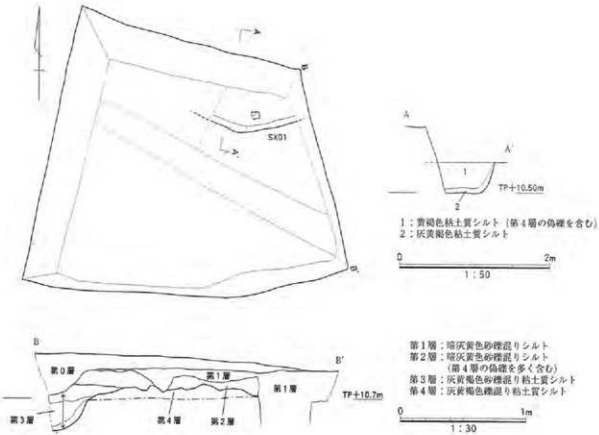


図4　第1トレンチSX01平面・断面図および東壁断面実測図

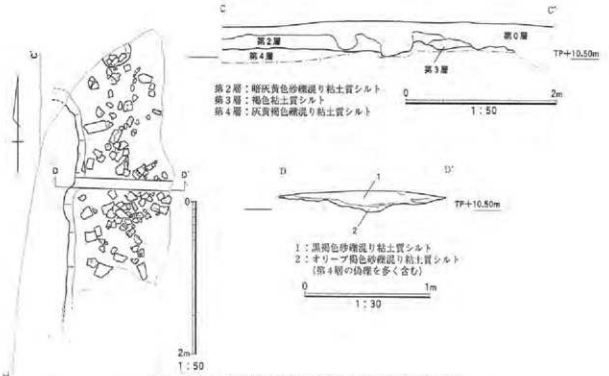


図5　第2トレンチSD02平面・断面図および西壁断面実測図

含む機能時堆積層である。

7世紀後葉の三重弧文軒平瓦5・7・9、8世紀の重圏文軒平瓦8(図6)をはじめ、図示できなかったが奈良時代前期とみられる須恵器鉄鉢、土師器甕・皿の細片が出土した。このほかにも、7世紀後葉から8世紀に属する行基式丸瓦や玉縁式丸瓦をはじめ、格子タタキや縄タタキで整形された平瓦も出土した。三重弧文軒平瓦は火災による火を受けて赤褐色を呈する5と、青灰色を呈し、須恵質に焼成された7・9があり、いずれも平瓦の先端に粘土紐を継ぎ足して瓦当面を整形しているが重線顎である。OR05－1次報告[大阪市文化財協会2006]のⅠ期(7世紀後葉)軒平瓦NHIA型式に属するものである。8は重圏文軒平瓦で、二次的な火を受けて赤褐色を呈している。瓦当面には4条のにぶい突線がある。OR05－1次報告[大阪市文化財協会2006]のⅡ期(8世紀)の軒平瓦NHⅡ型式に属するものである。

本溝は幅が1.4m以上もあること、溝の方位は真北に近く、途中で西に曲がる可能性が高いこと、7世紀後葉から8世紀にかけての多数の瓦類が出土したことなどから、榎津廃寺に関わる遺構と考える。

c)第2層採集および出土遺物

本調査の要因になった電気室の建設工事中に採集された複弁七弁蓮華文軒丸瓦1・2、重弁八弁蓮華文軒丸瓦3・4は、当地に比定されている榎津廃寺に伴うものであり、この内、複弁七弁蓮華文軒丸瓦1・2は遠里小野遺跡では初出の型式の軒丸瓦である。ともに中房から外縁まで残っており、1の外縁径は17.6cmを測る。焼成はあまいが、黒く燻されており、胎土中に少量のシャモット・長石粒を含む。1は外縁の高さが花弁と同じか低くなっており、弁間は外縁に接している。2の中房には瓦笵から外した後に付いた凹みがある。中房の蓮子は1・2ともに1＋6であり、均等に配されている。1・2の瓦当を観察したところ、後者の瓦当中心上端の弁間の位置が前者の瓦当では約180°回って瓦当中心の下端近くにあることが判明した。また、1・2の花弁や子葉、中房の蓮子は酷似しており、瓦笵の傷とみられるものも一致することから同笵瓦とした。なお、大阪歴史博物館所蔵の東住吉区田辺廃寺出土の複弁七弁蓮華文軒丸瓦[前田洋子1983]と比較したところ、同笵であることが判明した(註1)。重弁八葉蓮華文軒丸瓦3には中房が残るが器表面は4に比べて磨耗している。これらはOR05－1次報告[大阪市文化財協会2006]のⅡ期(8世紀)NMⅡ型式の軒丸瓦に属するものである。

6は水瓶の口頸部で、8世紀に属するものであろう。

iii. まとめ

今回の調査は狭小な範囲の緊急調査ではあったが、榎津廃寺の遺構とみられる溝SD02が検出されたほか、工事中に採集された7世紀後葉から8世紀の瓦類の出土地点や出土状況を記録することができた。特に複弁七弁蓮華文軒丸瓦1・2は遠里小野遺跡では初出であり、榎津廃寺創建期の瓦とされる単弁八弁蓮華文軒丸瓦NMⅠ型式に後続するものとみられ、Ⅱ期(8世紀)NMⅡ型式に先行する白鳳時代の軒丸瓦と考えられる。これらの資料は榎津廃寺の創建年代は、これまでにも指摘されているように7世紀後葉まで遡ることを物語るとともに、7世紀末葉以降も建物の建立や修復がなされたことを示している。

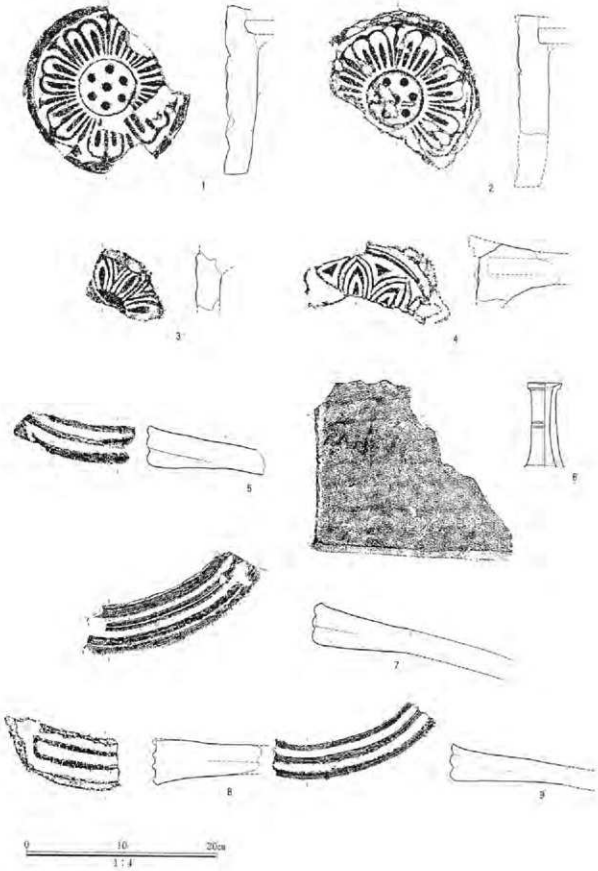


図6　電気蓋(1～4)、第2トレンチSD02(5・7～9)、第2トレンチ周辺表採(6)

一方、7世紀末葉に属する複弁七弁蓮華文軒丸瓦1・2は、東住吉区に所在する田辺廃寺のものと同笵であることが確認された。田辺廃寺を建立した田辺氏は渡来系氏族とみられており、今回、榎津廃寺と田辺廃寺に同笵の軒丸瓦が使用されていることが確認されたことは、津守氏など当地域の古代氏族と田辺氏は寺院建立を通じても関係を保っていたことを物語っている。今後も古代の遠里小野遺跡および榎津廃寺に関係した調査資料の蓄積を行うとともに、榎津廃寺や田辺廃寺の関係のみならず、津守廃寺を含めた上町台地上に点在する古代寺院およびそれらの背後にいる氏族との関係についても調査する必要があろう。

註)

(1)田辺廃寺と遠里小野遺跡の複弁七弁蓮華文軒丸瓦の検討の際には、大阪歴史博物館の加藤俊吾氏、堺市教育委員会の近藤康司氏にご教示を得た。

参考文献

前田洋子1983、「大阪上町台地検出の屋瓦資料ー飛鳥・奈良時代前期(白鳳)の屋瓦とそれらを検出する遺跡」:『摂河泉文化資料』31　摂河泉文庫、pp.1－22.

大阪市文化財協会2006、『遠里小野遺跡発掘調査報告』I

大阪府立近つ飛鳥博物館2007、『平成19年度春季特別展河内古代寺院巡礼』

第２トレンチSD02
遺物出土状況（北から）

第２トレンチSD02完掘状況（北から）

第１トレンチ全景（西から）

第２トレンチSD02検出状況（南から）

1

2

3

4

8

7

電気室(1～4)、第2トレンチSD02(7・8)

Ⅷ 東 住 吉 区

桑津遺跡発掘調査(KW07－3)報告書

・調査個所　東住吉区桑津3丁目63－1・63－2・63－5・66他
・調査面積　139㎡
・調査期間　平成19年8月6日～8月21日
・調査主体　財団法人　大阪市文化財協会
・調査担当者　文化財研究部次長　南秀雄、田中清美

〈調査に至る経緯と経過〉

調査個所は南北に派生した上町台地の東斜面に位置しており、ここは弥生時代から江戸時代に至る複合遺跡である桑津遺跡の東部に当る。調査個所の北側には弥生時代中期中葉から後葉にかけての方形周溝墓群が検出されたKW88－6次調査地[大阪市文化財協会1998；pp.78−88]、北西には弥生時代中期後葉をはじめ、古墳時代中期から奈良時代にかけての遺構・遺物が検出されたKW94－1次調査地[大阪市文化財協会1998；pp.222−230]、北東には飛鳥時代の掘立柱建群や大壁建物、呪符木簡が出土した井戸が検出されたKW91－8次調査地[大阪市文化財協会1998；pp.145−163]がある(図1)。また、当地域には江戸時代の地籍図をはじめ、昭和初期の区画整理施工図および現在の道路現況図などから東西90m、南北330mで、南側の環濠が凸形を呈する環濠集落が想定されている(図1)。

図1　調査地位置図

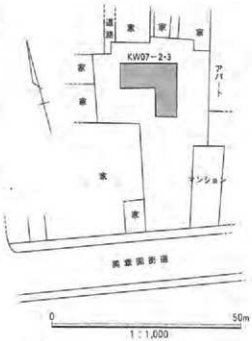


図2　調査区位置図

以上のように調査地周辺には弥生時代中期後葉の拠点集落が営まれた以後も古墳時代から古代・近世へと引き続いて集落が営まれていたことが判明している。

大阪市教育委員会が調査に先がけて実施した試掘調査においても、現地表下約0.4mで弥生土器を含む地層が確認されたため、敷地内の北側に東西15m、南北6mのトレンチを設定して、調査を行うことになった(図2)。

調査はまず、現代の整地層および近代の作土を重機で除去した後、地山層まで人力で掘削して、遺構・遺物の検出を行った。トレンチの中央部で幅約2m、深さ2.5m以上の南北方向の堀状の遺構が検出されたので、その規模や性格を検討するためトレンチの東部を東西5.5m、南北7.5m拡張したところ、堀状の遺構はさらに南に続くことが確認された。8月20日から第5層上面の全面清掃を行って、東西トレンチおよび南北トレンチで検出した遺構の全景写真を撮影した。翌21日、第4層下面および第5層上面検出遺構の埋土の記録を行った後、調査区の埋戻しを含めてすべての現場作業を完了した。

本調査で使用した方位は図1が座標北、図2・5は磁北、水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)で、本文・挿図中ではTP+○mと記した。

〈調査の結果〉

1．層序(図3・4)

東西トレンチの北壁および南北トレンチの東壁で層序を観察したが、本報告では堀状の遺構や弥生時代から古代の遺物を含む地層が確認された北壁について記述する。

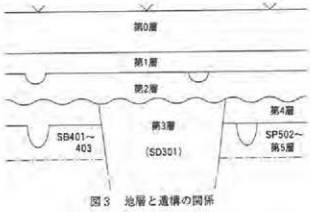


図3　地層と遺構の関係

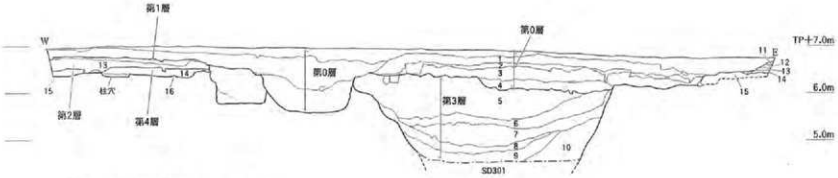
第0層：黄褐～にぶい黄褐色砂礫混りシルト層で、層厚は25～40cmある。本層の上位には砕石を含むほか、全体に第5層の偽礫を多く含む。現代の整地層である。

第1層：灰黄色砂礫混りシルト層で、層厚は10～20cmある。東西トレンチでは本層の下面で溝状の遺構が確認された。古代とみられる土師器の細片が出土したが、層準から判断して近世以降の地層である。

第2層：にぶい黄褐色砂礫混りシルト層で、層厚は10～20cm前後ある。本層は肥前磁器や瓦の細片を含むことや基底面に耕作痕が見られることから、近世以降の作土層と考える。

第3層：本層は堀状の遺構SD301に堆積した地層で、主体は暗褐～灰黄褐色砂礫混りシルトである。17世紀前葉の肥前陶器や平瓦の細片をはじめ、古代の須恵器・土師器片を含む。

第4層：褐色細粒砂混りシルト層で、層厚は10～30cmある。本層はトレンチの北西部のみに分布しており、弥生時代中期後葉の土器片やサヌカイト製の石器遺物のほか、古代の須恵器・土師器片を多く含む。東西トレンチの東部および西部では、本層の下面から平面形が隅丸方形を呈する古代の掘立柱建物の柱穴や土壙および溝が検出された。



1：黄褐色砂礫混りシルト(現代整地層：第０層)
2：にぶい黄褐色砂礫混りシルト(第０層)
3：にぶい黄褐色砂礫混りシルト(地山ブロックを多く含む：第０層)
4：にぶい黄褐色砂礫混りシルト(砕石を含む：第０層)
5：褐色砂礫混りシルト(SD301埋土)
6：にぶい黄褐色細粒砂混りシルト(SD301埋土)
7：灰黄褐色砂礫混りシルト(SD301埋土)
8：にぶい黄褐色砂礫混りシルト(部分的に粘土みをおびる、SD301機能時堆積層)
9：灰黄褐色またはにぶい黄褐色シルト混り細粒砂(SD301機能時堆積層)
10：暗褐色砂礫混りシルト（第５層の礫を多量に含むSD301機能時堆積層）
11：灰黄褐色砂礫混りシルト
12：灰黄色砂礫混りシルト(第１層)
13：にぶい黄褐色砂礫混りシルト(第２層)
14：褐色細粒砂混りシルト(古代遺物が混る、第４層)
15：黄褐色細粒砂混り粘土質シルト(地山、第５層)
16：にぶい黄褐色細粒混り粘土質シルト（第５層）

0　5m
1：80

図４　東西トレンチ北壁断面図

第５層：黄橙色細粒砂混り粘土質シルト層で、当地域の地山層である。本層上面の標高はTP+6.3～6.5mあり、トレンチの東部が西部に比べて幾分高い。本層上面ではトレンチのほぼ全面に渡って、弥生時代中期後葉とみられる円形の柱穴が確認された。

２．遺構と遺物

ａ．弥生時代中期後葉の遺構と遺物(図５・６)

柱穴群　トレンチのほぼ全域において検出された直径、深さとも0.20～0.30mの柱穴群で、柱痕跡は径0.15m前後ある。掘形の埋土は第５層の偽礫を含む黒褐色細粒砂混りシルトで、柱痕跡は多くが黒色粘土質シルトであった。SP511の柱痕跡内では弥生時代中期後葉に属する裏面が浅く凹む壺の底部1(図６)が出土したほか、一部の柱穴から弥生時代中期後葉を主とする土器片やサヌカイト製の石器遺物が出土した。

ｂ．奈良時代の遺構と遺物(図５・６)

SB401　東西トレンチの西端に位置する掘立柱建物で、東西・南北それぞれ１間分を検出した。掘形の大きさは不揃であるが、隅丸方形を呈しており、柱痕跡は径約0.20mである。各柱穴の間隔はSP428～SP426が1.90m、SP426～SP421は1.70mである。掘形の埋土は第４層に酷似しており、柱痕跡の多くは黒色粘土質シルトであった。

SB402　東西トレンチの西端に位置する掘立柱建物で、３箇所の柱穴を確認した。各柱穴はやや不整形であるが径0.20～0.25m、深さ0.25m前後あり、柱痕跡は直径0.10～0.15mである。各柱穴の間隔はSP429～SP435が1.75m、SP435～SP423は1.70mである。掘形の埋土は黒～黒褐色細粒砂混りシルトで、柱痕跡はSB401と同質である。

SB403　東西トレンチの東部に位置する掘立柱建物で、３箇所の柱穴を検出した。掘形の大きさは不揃いであるが、SP416以外は隅丸方形状を呈している。また、SP406・409には直径約0.20mの柱痕跡があったが、規模の小さなSP416では確認されなかった。各柱穴の埋土は黒褐～黄褐色細粒砂混りシルトで、土師器の細片が出土した。

SP430　東西トレンチの西南端にある小穴で、土壙SK518を掘込んでいる。柱痕跡は明らかにできなかったが、平城宮土器Ⅱ～Ⅲに属する須恵器杯Ｂ2が出土した。

SK417　東西トレンチの西北部に位置する平面形が隅丸長方形で、東西1.70m、南北0.75m、深さ0.30～0.40mの土壙である。埋土は第５層の偽礫を含む黒褐色細粒砂混りシルトで、平城宮土器Ⅱ～Ⅲに属する須恵器杯Ｂ壺6をはじめ、当該期の土師器・須恵器片が出土した。

SD419　東西トレンチの西部に位置する幅1.00～1.60m、深さ0.30～0.40mの南北方向の溝である。溝の北側は現代の土採り穴で攪乱されており明らかでない。溝内には下から黒褐色細粒砂混りシルト、オリーブ褐色粘土質シルトの偽礫を含む黒褐色細粒砂混りシルトが堆積しており、弥生土器の細片や平城宮土器Ⅱ～Ⅲに属する須恵器広口壺5、須恵器甕7、口縁端部に強いヨコナデを加えた土師器皿Ａ8が出土した。なお、溝の東部を幅約0.8m、深さ0.3～0.6mで、断面形がＶ字状の土壙に掘込まれている。

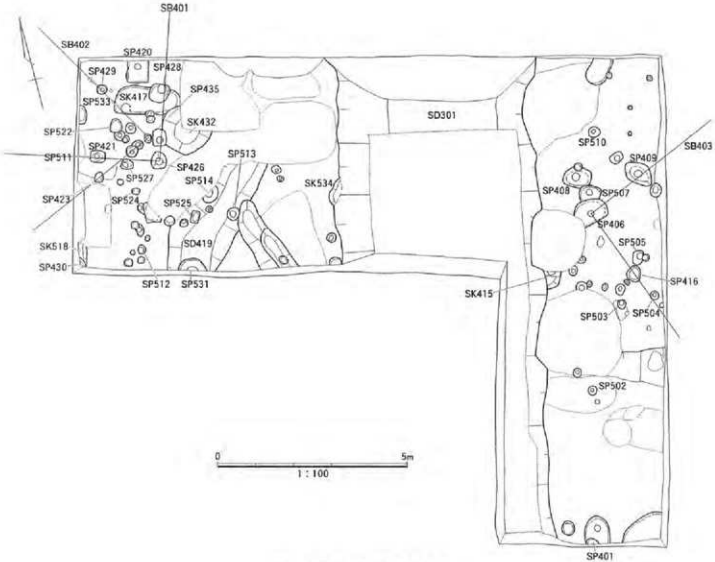


図5　第5層上面の主要遺構配置図

300番台は豊臣後期、400番台は古代、500番台は弥生時代の遺構

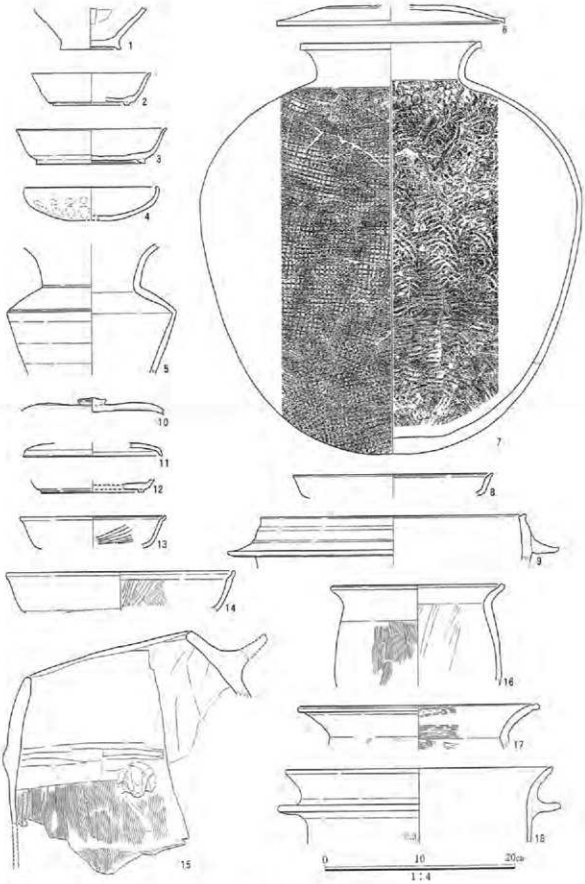


図6　出土遺物実測図

SP511(1)、SP430(2)、SP418(3)、SD301(4・9)、SD419(5・7・8)、SK417(6)、第4層(10~18)

c．豊臣後期の遺構と遺物

SD301　東西トレンチのほぼ中央部に位置する幅約５m、深さ２m以上を測る南北方向の溝で、南北約13m分を確認した。遺構内の堆土は下層が機能時堆積層である第５層の偽礫を多量に含む暗褐色砂礫混りシルト、灰黄褐色シルト混り細粒砂、にぶい黄褐色砂礫混りシルトで、上層の灰黄褐色砂礫混りシルト、暗褐色細粒砂混りシルト、褐色砂礫混りシルトの各層は人為的な埋戻し層である。上層から17世紀前葉の肥前陶器碗の細片、15世紀末から16世紀前葉に属する瓦質土器9および土師器羽釜の細片をはじめ、混入品とみられる６世紀後葉に属する土師器杯4が出土した。

遺構の性格は調査範囲が限られていることもあって判断しがたいが、掘形の法面の傾斜が急で、深さも検出面から２m以上を測ること、17世紀前葉以前の遺物を含むことから、ここでは豊臣後期に掘込まれた堀とみておきたい。

d．第４層出土遺物（図６）

10～18は第４層から出土した土器類で、10～12は須恵器、13～18は土師器である。10は天井部に扁平なつまみのある杯Ｂ蓋、11は口縁部にかえりのない杯Ｂの蓋、12は杯Ｂの底部片、13は口縁端部に強いヨコナデを加えた杯Ａ、14も13と同様の口縁端部を有する皿Ａである。16は口縁端部を丸くおさめた甕で、体部外面の調整は縦方向のハケである。15は移動式竈の上半部で、他に接合しないが下半部の破片もある。焚口上部の庇の大半を欠損しているが、器体の上半に一条の突帯があり、これの下にの先端が下方を向く把手が付く。器体の器面調整は外面がタテハケで、内面は縦および斜め方向のユビナデである。胎土は角閃石粒を多く含む生駒西麓産である。17は大きく開く口縁部に強いヨコナデを加えて端部を丸くおさめた甕で、内面にはヨコハケが残る。18は外上方に開く口縁部の下端に短い鍔が付く羽釜である。調整は体部外面がタテハケで、内面は器面が磨滅しており明らかでない。胎土は角閃石粒を多く含む生駒西麓産である。以上の土器類の多くは平城宮土器Ⅱ～Ⅲに属するもので、既述した本層下面の遺構出土の土器類の時期とも矛盾しない。以上のほかにも、弥生時代中期後葉の土器片、サヌカイトの破砕片などが出土している。

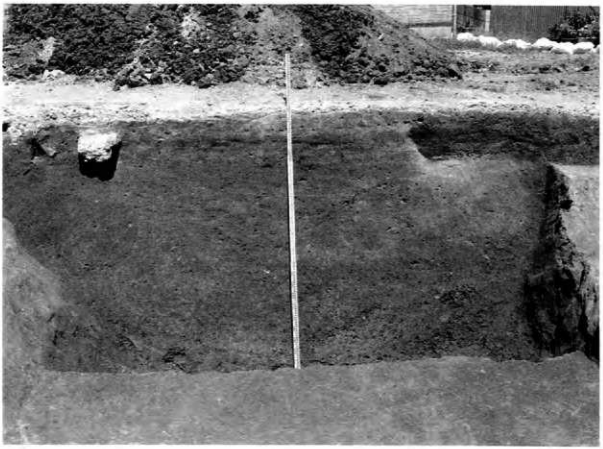
〈まとめ〉

今回の調査では弥生時代中期後葉、奈良時代、豊臣後期の３時期に及ぶ遺構や遺物が検出されたが、これらは調査個所が桑津遺跡の各時期の集落内の一画に位置することを裏付けるとともに、さらに周辺に拡がっていることを示唆している。特に本調査の主体を占めている奈良時代前葉から中葉にかけての掘立柱建物や柱穴群をはじめ、平城宮土器Ⅱ～Ⅲに属する土器類を多量に含む第４層については、今後も拡がりを確認するとともに、集落の内容や性格については資料の蓄積をまって再検討すべき必要がある。なお、豊臣後期の遺構と推定されたSD301は調査範囲が限られているため、全体の形状や性格については明らかにしがたいが、幅が５m、深さが２m以上あることや法面の傾斜が急なこと、17世紀前葉頃に埋戻されて機能を失っていることなどを考慮すると、防御的な性格の強い堀と推定される。調査地の北約250m地点の桑津天神社の東南に立つ大坂夏ノ陣戦没者の供養碑は、調査地周辺が大坂夏ノ陣の戦場であったことを示すものであるが、SD301も大坂夏ノ陣に係わる堀の可能性がある。

今後SD301の南および北側延長部に当る地区の調査が進めば、遺構の規模や性格についても明らかになるものと思われる。

参考文献

古代の土器研究会1992、『古代の土器１　都城の土器集成』
大阪市文化財協会1998、『桑津遺跡発掘調査報告』



東西トレンチSD301北壁断面(南から)

東西トレンチ西部第5層上面の遺構検出状況(西から)

東西トレンチ第５層上面における遺構全景（西から）

東西トレンチ第５層上面における遺構全景（東から）

・調査個所　大阪市東住吉区住道矢田8丁目10－4
・調査面積　98㎡
・調査期間　平成20年2月4日～2月22日
・調査主体　財団法人　大阪市文化財協会
・調査担当者　文化財研究部次長　南秀雄、高橋工

〈調査に至る経緯と経過〉

住道(須牟地)寺跡は式内社中臣須牟地神社の南東に位置し、一町半四方に当る範囲が遺跡として指定されている(図1)。指定範囲の南東には「灰塚」と呼ばれる高さ約1.6mで平面長方形の高まりがあり、その北西の民家の庭にも同様な高まりがある。中臣須牟地神社旧記には、これらの塚が奈良時代に創建され、保延4(1138)年に焼亡した須牟地寺の遺構であるとされており、このことが須牟地廃寺の所在を当地に求める根拠となっている[中村博司1989]。大正年間の地籍図によると調査地周辺の小字名は「阿弥陀寺」であり、東方には「塔の東」があり、これらも廃寺の存在を窺わせている。調査地はこのうちの灰塚に隣接している(図2)。

遺物の発見については、1965年頃に灰塚の近傍で平安時代後期の複弁八葉蓮華文軒丸瓦が採集されている。1990年代初頭に西約50mの地点で、三巴文軒丸瓦・唐草文軒平瓦・連珠文軒平瓦や五輪塔文を押捺した平瓦などの平安時代末～鎌倉時代とされる瓦が出土している[黒田慶一2004]。さらにその南西30mで行われた試掘調査(SJ93－1)では、中世の遺物を含む包含層や柱穴が発見されてい

図1　調査地周辺図

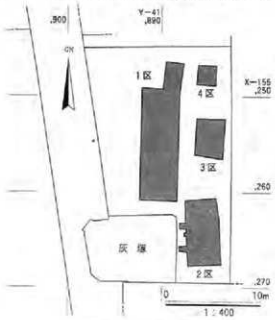


図2　調査区配置図

る。また、調査地から南西に約300mにある常栄寺境内には奈良時代の塔心礎と伝えられる花崗岩の巨石が残されている。

調査地においては、2008年1月24日に大阪市教育委員会によって試掘調査が行われ、地表下50～80cmで地山が遺存し、時期は不明ながらも遺構の存在が確認された。これをうけて本調査を行うこととなった。

掘削は表土から現代の作土である第1層までを重機を用いて行い、それ以下については人力で行った。遺構・遺物が発見された場合は、適宜に写真・図面で記録を行いながら調査を進めた。

調査で使用した水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)で、「TP+○m」と記した。本報告で用いた方位記号は座標北を示している。座標値は国土座標第Ⅵ系(旧成果)によるものである。

〈調査の結果〉

1．層序(図3・4)

第0層：現代の盛土層で、層厚は約25～70cmである。上面の標高はTP+5.8mほどである。

第1層：黒褐色粗粒～細粒砂からなる現代の作土である。層厚は約10cmである。

第2層：暗灰黄色粗粒砂混りシルト～細粒砂からなる作土層である。2層に細分でき、上部は暗灰黄色粗粒～細粒砂からなり、層厚は約12cmである。下部は暗灰黄色粗粒砂混りシルト～細粒砂からなり、層厚は約10～25cmである。本層から出土した遺物には、瓦器椀1・2、備前焼擂鉢3、土師器羽釜4、瓦9・10・12など(図7)、13～16世紀、中世の遺物が含まれるが、最も新しい遺物としては国産磁器の細片があり、本層(一括)の年代は近世である。

第3層：本層と第4層はSD1の内部に堆積していた。本層は黄褐色シルト～粘土質シルトと地山層起源の明黄褐色シルト質粘土の混合土からなり、層厚は最大で約15cmである。SD1を人為的に埋戻したもので、古墳時代後期の須恵器杯身7、中世の瓦器や瓦が多く出土したが、青花碗6からみて本層の年代は16世紀である。

図3　地層と遺構の関係

第4層：黄灰シルト質粘土からなり、層厚は最大で約23cmである。SD1の機能時堆積層で、遺物は中世の瓦や平安時代の白磁碗8などが出土した。

第5層：本層はSD2の内部に堆積していた。暗灰黄色粗粒砂混り粘土質シルトからなり、層厚は最大で約30cmであった。地山層に起源する偽礫を多く含み、SD2を人為的に埋戻したものである。

第6層：明黄褐色シルト質粘土からなる地山層である。

2．遺構と遺物(図5～9)

第6層の上面で検出作業を行い、溝・井戸・柱穴を検出した。

SE3　1区の北側で、SD1の埋土を除去した段階で検出された。直径1.00mで、深さは検出面から(以下同；略)2.3m下まで掘削したが底は検出されず、それ以上の掘削は危険と判断して中止した。

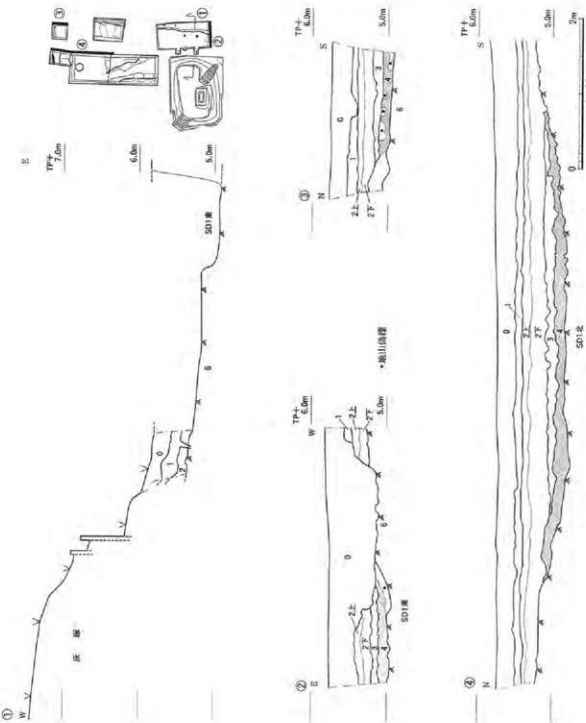


図4　地層断面図

埋土は、0.4m下までは灰色シルト質粘土の自然堆積層で、以下0.7m下までは灰色粘土とオリーブ褐色粗粒砂混りシルト質粘土の混合土で人為的な埋戻し土であった。それ以下は湧水が激しく、重機を用いて掘削したので詳細は不明である。両方の埋土から、多量の瓦・瓦器・木製品などが出土した。

木製品14(図7)は円形曲物の底板であろう。側面の2箇所に木釘が打込まれている。15は大型の串状の木製品で、側面には丁寧に面取を施し、先端を尖らせている。尖った方には穿孔があり、木釘のようなものが詰まっているが何かはわからない。16～21は軒丸瓦、22・24・25は軒平瓦、23は鬼斗瓦、26～28・32・33は平瓦、29～31は丸瓦である(図8・9)。軒丸瓦はすべて三巴文で、文様の隆

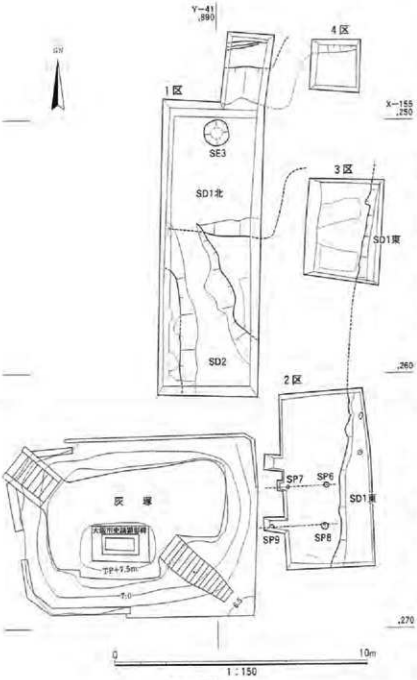


図5　遺構平面図

起は明瞭で、珠文帯の外側にも圏線を巡らせている。軒平瓦は連珠文（24・25）のほかに文様が硬化した唐草文のもの(22)がある。これらは13世紀頃のものである。また、平瓦32・33の凹面中央には五輪塔のスタンプ文が押捺されている。同様な瓦はSD1東の出土品にもあり(34)、過去の試掘調査でも出土している[黒田慶一2004]。

これらの遺物からみて本遺構の年代は鎌倉時代である。

SD1　1区で検出された溝で幅6.60m、深さ0.35mである。東西に延びる。2・3区で西の肩が検出された南北に延びる溝も、堆積状況が同じであることから同一のものと考え、前者をSD1北、SD1東と呼称する。4区の堆積状況も同様でこの溝の内部に当るものとみられる。両者はほぼ直角の位置関係にあるが、3区で内側の屈曲部が検出されず、4区でも外側の屈曲部が検出されないことから、内側の屈曲部は北に突出し、外側の屈曲部も同様になる可能性があるが今回の調査では確認できなかった。

遺構内の第3・4層からは、前述した遺物が出土したほか、三巴文軒丸瓦11や唐草文軒平瓦13などの瓦が出土した。また、第3層からは凝灰岩の破片が出土しており、同岩石が寺院の堂塔の基礎部分などに用いられることが多いことから注目される。

機能時堆積層（第4層）・廃絶時堆積層（第3層）の出土遺物からみて、本遺構はSE3が廃絶した後の鎌倉時代に掘削され、室町時代に埋戻されたとみられる。

SD2　1区で検出された溝状の遺構である。幅は最大で約3.9m、深さは約0.3mで、ほぼ南北に延び、SD1に切られる。2区では検出されていないので、1区の南で終わるのであろう。埋土は暗黄褐色粗粒砂混り粘土質シルトで、地山層に由来する偽礫を含み、堆積されたものである。遺物の出土量は少なく図化できるものはなかったが、瓦器の細片を含むことから、遺構の年代は中世を遡らない。

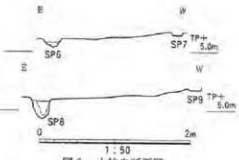


図6　小柱穴断面図

小柱穴群　2区でSD1東の西に4個の小柱穴を発見した(SP6～9)。SP8は直径0.25m、深さ0.27m

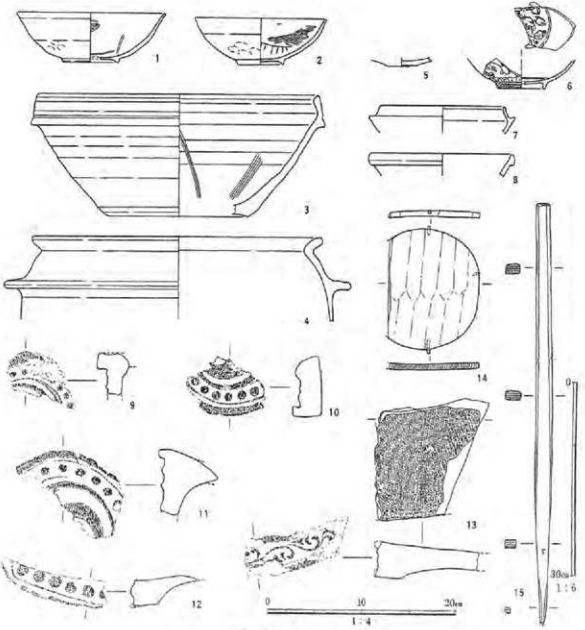


図7　出土遺物実測図
第2層一括(1・2・4・10)、第2層下部(3・9・12)、第3層(5～7)、第4層(8)、SD1東(11・13)、SE3(14・15)

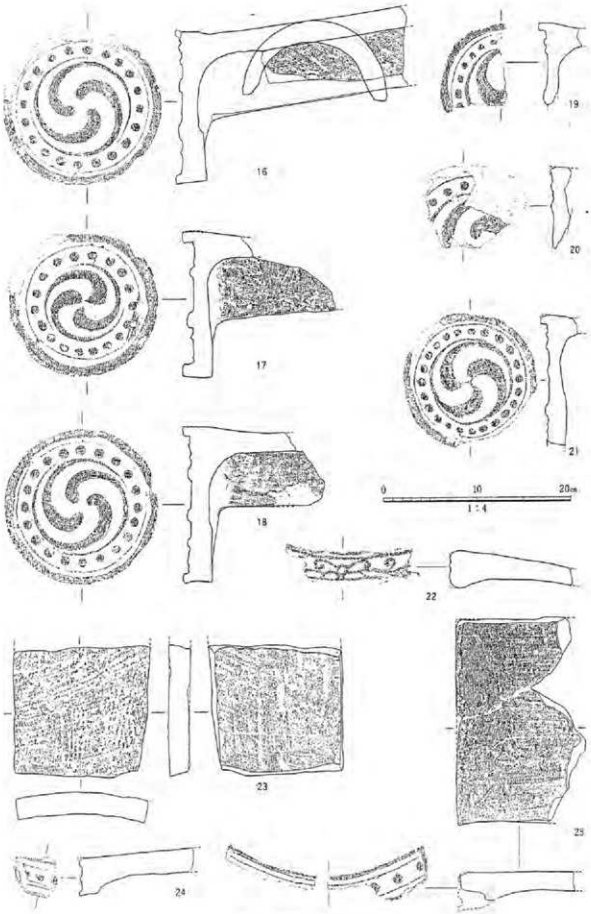


図8　SE3出土瓦等測図

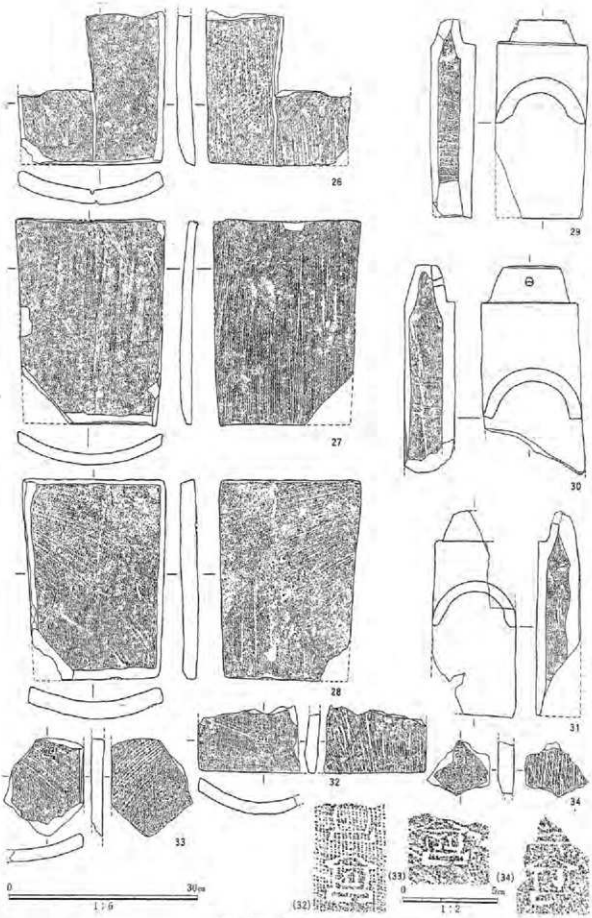


図9　SE3・SD1東出土瓦実測図
SE3(26~33)、SD1(34)

で、柱を抜いた穴が見られた。そのほかは遺存状況が悪く、直径0.15～0.20m、深さも数cm程度で、特に灰塚に近いSP7とSP9の残りが悪く、残存深度が浅かった。SP6・8からは細片ではあるが瓦器などの中世の遺物が出土している。SP6とSP7、SP8とSP9を結んだラインは約1.6m離れて平行で、柱間の寸法はまちまちであるが、小規模な建築物を構成していた可能性がある。その場合、SD1東を渡るための橋梁、あるいは、灰塚が同時期の土壇と仮定して、これに上るための階段などの可能性が考えられる。SP6・8からは細片ではあるが瓦器などの中世の遺物が出土しており、SD1と同時期である可能性がある。

灰塚　東西約9.5m、南北約7m、現地表からの高さは約1.6mを測る高まりで、等高線からみて平面形は長方形を呈する。西側の裾部には花崗岩の大石が埋込まれたように見えているが、高まりとの本来の関係は不明である。2区西側を灰塚に向かって一部拡張し、地層と灰塚の関係を追及した(図4)。その結果、第1・2層が灰塚の斜面にむかって上昇しているのが確認された。これは近世以降の耕作が灰塚の規制を受けていたことを示しており、第2層が形成された近世には灰塚が存在していたことになる(註1)。

3．遺構の評価

今回の発掘調査は小規模ではあるが住道寺跡において初めての正式な調査であり、かつ、須牟地廃寺の遺構とされる灰塚に隣接する核心部分の調査であった。そこで、須牟地廃寺との関係において今回検出された遺構からわかることを整理しておきたい。

まず、遺構と寺院の係りについてである。検出された遺構は、井戸・溝・小柱穴群で、大規模な建物跡など堂宇に直接係るものはない。しかし、井戸・溝及び上層の作土からはコンテナで16箱に及ぶ瓦が出土した。このような多量な瓦の出土から、これらの遺構が寺院に係るものである可能性は高いものと考える。

溝SD1北・東については、屈曲部の構造を明らかにできなかったものの、ほぼ正方位で直角の位置関係にあることがわかった。今回検出した部分が溝によって囲された方形区画の東北の隅角部である可能性がある。その場合、同時性については未検証ではあるものの、灰塚も区画の中の1つの施設であった可能性がある。

遺構の時期については、13世紀(鎌倉時代)にSE3が廃絶し、その後に掘削されたSD1が16世紀(室町時代)に廃絶することがわかった。1965年に採集された複弁八葉蓮華文軒丸瓦を除けば、古代に遡る遺構の存在を積極的に支持する遺物は発見されていない。SE3とSD1は多量の瓦を出土しており、寺院があったとした場合、存続期間もこれらの年代と同様であるとしてよいであろう。とすると、中臣須牟地神社旧記に記載された、奈良時代に創建され、平安時代末に焼亡したとされる須牟地寺の存続期間とは齟齬をきたすことになる。常栄寺所在の奈良時代の塔心礎とされる遺存を評価するのであれば、その時期の須牟地寺の所在は本調査地以外に求めた方がよいであろう。

次に、当地区の財団法人住道会所蔵の村絵図に描かれた寺院との関係である。中村博司氏によれば、この絵図は大和川付替以前の江戸時代前期(17世紀)のもので、灰塚の北方に東西約70m、南北約40

mの境内地をもつ「阿弥陀寺」という寺院が描かれている(図10)。同境内地は、時代がやや下った大和川付替後まもない頃(18世紀)とみられる別の絵図(大阪市史編纂所蔵の写し)では既に畠地となっている[中村博司1989]。前者の絵図をさらに観察すると、「阿弥陀寺」の区画の南にはL字形に曲がった区画を含む一回り大きな長方形の区画があり、両者を併せると全体としてほぼ正方形の区画となることがわかる。灰塚や本調査地はこの南側に含まれているのである。

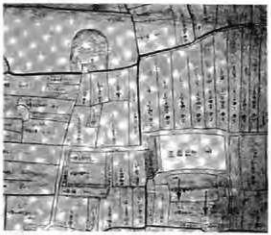


図10　大和川付替以前の絵図にみる調査地周辺
(財団法人住道舎所蔵;[中村博司1989]より転載、右下の矢印が灰塚)

本調査地の遺構が寺院に関する遺構で、なおかつ北方の「阿弥陀寺」が同一の寺院であったとすれば、①鎌倉時代(13世紀)に南側半分の範囲にあった堂塔が室町時代(16世紀)に北半分へ移転し、江戸時代中期頃(18世紀)までには廃絶した。もしくは、②鎌倉時代(13世紀)に南北を併せた正方形の寺域をもっていたものが、室町時代(16世紀)に縮小して南半分が寺域からはずれ、北半分も江戸時代中期頃までには廃絶した。という2通りの可能性が考えられる。本調査の成果も含め、現在ある資料の限りではいずれかに決することは不可能で、今後、周辺における調査件数の増加が待たれるところである。また、地元で伝えられるように「阿弥陀寺」が「須牟地寺」の後身であった可能性[中村博司1989]にも注意が必要である。

〈まとめ〉

今回の調査で得られた成果は以下のとおりである。

・古代の遺物は出土せず、中臣須牟地神社旧記が伝える時期の須牟地寺に係る発見はなかった。
・鎌倉時代のSD1・SE3を発見し、両者から同時代の瓦が出土した。出土した瓦が多量であることから、これらの遺構が寺院と関係することが考えられた。
・今回発見の遺構は、古絵図に見る「阿弥陀寺」と関係する可能性がある。

註)

1)調査地東隣の和田昭一郎氏蔵の近世文書では、近辺の開墾時期が17世紀であることが記されている。

参考文献

中村博司1989、「東住吉区住道矢田の寺院址」:『大阪の文化財』第28号　大阪市史編纂所、pp.45−59
黒田慶一2004、「住道(須牟地)寺跡」:『新修大阪市史　資料編』第1巻　大阪市史編纂所・大阪市史料調査会、pp.290−292

1区
SD1北・SD2・SE3
（北東から）

2・3区
SD1東
（北から）

2区
SD1東・小穴群と
「灰塚」
（北東から）

区　平　　野　　区

平野環濠都市遺跡試掘調査(HN07－3)報告書

・調 査 個 所　大阪市平野区平野市町３丁目５－27
・調 査 面 積　5.25㎡
・調 査 期 間　平成19年11月９日
・調 査 主 体　財団法人　大阪市文化財協会
・調査担当者　文化財研究部次長　南秀雄、絹川一徳

〈調査に至る経緯と経過〉

調査地は環濠都市である平野本郷の北東に位置する。1763(宝暦13)年の『摂州平野大絵図』によると、環濠に囲まれた本郷７町には惣門と呼ばれた13箇所の出入り口があり、調査地はこのうち市ノ口惣門の外側にあたる(図１)。

これまで平野環濠都市遺跡では本郷内を中心に小規模な調査が幾度か行われており、現地表下1.5～2.0mに大坂ノ陣による焼土層が分布することが明らかとなっている。かつて、現在の町割はこの大坂ノ陣以降に施行されたものと考えられていたが、発掘調査によって既に16世紀には環濠の掘削とともに条里地割から現在の町割へと変更されたことが分かっている。

図１　今回の調査区と既往の調査

図２　調査区の位置

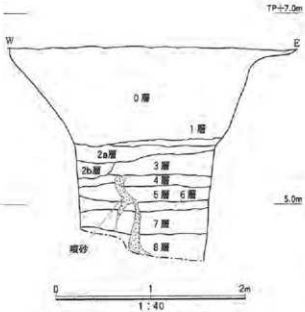


図3　調査区北壁断面

図4　『拱州平野大絵図』

今回の調査は環濠外に位置するが、東側環濠の位置や範囲について詳しい状況を確認するために調査を実施することとなった。

なお、調査区の位置はデジタル・マップ上で合成した。座標は世界測地系による(図2)。

＜調査の結果＞

1．層序(図3)

調査地は駐車場となっており、全面がアスファルトで覆われていた。地表下は厚さ約1mの盛土であった。なお、掘削は地表下2.5mまでを予定していたが、湧水のため2.4mまでに留めた。以下各層について記載する。

第0層：現代盛土である。層厚は約1mであった。

第1層：暗灰黄色細粒砂質シルト層である。旧表土(作土)で、層厚は0.1m程度であった。

第2層：にぶい黄褐色シルト混り細～中粒砂層である。河川氾濫による水成層を起源とするが、人為によりやや作土化が進行していた(2a層)。層厚は0.1～0.2mであった。本層の下部では溝状の落込みに溜まった水成の中粒砂層が認められた(2b層)。

第3層：にぶい黄褐色シルト混り細粒砂層である。作土層で、層厚は0.2m程度であった。

第4層：にぶい黄褐色細粒砂層である。水成層で、層厚は0.1m程度であった。

第5層：褐色シルト質細粒砂層である。水成層であるが、上部に擾乱が見られることから作土として利用された可能性がある。層厚は0.15m程度であった。

第6層：にぶい黄褐色シルト混り極細粒砂層である。層厚は0.1m程度であった。

第7層：褐色シルト質細粒砂層である。水成層で、層厚は0.2m～0.3mであった。

第8層：にぶい黄褐色シルト混り粗粒砂層である。河川堆積層であり、層厚は0.3m以上であった。なお、本層から上方に延びる噴砂とみられる砂脈を確認した。噴砂は第3層の作土層によって削平されていた。

1層で陶器片が出土したほかは出土遺物は認められなかったが、周辺の調査結果を参考にすると1

～８層までの地層は近世後半以降の堆積層とみられる。

２．遺構と遺物

前述したとおり、１層で近代以降の陶器片が出土したが、ほかに遺構・遺物は認められなかった。

＜まとめ＞

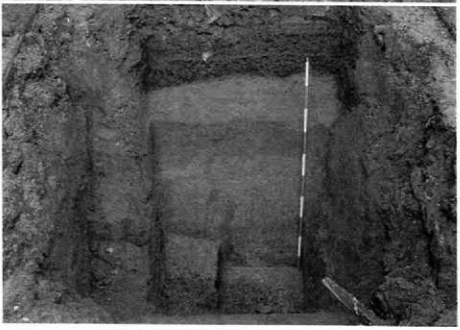
今回の調査では、調査地において環濠は認められず、また耕作地として継続的に利用された状況も見られなかった。調査地は『摂州平野大絵図』の平野本郷の東側環濠と平野川に挟まれた場所にあたる（図４）。近世後半以降、幾度か耕作地として利用されたが、平野川の洪水災害もたびたび被っていたものとみられる。

平野環濠都市の東側の調査件数は少なく、環濠の正確な規模や埋没過程は不明なところが大きい。今後とも周辺地の調査データを蓄積していく必要がある。

調査地近景
（南東から）

調査区完掘状況
（南西から）

調査区北壁断面
（南から）



・調査個所　大阪市平野区瓜破東2丁目750−1・750−4
・調査面積　24㎡
・調査期間　平成19年12月19日〜12月25日
・調査主体　財団法人　大阪市文化財協会
・調査担当者　文化財研究部次長　南秀雄、田中清美

〈調査に至る経緯と経過〉

調査地は瓜破遺跡の北東部の台地上に位置しており、東側には「馬池谷」の南西斜面が検出されて、古墳時代中期から後期にかけての遺構や多岐にわたる遺物が出土したUR00−8次調査地[大阪市文化財協会2002]が、南側には5世紀前葉とみられる花塚山古墳が位置している(図1)。また、調査地の北側には成本廃寺推定地があるほか、南東に位置するUR83−17・26次調査では、奈良時代の多くの瓦が出土しており、寺院に関わる可能性が指摘されている4棟の掘立柱建物が検出されている[大阪市文化財協会2002]。

調査地内の西部で行われた大阪市教育委員会による試掘調査では、地山が比較的浅い位置から確認されたほか、中世以前と推定される柱穴が検出されたため、本調査を実施することになった。

調査は12月19日から敷地内の西部に調査区(図2)を設定し、現代の整地層および作土層を重機で除去したのち、作土層直下の地山面を人力で精査して遺構・遺物を検出した。地山面では古代から中

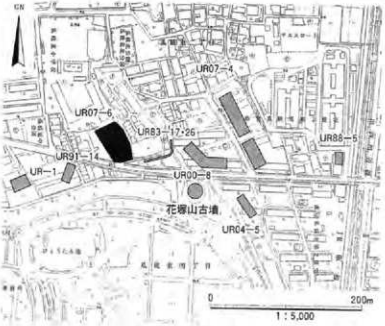


図1　調査地周辺図

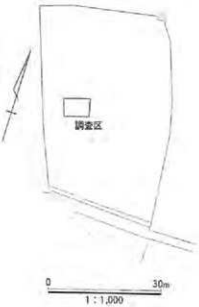


図2　調査区位置図

世の遺物を含む多数の掘立柱建物の柱穴を確認したほか、弥生時代後期の土器や古墳時代中期から後期にかけての須恵器片を採集した。12月19日に遺構検出状況の写真を撮影し、引き続いて柱穴群の調査を行った。12月21日には柱穴群の全景写真を撮影し、遺構の実測図の作成と柱穴の断面、断面図を作成した。12月25日には埋戻しおよび調査機材を撤収してすべての調査を終えた。

水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文・図面上ではTP+○mとした。また、図面上の方位示北記号は図1が座標北、図2・5が磁北を示す。

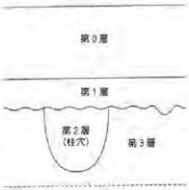


図3　地層と遺構の関係図

〈調査結果〉

a．層序

調査個所の基本層序は、層厚70cm前後の現代整地層(第0層)の下で確認した第1～3層である(図3・4)。

第0層はコンクリート片を含む現代整地層である。層厚は70cm前後ある。

第1層は灰色粗粒砂混りシルト層で、層厚は10～20cmある。現代のガラス・レンガ片を含む。本層の下面で鋤溝を確認した。現代の作土層である。

図4　調査区南壁および西壁断面図

第2層は黒褐色細粒砂・礫混りシルト層で、第3層上面で検出した遺構の埋土に相当する。弥生時代から室町時代の遺物を含む。本層は、調査区内では一枚の地層としては確認されなかった。

第3層は灰オリーブ色粗粒砂・礫混り粘土質シルト、灰オリーブ色シルト・礫混り細粒砂、にぶい黄色粘土混り粗粒砂～細礫などから構成される段丘構成層である。層厚は70cm以上ある。本層上面の標高はTP＋9.90m前後を測る。

b．遺構と遺物

本調査では第3層の上面で掘立柱建物の柱穴49基および土壙1基を確認した(図5)。この内、柱穴については以下の3棟の掘立柱建物として組み合うものを抽出した。

SB201　調査区の東南に位置する1間以上×3間の掘立柱建物と推定される。柱間寸法はSP32とSP35が1.35m、SP32とSP23が0.90m、SP23とSP16が1.20m、SP16とSP18が1.15mである。柱痕跡は直径0.10～0.15mを測る。柱掘形の埋土は黒褐色細粒砂・礫混りシルト、柱痕跡は黒色細粒砂・礫混り粘土である。SP18の柱痕跡内から瓦器皿と凸面に縄タタキメのある古代の平瓦片が、SP32の掘形では凸面に縄タタキメのある古代の平瓦片、同柱痕跡から13世紀代の瓦器椀片が、SP35の掘形では13世紀前半の瓦器椀片と皿が出土した。SB201の時期は、瓦器椀からみて鎌倉時代であろう。

SB202　SB201に重複して検出された2間×3間以上の掘立柱建物と推定される。柱間寸法は、SP27とSP24が1.0m、SP24とSP19が0.9m、SP19とSP42が1.3m、SP42とSP03が2.0mを測る。このうち、柱間が広いSP42とSP03間には攪乱があることから中間に柱穴が存在した可能性が高い。

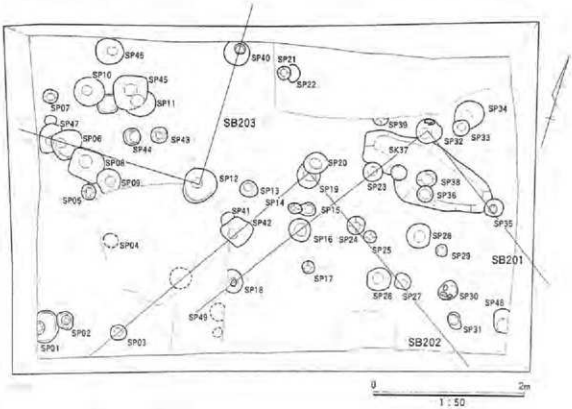


図5　第3層上面の遺構平面図

柱掘形の埋土および柱痕跡はSB201のそれと変わらない。SP03の掘形から13世紀代の瓦器椀片が、SP19の柱痕跡より中世とみられる土師器細片が出土したことから、SB202の時期も鎌倉時代頃と考えられる。

SB203　調査区の北西部に位置する東西および南北とも柱間が1間以上の掘立柱建物である。柱間寸法は、SP40とSP12、SP12とSP06間がともに1.85mを測る。柱掘形の規模は上述したSB201・202よりも大きい。柱掘形の埋土は褐灰色細粒砂・礫混りシルトで、第3層堆積物の偽礫を多く含む。柱痕跡は黒褐色細粒砂混りシルトである。SP06の柱掘形から古代の土師器片、SP40の柱掘形より古代の須恵器片が出土した。柱間寸法や建物の方位をはじめ、柱掘形の埋土もSB201・202と異なることから、SB203の時期は古代の可能性がある。

SK37　調査区の東部に位置する東西1.85m、南北0.80m、深さ0.25m前後の土壙で、3箇所をSB201の柱穴で切られている。埋土は第3層の偽礫を含む灰色砂・礫混りシルトで、13世紀代の瓦器椀・皿をはじめ、土師器釜の破片が出土した。

〈まとめ〉

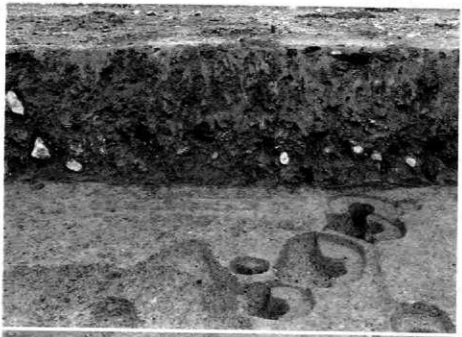
本調査は調査範囲が狭小ではあったが、古代、中世に属する可能性の高い掘立柱建物をはじめ、柱穴群や土壙を検出した。また、いくつかの柱穴では弥生時代後期の土器片をはじめ、古墳時代中期の土師器や須恵器および製塩土器片、縄タタキが施された古代の瓦片などが出土した。以上の遺構や遺物は調査地が弥生時代後期、古墳時代中期のみならず古代以降も連綿と人々の営みの場であったことを裏付けている。特に第3層の上面で検出された鎌倉時代を中心とする掘立柱建物や柱穴群は当地に中世の集落が存在することを示唆している。さらに、今回の調査で出土した古代の瓦は、周辺で確認されている古代の瓦と同様に調査地の北側に推定されている成本廃寺に係わる遺物と考える。

今後も調査地周辺の発掘調査成果の蓄積と検討を加え、当地域の古代・中世の具体像や歴史的な景観を明らかにしたい。

参考文献

大阪市文化財協会2002、『瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅱ

西壁断面近景
（北から）



第３層上面の
古代および中世の遺構
（西から）

第３層上面の
古代および中世の遺構
（北西から）

平成19年度　大阪市内埋蔵文化財

包蔵地発掘調査報告書

発行日　平成20年８月31日

発　行　大阪市教育委員会
(財)大阪市文化財協会

編　集　大阪市教育委員会文化財保護担当
(大阪市北区中之島１－３－20)

印　刷　株式会社　明青